アスタ・ラ・ビスタ！

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アスタ・ラ・ビスタ！

【Ｎコード】
Ｎ８２８７Ｓ

【作者名】
炊飯器

【あらすじ】
２２世紀を間近に控えた時代――――
法も社会も大きく変わり、それでも世界は回っていた。
この世は腐っていると嘯く厭世家、フジタタカオはその世の中で生きている。

prologue

２１世紀が来た！なんて騒いでいたのももう一世紀近く前の話。新鮮に感じていたらしい西暦の千の位の数もさすがにもう億劫で、日々の生活には張りがない。

ダンカイノセダイとかいう歴史上の人物たちが大量にこの世を去った後、日本の人口は激減した。そりゃあそうだろう。ただでさえ結婚率が下がっているというのに子供の数は平均するとほぼ一夫婦で一人程度だ。どうやら日本人は生き残る気がないらしい。

ただし、人口減少の理由はそれだけではない。いつの間にか死は恐怖じゃなくなった頭のおかしい集団が増えて、ひょいひょい人が自殺する。飛び降り、毒死、リスカに水死、なんでもござれだ。そりゃあ土地と環境にもよるけれど、一時期は都会に住んでいる人で飛び降り自殺を見たことのないものは貴重とされるほどだったらしい。わからないでもない。あんだけ高い建物に並ばれたらライト兄弟じゃなくても空の１つ飛んでみたくなる。

だが、そんな集団と隣り合わせに必死に生きている病人たち。たとえば骨髄移植を望んでいる少女とか、心臓を病んでいる男だとか、彼らにしてみたら「てめーの体、オレによこしてから死にやがれ」と怒り心頭を通り越して怒り沸騰だろう。いや、そこまで思っているかどうかは定かではないが、自殺者話を聞いていい思いはしないはずだ。

というわけで８年ほど前に国がついに乗り出した。それは新しい法律としてちゃんと新聞にも掲示され、回覧板にも張り出された。冗談のような本気の法律だ。

その名も『自殺支援法』――――

「自殺者支援法」ではないことに留意していただきたい。この法では自殺志願者など救わない。救われるのは飛び降り自殺者に運悪くぶつかってしまう人だとか、硫化水素で死ぬ奴らの周囲の人間だと

か、そんな人たち。
ようするに、国であなたの自殺を請け負いますからそこらへんで勝手に死なないでくださいね、という人道とか全く無視の法律。
だけどこれがかなり有効で、施行された次の年から自殺者が１０分の１に減ったのは皮肉なものだ。やっぱ人間苦しくないように薬でころりと死にたいらしい。さらに、自殺者のフレッシュな臓器はそのままレシピエントに提供される。まさに捨てるところがない。周囲に慈愛を無差別に振り撒く仏様じゃなくてもどちらがいいかは明白だろう。
一応細かいルールがあるが、そんなことは死にたい奴だけ知っとけばいい。知りたきゃ勝手にググれカス。
ま。要するにそんな時代。

The high world above the hell 1

「藤田さん、今月の家賃早く払ってちょうだい！」
必要以上に音の鳴る今や骨とう品と言っても間違えないスチール製のドアをたたく音で目が覚めた。六畳一間にユニットバスと一応のキッチン。押し入れで寝なけりゃどこで寝るんだバカやろう、とキレたくなるような狭さのアパート。こんなところでも大家はしっかりと金を取り立てに来る。
「ちょっと待ってよ、大家さん。今月はもう払ったでしょ」
今は金の持ち合わせがないのでとりあえず言ってみる。人生なんでもものはためしだ。
「あれえ？そうだったかしら」
なんて、今年で８０・・・あれ？９０だったか？まあ、ばあさんの年齢を覚えるなんて微分積分以上に脳細胞の無駄遣いなのでどうでもいいか。とにかく、確実にボケの始まっている大家は皺くちゃの頬に皺くちゃの掌を当てながら首をかしげている。
「そうだよ！ちょっと、しっかりしてよ」
もうオレの脳内ではオレの口を必死に応援している。なんせ１カ月分の家賃がかかっているんだ。
「そう言われればそうかも・・・。ごめんなさいね」
よっしゃーーー！
「そうそう、話は変わるけど。この前くれたお茶菓子、おいしかったわ」
くそっ、このばばあ、催促してやがる。だが、まあ、こちらは１カ月の家賃代（と言っても大した額じゃないけど）浮いたんだ、それくらいの優しさは見せてやるか。
「わかりましたよ。今度給料が出たら同じものないか探してみます」
買う、という明言は避ける。このばあさん、ぼけてる癖に変なところで記憶力がいい。いや、もしかしたらぼけてないのかもしれない。

この後に来るであろう雑談の嵐を切り抜けるためにスチール製のドアを閉める。またしても小うるさい音がした。
「ちっくしょう、今日は昼まで寝るつもりだったのに・・・」
何もやることないのに起きてるなんてエネルギーの無駄遣いだ。給料日までは無駄遣いはできない。そうは言っても起きてしまったものはしょうがない。とりあえず飯でも食おうかと財布の中を確認してみる。
８９０円――
十分に死ねる金のなさだ。そりゃあ親に頼みこめば振込くらいはしてくれるだろうが、まだ大学に行っていると思っている親には後ろめたくて頼めない。こういうところのプライドだけは一級品なのだから、自分で自分にちょっと引く。
「しょうがねえ、ちょっと便利な財布君に登場を願うかね」
ため息をつきながら部屋を出た。鍵をかけるとき、やはり無駄にでかい音がした。

「やだ」
財布のひもは固い。そこらへんのおばちゃんたちの口元は見習うべきだと思う。
「なんでだよ！お前金持ちだからいいだろ！」
大学で知り合い、在学中に就職が決まってオレのほんの少し後に大学を辞めた友人に見放され、必死にすがりつく。こういうところにプライドはいらない。
「ちっ、あいかわらずけちな奴だぜ・・・」
今まで自分が踏み倒してきた借金の数々を全て棚に上げてつぶやく。ようはこの棚の上のものが今全部落ちてきたわけだ。
「いらっしゃいませ、あなたの名前を教えてください」
奥から出てきた見覚えのない女にマジで驚く。しかも美人。え？なんで、あんた金さえあればどうでもいいの？と思いつつとりあえず会釈をして名前を教える。

「フジタ、タカオ様、ですね。私はエリーです」
その名前を聞いて、ようやく理解する。
「これが巷で噂のメイドロボってやつか」
値は張るが、なんかいろいろ尽くしてくれるらしい。まだ料理をするほどの技術は確立されていないが、掃除や洗濯は完ぺきだ。合成音声は綺麗な声だし、シリコン製の皮膚でちゃんと表情も動く。
「だよな、お前に彼女ができる方が驚きだもんな」
ちょっと皮肉ってみるが、鷹揚に手を広げられた。金持ちと貧乏人では心のゆとりが違うらしい。
「すげえだろ、貸してやんねえけどな」
いらねえけどな。ただでさえ狭いボロアパートをこれ以上狭くされてたまるか。
「こんなもん買う金あったら上にマンションでも借りれるだろ」
ふかふかのソファを我が物顔で占領する。ふむ、なかなかの座り心地だ。
上のマンションは化け物みたいな値段だが、メイドロボもそれに劣らないはずだ。だったらこんな汚い所じゃなく、上に住んだ方がいいに決まってる。
「余計なプライドなんて持たなきゃもっと楽しく生きられるんだよ」
などと、雑草根性万歳なセリフが帰ってくる。要するにメイドがいる生活が幸せらしい。わからん。なにがわからんってこんな破綻者を採用し、もう半年も月給を与え続けている企業の神経がわからん。
「そりゃ、お前。オレの努力が認められたってことだろ。だいたいお前もオレに金せびってばっかいないでちゃんと働けよ。いまだにフリーター生活だろ？」
そのセリフ8回目。そりゃ正論だろうけど・・・と心の中で口をつぐむのも8回目。「わかったよ、じゃあな」と帰るのは何回目だったか。
「さようなら、フジタカオさん」
「・・・・・・」

ロボットに見送られるのと名前を間違えられるのは初めての体験。
とにかく、勝手に奴の家の冷蔵庫をあさって腹を満たしたので、今日1日は何とか生きていけそうだ。問題はあほみたいに暇な時間をどう過ごすか。人間っていうのはめんどくさい生き物で、空腹よりも退屈の方が死にやすい。その証拠が１０年前の自殺者数。もうそりゃすごいもんだったらしい。当時オレは地方にいたから直接は知らないんだけど。
とにかく退屈はやばい。感染力の強い病原体のようにオレの体を徐々に蝕み始めている。というわけでオレは上に行ってみることにする。

第一空中都市東京。それがオレの住んでいる街の名前。人口激減の後、さみしがりやの人間たちは寄り添うように都会に集まった。国としての人口は半分近くになったのに、東京の人口は倍になったというのだから驚きだ。だが、知ってのとおり、東京の面積は小さい。ではどうするか。簡単だ。横に狭いなら上に広がればいい。
というわけで東京では化け物クラスのビルが高さを競い合うように作られ、それに合わせるように道路は天に向かって伸びていった。大概の商社や企業は上、と呼ばれる高い所にあり、煙よりも高いところが好きな金持ちどもはこぞって上に住まいを構える。まあ、利便性を追求していけば分からない話でもない。
下はごく普通の市民から、学生、貧乏人が住む世界。上の奴らにはスラムと揶揄されることもあるらしい。不快感はなはだしいが、不潔感も甚だしいので、わからないでもない。何が不潔かって２１世紀が半分たっても人間が太陽をつくることはかなわないので、要するに日が差さないことだ。かと言って年中涼しいかと言えばそうでもない。うだるような暑さは密閉されたこの空間をさまよい続ける。
まあ、オレが住んでいるようなボロアパートでもエアコンくらいはついているからさすがに死ぬことはないけど。
さて、今は必死に階段を上っている。何年か前につくられた日本で

最も高いタワー。中心にエレベーターが通っているのだが、残念ながらそんなことに金は払えない。
「あー、なんで上ろうとか思っちゃったんだろ」
職務上、体をなまらせるわけにはいかないということを考えていたみたいだが、この繰り返される同じ光景を前にしてやる気だけが死んでいく。テレビで見たことのあるホイールの中のハムスターの気分。
「もうこの辺でいいか」
上る前は確か最上階まで行くつもりだったが、改めて考えるとあほらしい。一応太陽が見える位置まで来れたんだし、文句はないだろう。もともと誰が文句を言うわけでもないけど。
タワーの中層にある展望台。いや、台ではないか。とにかく３６０度ガラス張りのここならば周囲が全て見渡せる。オレは少し息を整えて、南東方向を眺めて見た。
故郷は見えない。はっきり言って見たくもない。あそこには何もなかったし、ここにも何もない。それを承知でここに来た。無から無を眺めているのだから、そこに何かが生まれるはずもない。
「あほくさ」
ため息とともによぎりかけた記憶を吐き捨てる。今にも未来にも意味がないように過去にだって意味がない。そんなもの捨ててしまうべきだ。
何も考えるまでもなく、道路を走る車を見る。十年ほど前にアメリカでつくられた浮く自動車の数は少ない。道路との摩擦を零にし、速く走れるという触れ込みだが、ほかの車も速く走らなければあっという間に渋滞に巻き込まれるので意味がない。そんなのに金を使うのは馬鹿じゃないかと思う。結局燃費のみをつきつめた昔ながらの自動車が仲良く並んで軍隊のように進んでいく。彼らは各々の戦場へ行くのだろう。
「うわっ、やべ！今日バイトだった」
どうやらオレも相当な馬鹿らしい。もう遅刻は必至。とはいえ最近

心証が悪いので、少しでも早く行かなくてはならない。結局、行きは節約して使わなかったエレベーターをわざわざ使わなくてはならなくなった。財布の中身がさらに値引かれてしまったわけだ。

今のバイト先はアパートの近くのスーパーだ。下といえども別に生活に不便はなく、公共機関も服屋もスーパーもデパートだってある。プライドに触りさえなければ何不自由なく生きていける。もちろん区によって格差はあって、オレが住んでいる所は都内で1，2を争う貧乏地区なので、必然的に商品は安い。硬くて安い肉やほかの店では売れないような粗悪商品が馬鹿みたいに売れていく。もちろんオレもそんなバカな客の一人になることだってある。今月の残りはもうばか丸出しだろう。いや、バカにすら届かないかもしれない。なんせ８９０円だし・・・。いや、エレベーターに使ったからもっと少ないはずだ。

腹減ったなあ、と目の前の豚肉（生）にかぶりつきたい衝動を必死にこらえながら商品を並べていく。このオレに製菓を並べさせないあたり、店長もなかなか分かっていると思う。まあ、製菓担当の奴にこっそり掛け合って少々分けてもらっているのは内緒だ。人生持つべきは言いなりの・・・じゃなかった、頼りになる友人である。プルルルルル、とポケットの中のケータイがなんの面白みもない音を奏でる。オレだって普段は別の着信音にしている。つまり、この着信音は普段とは違う異質なものだということだ。

「こら、藤田！ケータイぐらい切っとけ！」

齢５０にもなって、こんなところで中間管理職なんぞをやっている店長は血相を変えてオレの方へ駆けてくる。ジャンクフードを食いすぎて蓄えられて腹の周りの宝箱が揺れる揺れる。体に良くないことは見た目にもよくないことになるという教訓だ、これは。

「すいません。急用ができたんで今日はこれで帰ります」

残った肉を並べ、すたすたと歩く。後ろから店長が「またか、お前！もう首だ！」と辺りの客もドン引きなくらい騒いでいたが気にならない。慣れたものだ。ああ、またバイト探すのめんどくせえなぁ、

と思うくらいだ。
スーパーを出てケータイを取り出す。サイズはウインナーくらいの大きさ。スイッチを押して、画像を浮かび上がらせる。現代の技術を使えば、コメ粒くらいのサイズにできるらしいが、そうするとどこにしまったかわからなくなる奴が出る。間違えなくオレもそのうちの一人だろう。というわけで一番のサイズがこれくらいだったわけだ。何事も適度が一番。
浮かび上がった画像には４０代中盤くらいのはげ始めた中年の顔写真とその男の現在地が出ている。現在地は上の道路の中腹。黄色人種の証であるように地図上に黄色い点で示されていた。
「めんどくせ」
だがやらなきゃいけないのだからしょうがない。こっちだって命がかかってるんだし。現在地まで最短で行けるエレベーターも同時に地図に出ていた。どうせ経費で出る。エレベーター台をけちる必要はない。
「ったく、死にてえ奴は勝手に死なせとけばいいのによ」
もう何度目かもわからないため息をつく。エレベーターは地下鉄と同じくらい速い。下に流れる景色を見ていたら何を思う暇もなく上の道路についてしまった。相変わらず車ばかりであわただしい・・・と思いきや車は全く通っていなかった。この夕方に通ってないはずもないからすでに止めてしまったんだろう。どうせ理由は工事とかなんかだ。恐るべし、国家権力。
はてさて、ケータイの地図の黄色い点が重なるところにさっきの画像のさえない男がいる。表情の死んでいることといい、よれよれのスーツといい、同一人物と思うのには多少無理がいるが、そんなのは明日には忘れてしまうことだ。誰であろうと関係ない。
その中年、どうやら自殺しようとしているらしい。自分の車を脇に寄せて、道路の縁にまたがる形になっている。お馬さんごっこを思わせないでもないポーズ。男は下を見ては青ざめて首を振り、車に戻ろうとするが、やっぱり再び縁にまたがり・・・を繰り返してい

る。滑稽なことこの上ないが、気持ちはわからないでもない。なんせ道路は地上１００メートルくらいある。もう暗くなっているから下なんて見えない。今から自分が落ちるのはどう考えても地獄に見えてしまうだろう。共感でき過ぎて笑えてきた。だが、なんで死んだ後のことなんて考えなくちゃいけないんだ？世界に広がる宗教の開祖様どもはみんなこぞってどうかしてると思う。生きてる人間たちをビビらせて何が楽しかったんだろうか。

「おい、おっさん。そこから飛び降りようとしてるんだったらやめた方がいいぜ」

とりあえず声をかけて見る。オレの声をきっかけとして落ちないか少し心配だったが、大丈夫なようだ。おっさんは振り子のような苦悩をやめ、オレを見た。

「き、君は・・・あ、あれか？じ、自殺者支援の、も、ものか？」

日本語ってすげえな。こんなしどろもどろな言葉でも伝わるんだもんな。

「ちげーよ。オレは自殺支援のもんだ。オレが支援するのはあんたじゃなくて自殺の方。オッケー？」

「た、たのむ。か、会社に掛け合って、わ、私の、リ、リストラを、と、取り下げてくれ」

聞いてねーし。漫画だったら今オレの額に怒りマーク。

要するにリストラ。要するに挫折。人が死ぬ理由は今も昔も変わらない。自分ではどうしようもない苦難にぶつかったとき。このおっさんはリストラというわけだ。実にわかりやすい。こいつがリストラされた理由も含めてすっげーわかりやすい。

「それはムリ。そんな力あったらちみちみバイトで細々暮らしてねーよ」

オレが知るか。てめーでなんとかしやがれ。

「そ、そんな・・・。き、君にもわかるだろう？に、２０年務めてたんだぞ？わ、私の、じ、人生の、す、全てだったんだぞ！？そ、それをほんの一瞬だ。い、一瞬で、や、奴らはわたしを、ふ、踏み

にじった！だから、わ、私は、し、死んでやるんだ！」
「あんた今から自殺？すんの？いっとくけどそこから落ちたら大変なことになるよ。１００メートルだぜ？何秒自由落下するか計算してみたか？その計算に空気抵抗は組み込んだか？人生何回後悔すんだっつの」
だいたいこんなおっさんに降ってこられたんじゃ下にいる人間にも迷惑だ。ぶつかったら軽く消滅できる。人間っていうのは結構スカスカだからな。木っ端みじんになるのも簡単だ。
「どうせ自殺すんならセンターに入れよ。そしたら臓器の費用でアンタの奥さん死ぬまで生きてけるぜ」
結婚してるかしらねーけど。ああ、なんかもうイライラしてきた。このおっさんいい年こいてさっきから濡れた子犬のような目でオレのこと見てくんだもんなあ。いや、濡れた子犬とか見たことねぇけど。どんだけ躾けられてるか知らないが、なんでダンボールの中でじっとしてんだよ。
「し、しるか！あんな奴のことなんか！！」
あらら重症。
家庭の不仲にリストラに、陰気な性格でトリプルパンチのトライアタック、と。オーケー。時間も時間だし、そんな恵まれないおっさんにオレが合いの手を差し伸べてやろうじゃねえの。愛の手じゃねえけどな。
「わかった。んじゃオレも一緒に死んでやるよ。踏ん切りがつかなかったんだろ？」
すたすたとおっさんに近付く。おっさんはオレを警戒しない。拾われた子猫のように目を輝かせている。いや、捨て猫も見たことねぇけど。すがりつくようにオレの肩に手を置いた。うざい。くさい。触るな穢れる。
「ほ、本当か。た、助かる・・・」
マジでむかつく。いいからそのくせえ手をどけろ。
静かだが遠くから響くエンジンの音。おっさんはどうやら気付いて

いないらしい。好都合だ。オレのおっさんの左腕を掴む。
「よっしゃー、さくさく逝くか。さらば、現世。我らは苦しみのない世界に！ほら、おっさんも」
「さらば、現世。我らは苦しみのない世界に！」
「声が小さい！」
「さらば！現世！！我らは！苦しみの！ない世界に！！」
「うるせえ！！」
叫び声とともに掴んでいたおっさんの左腕をぎゅっと締める。そのまま一本背負いに投げつけた。投げる先はハイウェイの縁の向こう側ではない。コンクリートの地面でもない。簡単に死ぬおっさんをわざわざコンクリートに叩きつけて引導渡してやるほどオレは人間やめちゃいない。投げる先は何もない道路。
もっとも、それは一瞬前の話だが。
キィィィィ
オレたちの目の前で黒塗りのバンが急停車する。ドアが開いていて、おっさんは地獄に落ちるようにその中に吸い込まれていく。代わりに別の人影が落ちて、ドアは閉まった。加速のみを追求した大型車は何の挨拶もなしにすぐに行ってしまった。ばいばい、おっさん。これからドナドナのように売られて来い。冗談抜きで。

The high world above the hell 3

「御苦労、ホーク」
目の前で立ちあがったのは２０代後半のお姉さん。実年齢は怖すぎて聞けない。いや、一度うっかり酒の席で聞いてしまったのだが、その後、怖すぎることになったのでもう聞けない。お互い年を取って、オレの方が長生きすれば葬式とかで享年としてわかるだろう。まず間違いなくオレが先に死ぬだろうけど。
「毎回毎回思うんスけど意味あるんスかね、こんな仕事」
めんどくせーし。精神衛生的に良くねーし。全国のお化け屋敷巡って雑誌にコメント書いてたやつの方がよっぽど健全だろう。なんせこっちはあんな人間の負の精神しか持ってないやつらの相手ばかりしているのだ。
「そんなことはないさ。少なくとも今日のおまえの働きで下で直撃する予定だった尊い国民の命が救われた」
「じゃあオレの給料上げてくださいよ。今月もマジきついんスから」
「そうだな。お前が全身を改造して身も心も私たちに売り渡すというならば考えてやらんでもない」
これだよ・・・。正真正銘のサディストにして正義の味方。いや、その二つが揃っちゃダメだろ。
「近々お前のところに寄ることになると思う。予定を開けておけ」
いつもながら時間の指定はしない。１００％自分の都合。要するにこの人はオレに引きこもっていろと言いたい。餓死しろと同義だ。
「餓死なら私の目の届くところでしてくれ。お前の臓器はぜひとも回収したいからな」
いや、そこは助けろよ。なに目の前で餓死人が誕生するのを見てるんだよ！
「冗談だ」
じゃあ笑え、とは口が裂けても言えないが。この人は笑わない。そ

ういうことになっている。真顔か怒るかしかできないのだ。
おっさんがここに来るまで乗っていた車に乗る。どうやら車の回収のために下りてきたらしい。相変わらず仕事熱心な人だ。
「では、またな」
人を殺せるんじゃないかっていうくらいの眼力を持つ真顔のまま手を上げる。オレも手を上げ返した。
「できるだけ早くお願いしますよ」
彼女は返事をすることなく、急アクセルを踏んで走って行った。オレはエレベーターに乗るために縁を歩く。すでに解禁された道路を車が走り始めていた。
おっさんは言っていた。いや、言ってなかったかもしれない。人間っていうのは苦難があって、それが乗り越えられずに死ぬ。家族とか、自分を生に結びつけるものがなくなったから死ねる。やっぱ言ってなかったが、言いたかったとことは確かだろう。少なくともオレはおっさんからそれを感じた。
だが、残念ながらオレにはそれはわからない。オレの人生は順風満帆だった。オレにはちゃんと家族がいた。それでもオレは死のうとした。結局こうして生きちゃいるけど、とにかくオレが死のうとした理由はおっさんとはまるで違う。
『わかるだろ？』
ああ、わかるよ。あんたのような奴はごまんといる。だからわかる。小説の中にあんたはいる。テレビドラマにあんたはいる。だけどあんたはオレの世界にはいない。だからオレはあんたに同情できない。それどころか記憶にとどめる事もできない。寝て起きたらすでに過去。現在や未来と同じように意味のない過去。そんなもの記憶にとどめるなんて脳細胞の無駄遣いだ。
「うし、帰るか」
エレベーターのボタンを押す。どうせ必要経費だ。・・・多分。
明日の朝もオレは大家に起こされるだろう。家賃の徴収をされるだろう。同じようにオレは言いくるめる。大家は言いくるめられる。

意味のない今日。意味のない明日。たまに思う。誰かがオレの人生を読んでいて、その小説は誤植にまみれてるんじゃないかと。だが、そんな思考はすぐに追いやってしまう。考えてもわからないことは考える必要がないことだ。

この街は地下にある。コンクリートの地上を大地とするならば１００メートル下のここはまさに地獄だ。鬼たちに囲まれて、オレたちは苦しみを味わう。そのことに比べたら、オレの人生が間違いだらけのストーリーだとか、そんなことはどうでもいい。さっさと読めと思うだけだ。

家について、スチール製のドアを開ける。オレの背後ででかい音を立てて閉じる。恐らく裏表紙が閉じられた音だろう。だから今日の物語はここでおしまい。第何巻かは知らないが、明日は別の表表紙が開かれる。開かれないならそれでいい。オレにとって、生きるのはいささか退屈すぎるから――

Anyone! Help me! 1

小学生の頃、担任だった教師が言っていた。自分だって地方出身で、都市になんて数えるくらいしか行ったことがないくせに、妙に威張り散らしていたじいさんで、学年が一つ上のリーダー面していた奴の次に嫌いだった。

『人間には2種類しかいない。勝者か敗者か、だ』

馬鹿じゃないのか、子供心にオレはそう思った。

人間には2種類しかいない。オーケイ、それはオレも認めよう。確かにその通り。だが、後者は違う。勝者か敗者かならば、戦うことすらしないものは人間ではないのか？敗者以下の存在は生きる価値がないのか？

だから人間を2つに分ける方法は古今東西一つだけ。

つまり、自分か他人か――――

この世の中に他人は腐るほどいるのに、自分はたった一人しかいない。それは誰にとっても同じことだ。だから自己中心的に生きて何が悪い？誰もがそうすればいいだけの話じゃないか。それで世界はうまく回るんじゃないのか。そんな風に考えていた。

いやな子供だったと自分のことなのに他人のことのように思う。子供のころのオレは誰にでも勝てた。地方という井戸の中でなら勉強だってなんだって負けなかった。だが、現実は違った。オレは圧倒的な弱者で、敗者にすらなれない存在だった。

「――――夢か」

ずいぶんと昔のことを夢に見るものだ。いや、ほんの１０年ほど前のことだから言うほど昔じゃないのか。それでもオレのくそみたいに長い人生のほぼ半分のころだ。十分すぎるとは思う。

時計を見ると昼近かった。大家は来ていないようだ。もしかしたら来たのに、オレが気付かなかっただけかもしれない。どちらでも同

じことだろう。
無為に過ごすのが嫌で、起き上がってスチール扉のノブに手をかけた。ふと、昨晩家から出ないように言い含められていたのを思い出す。ずいぶんと一方的な約束だったが、違えたらどうなるかわからないのでおとなしく家にいることにする。金もないことだし。
ケータイを取り出してネットを見る。ツールの機能とか、動作環境とかは大幅に改善されたが、ネットの機構そのものは大して変化していない。家庭用のスパコンもなければ、量子コンピューターが世界を支配する時代も来ていない。結局使い勝手が良かったということだろう。
ほかにやることがなかったので昨日のおっさんのその後について調べて見る。期待はしていなかったが見つからない。そもそもおっさんの名前も知らないので調べると言っても適当だが、あんまり興味ないし、あの車に乗せられたということはセンターに行ったはずだから、結果はまあ、だいたいわかる。
センター。東京都立自殺支援センター。
ほんの8年ほど前につくられた自殺支援法に基づき設立された施設。国民の中で知らぬ者はいないほど有名な施設。しかし、その実態や、場所まで知っているものは非常に少ない。恐らく職員と権力者、そして例外的にオレのような奴だけだ。大半の国民にとってはあまり関係がない。あるのは自殺者と臓器移植を待つ患者くらい。
少し思い出しかけたところを、ノックの音が我に返す。水道か電気の集金だろうか。あいにく今は金の持ち合わせがないので居留守を使わせてもらおう。
コンコン、はガンガン、になり、ドンドン、になる。計10秒ほど。最近の集金屋さんはずいぶん粘る。大した金じゃないのに。
ダァン！
さすがに血の気が引いた。オレはこの音を知っている。この音が奏でる恐怖の音色を知っている。そして、世界広しと言えどもこの国のこんなボロアパートの前でそんな音を奏でる人物など一人しかい

ないことを知っている。
「トモさん・・・」
開け放たれたドアはカギの部分から硝煙が上がっている。もちろんドアがひとりでに爆発するわけもないからトモさんがホルスターにしまった黒い塊が犯人であることは言うまでもない。
「居留守を使うなんて良い度胸ね」
にこりと笑うトモさんこと井上友。まあ、何というか、オレの監察官である。
今日はこっちの人か、と安堵する。
「来るなら連絡ぐらいしてくださいよ。原始人じゃないんですから」
常識である。もっとも、この人に常識を説くぐらいなら、原始人にケータイの使い方を説明した方がまだましだろう。
「あらあら、タカ君。ひっどいわ～。お姉さん泣いちゃう」
昨日と一転、表情豊か、デフォルトが笑顔。しかしドS。最後のがなかったら同一人物かどうか法廷で争わなければならない。
「それで、一体何の用スか？ちゃんと普通に暮らしてますよ。問題は起こしてないですし」
わざわざこんな狭い我が家に来ていただくほどの理由もない。トモさんはそんな狭苦しい我が家に断りもなくずかずかと乗り込んでくる。
「その割にはバイトを転々としてるみたいだけど？」
「うっ・・・」
さすがオレの監察官。オレのことはばっちり調べつくしている。しかし、１つ言わせてもらうなら、間違いなくトモさんから来る仕事のせいだ。そりゃあ１００％そのせいじゃないけど。
「まあいいのよ、そんなことは。タカ君はしっかりやってると思う。あ、そうそう。滞納してた家賃はわたしは大家さんにさっき払っといたから。もちろん給料から天引きね」
鬼だ、この人！大家の記憶というドブにオレの金を捨てやがった。
ああ、ただでさえなけなしの給料が・・・。

「ま、回りくどいのは嫌いだから単刀直入に言うわね」
トモさんは突然ケータイを取り出し、超高速の操作をオレに見せつけた。なんだろう、緊急の上司からの連絡とかだろうか。と思いきや、トモさんがオレに見せたのは、ていうか映像を浮かび上がらせ、お互いに見せるようにしたのは、とある掲示板だった。味や匂いの共有もできない、音声も出ないごくごく普通の昔ながらの掲示板である。
「へえ、まだそんなの残ってたんスね」
現代の奇跡じゃないだろうか。結構書き込みが頻繁になされているようだし。しかしどうでもいいことを書きこむならこういう掲示板の方がいいのかもしれない。
「それで？見つけた奇跡を自慢しに来たんスか」
などと、軽くからかってみる。こっちのトモさんならたぶん許容範囲内。あっちなら今頃オレの眉間あたりの風通しが良くなっている。案の定、トモさんはぷくっと頬を膨らませる。やべえ、その表情反則。あっちのトモさんがやってくれれば文句ないんだけど。希望的観測はいけない。決してありえないことは想像をするだけもったいない。
「そうじゃなくて、内容のほう！」
そりゃそうだろう。というわけで書き込みに目を通してみる。大半はつらつらとどうでもいいグチやらオタトークやらが占められている。見ててイライラする。
そんなの掲示板じゃなくて隣の席の奴と話せよ、と思う。もしかしたら隣の席との1メートルよりも掲示板のほうが近いのかもしれないが。このあたりの病気は21世紀が始まった頃とあまり変わらない。
「この“ジェノ”ってなんスか？」
最近の項目になるにつれて、その単語が頻繁に登場している。非難する声、称賛する声、さまざまだが。
オレが顔をあげてトモさんを見ると、トモさんが呆れた顔でオレを

見ていた。ともすればあっちのトモさんと見間違えてしまいそうだ。
「君って本当に現代人？ネットでニュースくらいチェックしなさい！」
トモさんはオブラートを大量生産している。ようするに「アンタバカァ？」と言いたい。その辺の行間背紙が読めてしまうあたり、受験勉強しなけりゃよかったなあ、とか思ってしまう。
言われてオレのケータイをネットにつなぐ。ニュース欄をチェックすると、確かに「また“ジェノ”の被害者か」というニュースがあった。
「先月あたりからだったかな、自殺者が増えたの」
トモさんは億劫そうにため息をついた。つまりここで言う「自殺者」とはセンターによらない自殺者ということだろう。こっちのトモさんもあっちのトモさんもその存在を嫌っている。というよりも嫌悪している。憎悪とまではいかないが。
「それとこの“ジェノ”っていうのがなんの関係があるんスか？」
ニュースを読んでもよくつかめない。自殺は所詮“自”殺。勝手に死ぬのだから被害者も何もないだろう。自殺に見せかけた他殺というのならわかるけど、トモさんが自殺と言っている以上そうではないのだろう。
「“ジェノ”っていうのは自殺幇助の犯人よ。ネットを使って集団自殺に誘って、でも自分は死なない。被害者は確認されているだけで１８人。未確認のを含めると倍にはなるかも」
日本の年間の自殺者数はどれくらいだったか。確かセンター出願者を含めても１万を少し越えるくらいだったか。だとしたらなかなかの脅威である。
「でも日本じゃその程度の自殺幇助じゃ罪には問われませんよね、確か。中国なんかだとあるって話ですけど」
今も昔も「お前のせいで死んだと遺書を書いて自殺するぞ！」なんて言う脅迫が普通に通用するらしい。日本だと「ふ～ん、じゃあ勝手に死ね」って感じだ。いや、そうもいかないだろうけど。まあ、

あんまり度を越えていると刑法２０２条が火を吹くからな。
「うん、そこが問題。仮に犯人を特定できたとしても逮捕はできない。だから・・・」
うわっ、すっげーいやな予感がしてきた。今ここから超逃げ出したい気分。まあ間違いなく後ろから撃たれるだろうけど。トモさんなら簡単にやる。それも足とか、動けなくなる程度に。
「だからそこをタカ君に解決してもらおうっていう話」
「やです」
即答。当然である。めんどくさいし危ないし。あの日以降、何よりも普通に、安全に暮らしていくことを信条としているオレである。もっとも、もうすでに相当道を踏み外しているのだけど。この人と知り合ってしまった時点で転落人生である。
「そんなの権力があるところで大々的にやればいいじゃないですか。いまさら拘束なりなんなりで躊躇したりしないんでしょ？」
本当にいまさらだ。わざわざオレのようなやつに依頼するわけがわからない。
トモさんは目を細める。口元は笑顔のままだけど。ちなみにこれは少しイライラしてる時の表情。オオカミの前にたたずむ羊の気分。いたたまれなくなって立ち上がり、蛇口をひねって水道水を飲む。やっぱり都会の水はまずい。これだけは地方のほうがよかったと思う。
「ふ～ん、いいのかなあ？成功報酬は2カ月分の給料なんだけど」
ピクリ、とオレの食指が動く。錆びついたロボットのように首がギギギと回る。トモさんを見ると笑顔で小首をかしげている。
「今人手が足りないの。ほかに駒はいないし、それでタカ君のところに来たってわけ。もちろん必要経費は出すわ」
センターは国の重要な医療機関となりつつある。世界各国に提供という名の臓器売買までしているので予算は無尽蔵といってもいい。オレの給料なんて蔵の中の米俵の中のそのまた米粒のようなものである。しかし金はあるが人は足りない。これは大きな矛盾である。

矛盾であるが、オレにとって好都合であることに変わりはない。
「やります！」
トモさんの手にすがりつくオレ。情けないこと山の如し。しかし現実問題金がない！首になったバイト先から今まで給料分が振り込まれているが、それも雀の涙ほど。新たなバイト先を探し、最初に給料をもらうまでに確実にオレは干からびる。背に腹は代えられないのだ。
「はい、契約成立。条件は進行状況を毎日9時に連絡すること。細かい指示はまた追って連絡するから」
トモさんは立ち上がる。話はこれで終わりだということだろう。ものすごい忙しい人なのである。オレの部屋にこんなに長い時間（それでもほんの15分くらいだが）いてくれたことがすでに奇跡である。
「あ、そうそう」
もう役割を終えて永眠しているドアノブに手をかけて、トモさんは振り返った。まだなんかあるのだろうか。
「ドアノブ、壊れてるみたいだからちゃんと直しておくこと。じゃ、お願いね」
バタン
無駄に大きな音とともにドアは閉じる。オレは呆然と立ち尽くすほかにない。そりゃあ壊れてるみたいだろうよ。何せ誰かさんが盛大に壊してくれたんだからな！などという相手は誰もいないので言わない。泥棒に入られて困るような部屋でもないのでしばらく鍵なしでもいいだろう。
改めて今の話を思い返し、めんどくさいな、と思う。しかし2カ月分の給料は魅力である。はかりにかけたら利益の方が上回ったのでオレはすぐに行動を開始することにした。なんといっても成功報酬である。成功すればその時点で報酬が出るというわけだ。
成功、成功ねぇ
「・・・あれ？」

ふと、思い当たる。「警察じゃ逮捕はできないからオレに解決してほしい」という話だった。つまり何だ？オレに逮捕しろってことか？どこまでいったら成功なんだ？

「もしかして、だまされた・・・？」

いや、そんなはずはないだろう。とにかく自殺幇助を止めればいいだけだ。何かすっげーハードル上がった気がするけど。天秤が半端ないことになってるんですけど。

「はあ」

ため息。そりゃため息の1つもつきたくなる。どうしてオレはこんな馬鹿なのかと。

「まあいいや」

どうせほかにやることがない。今のオレが文字どおりの意味で生きていくには経費と称してなんとかして飯を食うよりほかにないのだ。海の上にござを引いて太平洋を渡るくらい不可能に近いが、やらなくても死ぬ。ならやらずに死んだ方がいいっていうのがオレの信条なんだけど、しかしトモさんには逆らえないのであった。

「あ、でもあのトモさんで来たってことは一応ちゃんとした依頼なのかな」

昨日のトモさんならば問答無用に「やれ」だ。

「はあ」

ため息。まあいいさ。ごちゃごちゃ考えるのは後だ。

なけなしの小銭しか入っていない財布とケータイをポケットに入れ、壊れたノブを回し、部屋を出た。

Anyone! Help me! 2

日本が一極集中化してもっとも効果があったのは経済面だ。何せ公共施設の数が少なくて済む。建設費、維持費、改築費。そのすべてを日本国内にいくつか点在している都市にまとめればいい。そしたら最大の都市である東京の公共施設の設備は飛躍的に上昇した。その最たるものの一つが都立サブラボ。要するに誰でも使えるパソコンが置いてある施設だ。

開いている席に腰かけ、ケータイをセットする。こうしなければネットは使えない。一応機密ではあるのでヘルメット型のインプッターを頭に取り付け、目を閉じて情報を直接脳内に受信する。こうすれば画面には何も映らず、周りの奴らにはオレが何を調べているかは分からない。

とりあえずさっき見せてもらった掲示板を見てみる。さっき見たとおり、大半はどうでもいい雑談だ。他愛もないトピックばかりだが、先月のある日を境にそのテーマは“ジェノ”に終始していた。

別のウィンドウで事件履歴を探し出し、日付を照らし合わせて見る。“ジェノ”が連続犯だというのもただの憶測にすぎないようだ。自殺幇助の跡が自殺サイトに残っているだけで、それが“ジェノ”であるかは分からないし、“ジェノ”はとっくに死んでおり、別の誰かがそれを名乗っているだけかもしれない。

掲示板の書き込みは2件目の事件の直後にされている。用語が多いので、解読しながら探っていく。要するにこんな感じだ。

「ジェノに対する意見を求ム！」

「ああ、報道されてますよね。集団自殺、でしたっけ？」

「死んでないじゃん（笑）最初から殺すのが目的だったりして」

「結局愉快犯じゃねえのｗｗｗｗ？」

「ああ、なるほど、自殺支援法をディスってるわけですね」

「え～、そんな深く考えてないんじゃないの～～」

「そうそう、一緒に死ねる奴見つけて喜んでる自殺者を嗤ってるだけだってｗｗ」
「う～ん、情報が少なすぎますね。２回目の自殺者の中にいるかもしれませんし・・・」
このあたりで事件の概要をかいつまんでみてみる。
１回目の自殺者は３人。車の中で一酸化炭素中毒という実に古典的な方法。
２回目は４人。集団飛び降り。時間は深夜だったため、自殺者という名の隕石に衝突した被害者はいない。
・・・この現場オレん家の近くじゃん。知っとけ、オレ。
３回目は今月に入ってから。５人。薬物の服用。市販の睡眠薬で、大量摂取で死にいたる。
「またですか、ジェノ！！」
「マジビビる！自殺サイトも見てみたけど、ジェノってチョー口うまいの！なんか救いの神みたいな！！惚れちゃうかも（笑）」
「周りのヤツもよく乗るよな。・・・って死ぬヤツらにはそんなこと関係ねえかｗｗｗ」
「少なくとも、都内の人間であることは確かですよね。何が目的なんでしょうか」
「愉快犯に一票」
「僕はやっぱり反支援法団体に一票ですね」
「そもそもなんでこんなことするんだろ？意味ワカンナインダケド」
「愉快犯なら相当頭イってるヤツだな。そんなヤツのこと考えるだけムダ」
「いやいや～、そこを考えるのが面白いんじゃないですか。やはり現代人の心の闇ってやつですかね」
「ガッコでいじめられたとかｗｗｗ」
とうとうオレは限界が来て、掲示板のウィンドウを閉じた。これ以上こいつらの腐った掛け合いを見ていたらパソコンに八つ当たりしそうだ。残念ながら八つ当たりにそこまで金を払うことはできない

ので、ストレッサーの方をつぶしておく。
４回目、集団で首をつっている。人数は６人。
「３人、４人、５人、６人、か。偶然じゃなければ相当な“ジェノサイダー”だな」
あるいはただの偶然か。それともただの必然か。答えを知っているのは死んでしまった１８人と“ジェノ”本人。もちろん本人がすでに死んでしまった可能性もある。
ニュースとしてわかったのはそれだけだ。オレは大きくため息を吐いて、先ほどの掲示板をもう一度開く。トモさんがこれを提示したということは、これが必要だと考えたからだ。
多分・・・。
「ついに出ました、四回目の犯行！！」
「６人だっけか？ぜってえ狙ってるよな」
「自殺に見せかけた大量殺人だったりして」
「ああ、そういう考え方もできますね。ところでｍｉｘさん。ｍｉｘさんは自殺サイトに行ったんですよね。ＵＲＬ張ってください」
これか、とオレは思った。日付は今日の３日前。つまり一昨昨日。
オレは迷うことなくそのサイトに入った。
これでもかというほど黒一色でつくられた掲示板。タイトルは『魔女の夜会』。見るからに怪しいが、表立って自殺をほのめかしたりはしていない。サイト内ではわかる者には露骨にわかる隠語で埋め尽くされていた。
どうやらこのサイトの管理人は“ジェノ”ではないらしい。もちろん管理人を調べ上げることはできるが、そんなことしてもただ普通の掲示板だと言われれば言い逃れは可能だし、そもそもこういうサイトの管理人は逃げ道を作ってあるものだ。それに野次馬にこれだけ荒らされているので、そのうち消去されるだろう。
もちろんオレに隠語の全てが分かるわけではないが、それでもなんとなく言いたいことはわかる。書き込みは誰もが同じこと。自殺者の一様な意見しかない

生きるのはつらい。
自分が嫌い。
周囲が嫌い。
自分は恵まれていない。
生まれ変わってやり直したい。
死にたい。
生きたくない。
でも一人で死ぬのは怖い。
だから一緒に死のう。

なんだこれは、と純粋に思う。まるで茶番だ。一日平均アクセス人数３０００オーバー。“ジェノ”事件以降、一気に増えている。書き込みをしているものは一人が異なる名前をつかっている可能性を除けばざっと３００人ほど。恐らくそのうち面白半分が大半を占めている。その証拠が“ジェノ”の発言の後の返信の嵐。
大半は面白半分。死ぬ気なんてさらさらないごくごく普通のありふれた人でなしども。しかし中には人間じみた、死んだ脳みその奴らがいる。恐らくそいつらは“ジェノ”と個別に連絡を取っている。中にはこれから死んでいく奴もいるのだろう。
インプッターを外し、パソコンの電源を落としてケータイを抜いた。いつの間にか外は暗くなっている。オレの部屋には未来永劫決しておけないような衝撃吸収材の入った椅子にこれでもかというくらいもたれかかり、天井を見上げて大きく息を吐いた。
はっ、見ろよ、これが今の日本だ。希望はなく、夢はなく、喜びはなく、快楽もなく、しかし絶望はなく、幻もなく、悲しみもなく、苦痛もない。この国は箱庭だ。上にいるお偉いさんにつくられた箱庭。人形と違うのはオレたち自身、箱庭の中にいることを知っているということ。そして時々思ってしまう、もしかしたら自分は不幸なのではないかと。同じように考えれば自分は幸せなのではないか

と思う可能性もあるはずだが、そんな奴はいない。人間とはとりあえず上を見て嘆くことしかできない腐った生き物だということ。
入館証を機械に通し、オレは施設を出る。道すがらケータイでトモさんに連絡を入れる。しかし、連絡といってもどうせトモさんも一度見たようなサイトを見て回っただけ、大した用事はない。オレはいら立っていたし、トモさんもトモさんであちらのトモさんだったので、お互いぶっきらぼうな低い声でやり取りをして、ケータイを切った。
壊れたドアノブはもちろん壊れたまま。業者に頼むにせよ、自分で直すにせよ、あいにく今は持ち合わせがないのでしばらくはこのままだ。別にいい。ドアの役割は開くか閉じるかであって、鍵は単なるオプションにすぎない。
なんて言うのはただのたわごとにすぎない。もちろんオレだって鍵なしの家というのは嫌だ。
とにかく、腹も減ったし今日はもう寝ることにする。この分だと明日の夜までには何か腹に入れないと本当にやばい。だが、今日はもういいだろう。今日のオレにとって明日のことに価値はない。そんなのは、幸運にも、あるいは不幸にも、明日もオレが生きていたら考えればいいことだ。

Anyone! Help me! 3

翌日、開館を待って建物に入り、インターネットに接続する。
あまりにも腹が減りすぎていて、目を覚ましてしまい、友人が出勤するよりも早くに乗り込んで腹を満たしてきたのでモチベーションはうなぎのぼりである。
まあ、人間としては確実にナイアガラの滝から落下したわけだけど。
ヒモか、オレは。
ただし、モチベーションがいかに高くても、それが結果につながらない。
今日はトモさんが見せてくれた掲示板から一歩踏み込み、独自で“ジェノ”関連の掲示板を探ってみた。
インプッターは使っていない。めんどくさい。音による掲示板に入っているので画面は何も出力していない。オレは目を閉じ、背もたれに体重を預け、イヤホンから漏れだす音を聞いていた。さすがに2日連続で視覚に頼りっぱなしはきつい。もっとも、インプッターによってオレはほとんど目を使わなかったのだけれど、そこは精神的な話だ。
内容がつかめる程度に早回しで聞こえる合成音声。こんなどうでもいいものをよく時間をかけて開発したやつがいるもんだ。しかし、退屈な人生の暇つぶしになるならそれもいいと思う。
“ジェノ”は果たして殺人鬼なのでしょうか。それとも、ただ自殺願望があるだけなのでしょうか」
「殺人鬼に一票。だって18人だよ！？それも人数が3人、4人、5人、6人・・・。次は・・・ってきゃあああ～～！」
「そりゃそうでしょ。ほんとに死ぬ気ならとっくに死んでる。少なくともオレなら自分のせいで18人も死んだら死ぬ」
「今頃ニュース見てほくそえんでるかもね（嗤）」
「ちょっと議論になりそうにないので僕は反対に一票しときます。

ありえないほど低い確率ではありますが、直前にビビってしまったというのもあるのでは？」
「なにそれ！最悪じゃん！！自分から死のうって言っておいてビビったのっ！？」
「そいつ、絶対普段はパシリだな・・・」
「それこそ真正の悪人ですね。結局殺人鬼であろうなかろうと悪であることに変わりはありません」
「そういうやつって案外いるかも。ほら、あなたの隣にも・・・」
「映画よりよっぽどホラーだよ！３Ｄとか目じゃないよっ！」
「そもそもオレには自殺する理由なんてわかんねえけどな。十分人生楽しんでるし」
「そうですね。それについては僕も同意見です。今日辛くても明日は楽しいかもしれない。そういう考え方はできないのでしょうか」
「むりっしょ～、それができたらフツーに生きてるって」
「ショセンウエカラメセンデシカナイ」
とくに有用な情報はない。恐らくどこでも同じように議論がなされ、結局自殺者は弱者であり、蔑まれる対象なのだという形で落ち着く。そいつらはわかっていない。弱者を下に見ることで、自分を強者と錯覚し、かろうじて矜持を保っていることを。かろうじてこの世に生きていることを。
明日は楽しいかもしれない。
それは今日楽しい者の意見だ。今日生きることができないやつに明日はない。人生は連続的ではなく、断続的だ。未来とは夢や希望を意味するものではなく、明日を生きることになる自分ではない誰かの物語の題名にすぎない。次に読む本が楽しいからと言って手元にあるつまらない本を読み続けようと思うだろうか？
昨日見た自殺サイトにアクセスする。書き込みの数は減っていない。それどころか増えていた。こういう事件は時間に綺麗に比例して興味が右肩下がりになっていく。それなのに増えている理由は簡単、“ジェノ”の書き込みがあったからだ。

街は僕らを苦しめる。
社会が僕らを責め立てる。
人が僕らを攻め立てる。
ここでは僕らは生きてはいけない。
だから僕は死のうと思う。
殺される前に死のうと思う。
死は怖くない。
死はエンディングでしかないからだ。
怖いのは一人で死ぬこと。
理解されずに消えていくこと。
センターは何もしてくれない。
センターとは社会だから。
社会は僕らの邪魔をする。
僕らにとっての一番の敵。
だから僕は同志を求める。
ともに黄泉へと旅立つ同志を

隠語で埋め尽くされた掲示板の中、一切の隠語を省いた文章。本来ならば真っ先に管理人に削除されるべきだが、それもない。そもそもこんなサイトを作る管理人にそんな常識があるとは思えない。
昨日見た掲示板だったか、「口がうまい」というコメントがあった。だが、これは違う。ただ純粋に魅力的なのだ。無駄のなく、しかし調律のとれた、心に入り込むような文章。欠けている自殺願望どもの心に染み入るのは簡単だろう。
だがそれも所詮破滅というベクトルの中での話。後ろ向きのベクトルはどんなに大きなものでも所詮前には進めない。こんな奴、いても害になるだけだ。
ネットを閉じて、ケータイを抜いて立ち上がる。まだ昼過ぎくらいだが、今日はもうやる気にならない。面倒だ、という理由も大きい

が、それ以上の問題だ。自分自身が腐っていく錯覚にとらわれる。
まるで何かが感染したかのような。
「そう言えば、ジェノウイルスっていうネットウイルスが昔あったな」
“ジェノ”が何を思って、そのハンドルネームをつけたのかは知らない。だが、どう名乗ろうとやつの立ち位置は変わらない。
———まるでちっぽけな人間だ。

まだノブの直らないうるさい扉。そういえば今日も大家には会ってない。これが倦怠期か、とも思ったが、気持ち悪いのでやめておこう。オレはそんな特殊な性癖を持ち合わせていない。
普通に若い子と若干年上のお姉さんが好きだ。実はトモさんが若干タイプなのは周囲（というほどオレの周囲に人はいないが）には秘密だ。
まだ昼だが、なんとなく生気を吸いとられた気分。というか純粋に気分が悪かった。
まるで昔の自分を見ているようで。
まるで過去の誰かを見ているようで。
まるで今の自分を見ているようで。
六畳間に寝転がって、昔誰かが天井に付けたしみを見上げた。
“ジェノ”は救いを求めている。奴にとって、この世はひどく辛いもので、それでも一人で死ぬのは怖くて、けど誰も信じられない。だから、仮想現実という名の箱の中にいる誰かを求めた。恐らくそういうことなのだろう。奴が信じられるのは仮想現実まで。しかし、実際にはインターネットというのは現実の人間、奴が信じられない人間にリンクしている。だから奴は死ねない。死にたいのに死ねない。死ぬために使うかすかな労力ですら厭う。誰かの力にすがろうとする。
ああ、認めてやるよ、“ジェノ”。お前は確かに昔のオレに似てる。今となってはまるで意味もない過去のオレに似てる。だが、それで

もオレとおまえは違う。決定的に違う。

Anyone! Help me! 4

いい加減疲れたのでがっつり寝てやろうかとか思ったわけではない。それでもいつのまにか寝てしまったらしい。気付いたら、つまり目が覚めたら部屋は真っ暗で、聞きたくもない着信音がアラームとしてやけにうるさくオレの脳を揺さぶった。

「はい、なんスか」

「寝起きか!?寝起きなんだな!!」

一瞬だった。つまり、ごろごろと実に行儀の悪い姿勢で、話し相手が目の前にいたら問答無用で蹴られても文句を言えないような姿勢で話していたオレが正座になった。

心臓が喉から飛び出て危うく星になるところだったが。

しかし、口調で瞬時にオレの状態を見抜くトモさん。さすがオレの監察官。

「寝てないスよ。ていうか寝るってなんスか。オレそんな特技持ってないっス」

「ホーク、私には電話越しの相手を殺す特技があるのだが、知っているか?」

正座が直立不動（敬礼付き）になった。

「まあいい」

耳元でトモさんのため息が聞こえる。どうやらそうとうお疲れのご様子。

「進行度はどうだ?毎晩9時までに連絡するようにと言っているだろうが!」

電気をつけて時計を見る。9時を3分ほど過ぎていた。なんて時間に厳しい人だ。

「3分くらい、だと?ずっと電話を待っていた私の身にもなってみろ!」

ケータイが掌からするりと抜けおちた。え、ナニ今の恋に恋する乙

女的な発言。しかもトモさんの口から。
トモさんも何かおかしいと思ったらしく、大きく咳払いをしてから言った。
「お前に言っても仕方ないかもしれないが、上から早く解決するようにと再三言われている。警察からもセンターからもな。どちらも躍起だ」
「中間管理職は大変です」
「わかっているならさっさと解決しろ。・・・その分だと今日の収穫はなさそうだな」
落胆したようなため息トモさん。もっとも、表情は無表情のままなんだろうけど。
「それならそうと早く言ってくださいよ。“ジェノ”は大したことありませんよ。多分明日には接触できます。明日のオレの機嫌がよければですが」
「ホーク。ふざけていると本気で焼くぞ」
焼くの！？・・・って、このセリフはそれほどふざけているわけじゃないんだろうけど。トモさんがふざけるところなんて想像もできない。
「では、明日また連絡します」
オレが切るよりも早く、トモさんは別れも言わずに通話を切る。
ケータイを切って、テーブルの上に置く。5時間くらいは寝てるから、さすがに眠くはない。
オレは何かをしようとあたりをきょろきょろと見まわして、結局寝ることにした。

“ジェノ”と連絡を取る方法は実に簡単。あたかも自分は“ジェノ”と同類であり、理解者であるかのような書き込みをし、興味を誘う。そして個人的にやり取りをし（向こうから直接このパソコンにアドレスを送ってきた）、後は死ぬだけだ。
というわけで今現在時刻は深夜零時を少し回ったところ。場所は東

京にまだ残っている２０世紀の遺産、廃工場。吐き気をするような嘘にまみれたやり取りの末、オレはここを紹介された。
人数は7人。だが、これはどうやら偶然らしい。そういう偶然があっても別にいいのだろう。郊外ゆえに照明もなく、東京ゆえに月明かりもない。持参するように言われた懐中電灯の明かりだけが頼りだ。
誰が“ジェノ”かは分からない。実を言うと、発言や、やり取りの中で、だいたいの“ジェノ”のイメージはわいているのだが、それが間違っていることだってあるだろう。それに、そんなことオレには関係ない。“ジェノ”も別の奴らも同じだ。同じ自殺志望者だ。
箱の中のラットを見分けることなどオレにはできない。
古くて今にも壊れそうな建物に、何とも真新しい張り紙があり、オレたち7人はそれが“ジェノ”のものであると考え、誘導に従う。
懐中電灯が照らすのは瓦礫ばかりで、もはやここが昔何をつくっていたのかは分からない。わかったところで何も変わらないだろうけど。
言葉を発するものは誰もいない。死人のような、ただ顔に開いている穴に眼球を入れた、みたいな目をして歩いている。死へと歩んでいる。
かなり歩いたが、それでもまだ工場の最奥というほどでもない地点。7人なら何とか入れなくもないだろうという個室に容器が二つ置いてある。ほかの奴らはなんかおろおろしていたが、理系で大学に入ったオレには分かってしまう。人間が、たったこれだけで死ねることを分かってしまう。
しっかし、ほんと古くさい手ばっかり使うよな。じじいかっての。悪態を心の中で呟いて、ポケットの中のケータイを鳴らす。さて、ここで少し時間を稼がなくちゃならない。ほら、よれよれのスーツ着てるおっさんがもうすでに容器に手を伸ばしてるもの。このままじゃオレも死んじまう。あいにくオレはこんなところで死んでやるほど暇じゃない。

「あのよ、死ぬ前にさ、ひとりずつ自殺に至った原因ってやつを言ってくのはどうだ？少しは溜飲も下がるかもしれないぜ」
途端、全員の１２個の目が、まるでそれが個の生き物であるかのようにオレのほうを向いた。鬱で痩せこけた目で見られるのは相当恐怖だった。
容器を持ってたおっさんが容器を置いて、口を開く。今までずっと口を固く閉じていたので、ただの肌に突然切れ込みが入ったみたいだった。
おっさんの話を聞いて、オレは聞くんじゃなかったと激しく後悔した。具体的に言うとR指定されてしまうが、さわりだけ言うと。おっさんは同性愛者で、それが周囲にばれ、生活できなくなってしまったらしい。てっきりリストラとかそんな実に普通の理由を予想していたオレは面喰って、噴き出しそうになったが、なんとかこらえた。ここで笑ったら、何をされるかわからない。
ほかの奴らのリアクションはない。多分耳に穴が開いていないのだろう。
「じゃあ次はあたしが・・・」
「あー、待った。ちょっと用足してきていいか？尿意催したまま死にたくない」
女子高生だろうか。全体的に肉付きの薄い少女が震えるようなか細い声で言いだしたのを制止して、オレは個室の扉を開けた。
カラン、バタン
オレが出るとき、オレのわきから代わりに何かが個室の中に入った。扉を閉めたのはオレ。正面に立つ何かを投げ入れた黒い覆面の人に親指を立てる。当然向こうはノーリアクション。結構タイミングとか危ないんじゃないかと思ったが、向こうからすれば、オレのことなどどうでもいいのだろう。死んだら駒が一つ減るくらいの感覚だ。
懐中電灯の明かりをつけ、もと来た道をさっきよりは速い速度で歩く。
「御苦労、ホーク」

黒塗りのバンに体を預け、腕組をしているトモさん。相変わらず目つきが怖い。
「これで“ジェノ”事件も解決か。以外とあっけなかったな」
これでは給金一カ月分にしておいた方がよかったかもしれん、とトモさん。さすが鬼トモだ。
「いえ、多分あの中に“ジェノ”はいないと思いますよ。最初はこのあたりにいたかもしませんけど、それももういないでしょう」
「・・・どういうことだ？」
「あの中に“ジェノ”を理解できる奴はいない。少なくとも“ジェノ”自身はそう考えてるはずです。だから、奴はまだ死ねない。一人で死ぬのは、怖いから」
トモさんは目を細めて怪訝そうにオレを見た。だから怖いって。
「こういうのってオレよりもトモさんのほうが専門なんじゃないですかね。とにかく、ここにはいない。どうやら黒ずくめサンたちにはまた登場してもらうことになりそうです」
トモさんはバンから身を起こす。振り返ると、3人の黒ずくめたちが2人ずつ抱えて出てくるところだった。死んでいるのではない、眠っているのだ。さっき個室に投げ入れられたのは特製の催眠ガスである。
「トモさん、こいつらはセンター送りですか？」
特に気になったわけではないが、聞いてみる。
「いや、ちゃんとカウンセリングをして、可能ならば社会復帰させる。お前もセンターを収容所のように言うのはやめなさい」
怒られた。というかたしなめられたのか。まあ、そりゃそうか。トモさんはセンターに恩があるし、センター大好き人間だからな。
6人も載せればさすがにこの大型バンもいっぱいで、オレだけ取り残されることになる。ていうかあんな地獄行きの車になんか乗りたくない。というわけでオレは懐中電灯の明かりを頼りに最寄りの駅まで歩くことになる。２４時間運行様様だ。
ちなみに電車賃は経費としてちゃんといただいている。トモさんも

さすがにそんなどうでもいい所でSにはならない。
仮に、あのまま自殺が成功していたとして、それでどうなっただろうか。どうせあんな廃工場のあんな奥での話だ。見つかるとしてもせいぜい肝試し気分のバカどもだけだろう。誰かの迷惑になるとまでは言えない。確かに捜査が面倒だとか、結局不利益に違いはないんだけど。
ようするに何かが正しいなんてことはないと思う。少なくともトモさんにとってはセンターが正義だし、“ジェノ”にとってはセンターは悪だし、オレにとっては至極どうでもいい話だ。
価値観。結局はその問題なのだ。自分が正しいと思えば正しい。ただ、それだけのこと。
「さて、と。大見栄切っちまったし。さっさと解決するとするか」
そういえば今日は何も食ってない。さっきトモさんに何か催促すればよかったな、と軽く後悔しながら、オレは家路に着く。

Anyone! Help me! 5

翌日、電気をつけるのも億劫で、薄暗い中、家で寝っ転がりながらメールをする。相手はもちろん“ジェノ”だ。
「ジェノさんも死ねなかったんですね」
確証はなかったが、オレの勘の正解。“ジェノ”からの返信はソッコーできた。どうやらよっぽどの暇人らしい。人のことは言えないが。
「フェイスさんもですか。すいません、僕が言いだしたのに」
フェイスというのは昨日即興でつけたオレのハンドルネームだ。ちなみに元ネタはエリーの名前の間違え方。
「いえいえ、オレもそうでしたから。なんとなく違うなって。この人たちじゃないなって」
餌。
「そうなんです！僕もそうなんです！！あの人たちは僕と似ているようで違う。だからあの人たちと一緒には死ねないんです」
「ああ、わかります。なんか自分が楽になることしか考えてないっていうか。ジェノさんがこんな苦しんでるのに」
餌。
「そうですよ。ほんと、自分のことしか見えてないっていうか大して辛くもないくせに辛い顔なんかしちゃって、死んでやろうとか遊びみたいに考えて、僕が思っていたのはそういうことじゃないんですよ」
「ですよね。オレにはよくわかりますよ」
餌。
「ああ、やっと見つけた。・・・ねえ、フェイスさん。提案があるんですけど、どうですか。もう一度計画してみませんか？」
はい、かかった。所要時間わずか数分。壮絶ベリーイージーモード。これがギャルゲーならクレーム殺到だ。

「そうですね、いいですよ。ただ、ほかの人がいると煩わしいんで、ジェノさんと二人なら」
返信が滞る。もちろん向こうが答えに窮しているわけではない。向こうの心はオレが確認するまでもなく決まっている。だから今頃大急ぎで準備を整えているはずだ。
「では、東京湾で今夜0時に！！」
と、まるでパーティか何かに誘われるように、オレは自殺することになった。
「・・・・・・ちっ」
舌打ちをする。畳んだケータイを床にたたきつけようと思ったが、その被害とオレの下がる溜飲をはかりにかけたところ、被害のほうが大きかったのでやめておいた。おとなしく畳んでポケットに突っ込み、ふらふらと家を出る。ふらふらというのは仕事をしていないの擬音ではない。いや、もちろん今現在プータローなオレだが、それ以前にここ最近2日で1食ペースなのだ。力が入らなくて当然である。膝が踊る踊る。まるで糸の切れたマリオネットようだ。自分で自分が笑えてくる。
ほんと、何やってんだオレ。こんな風に人の心に踏み込むような真似までして。何がしたかったんだっけ。なんで生きてるんだっけ。もう生まれてから何千何万と繰り返された自問自答。オレを変えたあの日から、答えはいつも変わらない。オレは別に生きたくない。ただ――――
「・・・・・・ん～～、やめとこ」
とにかく飯だ。あいにく今日は平日。この時間じゃ友人は仕事中。いや、エリーを口説けば何とかなるかもしれないが。
「大家さん、飯くれ！」
ヒモか、オレは。何が悲しくてこんな皺くちゃのばあちゃんに恵んでもらわなきゃならんのだ。
「藤田さん、それより先に今月の家賃・・・」
ふざけろよ、ばばあ。

「オレの上司が払ったでしょ？ほら」
首をかしげる老婆。なんでこんなに生活苦しいと思ってんだ！めんどくさいので一旦部屋に戻ってちゃんとトモさんにもらった領収書を見せる。あの人はこういうところはきっちりしている。
「いえ、これ先月よ」
うっそ、マジ！？
・・・マジだった。いつの間にか滞納してたらしい。いつの間にか、っていうか先月支払ってない間にだけど。
「だいじょぶ、今夜仕事すれば金が入るんだよ。そのためにエネルギーが必要なんだ。ほら、先行投資だと思ってさ」
必死に懇願するオレ。大家さん、いや大家さまは少しうなった後、お盆に載せたご飯とみそ汁と焼き魚を出してくれた。
あ～～～～、生きててよかった。と数カ月ぶりの日本食を堪能した後、夜に備えて寝る。最近寝すぎてる感があるが、余計なエネルギーは消費できない。爬虫類にでも生まれればよかった。

Anyone! Help me! 6

深夜０時――――
暗闇にたたずむ東京湾。人間が重力を克服できない限り、輸送手段に飛行機を使うのは限界がある。というわけで港は今でも大事な輸送の中継地点である。日本の人口の半分に匹敵する人間が生活するここ東京。そりゃ輸送も活性化するわけである。だから深夜といえども船は行きかうし、人はいるが、それでも昼ほどじゃない。十分に自殺はできる暗さと静かさだ。
指定されたのは港の隅のほう。東京湾は広いので隅の方というと家からも相当遠いが、そこはそれ、必殺経費落としを使う。もっとも、支援法が有する膨大な予算の前ではこの程度の雀の涙では何も殺せないが。
果たしてそこに、“ジェノ”はいた。いや、“ジェノ”かどうかわからないが、こんな時間にほかの人が来るような場所じゃないし、なんとなく雰囲気でわかる。
死んでいるのだ。纏う空気が、目が。似ている、と改めて思う。あれは昔のオレだ。力強いベクトルで、しかもそれが後ろ向きであることも。
「フェイスさんですね。お待ちしてました」
恐らく年齢は十代中盤といったところか。高校生だろうか。上下黒の格好はあたりの闇に紛れてしまっている。無意識のうちに自分の存在を消したがっているみたいに見える。
“ジェノ”の足元には首吊り用のロープが２つ。またしてもなんともどこかで見たことのあるような自殺法。じゃあ間違いなく“ジェノ”だろう。
トモさんにはすでに連絡してある。しかし、準備に滞っているらしく、到着までまだかかる。ここは車で入れないところなので、しばらくかかるだろう。だから、オレに任された最後の仕事はその「し

ばらく」を埋めること。
「よければ、どうして自殺に至ったか教えてくれませんか」
こいつはオレに似ている。しかし違う。その違う点がオレがこいつにつけ込んだ場所。
つまり、他人を撥ね退けたがるか、他人に頼りたがるか。
前者であればそもそも自殺サイトに書き込みなんかしない。一人で勝手に死ぬ。それができないこいつは間違いなく後者だろう。だからこいつは話したがる。自分がいかに不幸で、どれほどかわいそうなのかを。
読みは当たり、砕けたブロックに腰かけるオレの横で訥々とつむがれる呪怨の言葉。
いじめられていた中学生活。心機一転、遠くの高校に通うも変わらない日々。両親の不仲。息もできないような家の中。助けはなく、救いはない。そんな人生。
「僕の肩を叩いて応援する人もいましたよ。むしろ僕はそういうやつにこそむかつきました。人の気も知らないで。何が頑張れだ！頑張ってるんだよ！！何がみんな辛いんだよだ！お前たちに僕の何がわかるんだ！！」
“ジェノ”は肩で息をする。力のこもった呪詛呪怨。呪いしかないこの人生。それはまさしく地獄だろう。
ごめん、トモさん、もう限界。
「馬鹿かおまえは」
「は？」という言葉すら出なかった。何かの幻聴でも聞いたような、“ジェノ”はそんな顔をする。
「誰も理解してくれない、だと？当然だ、そんなもん。お前は一体何年人間やってきてんだ？知ってんだろ？人間っていうのは二種類しかいねえんだよ。強者と弱者？勝者と敗者？ちげえよ。自分か他人か、それだけだ」
それを知ったのは小学生のころだった。実際、いやな子供だったのだろう。そして、今のオレにとってもそれは同じ。なぜならば世界

は変わらない。要するにここは嫌な世界なのだ。いつまでも変わらない、腐った箱庭のままだから。
「わかるか？どこまで行っても自分は一人しかいねえんだよ。自分が2人いる奴がいたらオレの前に連れてこい！いねえだろ？だから自分を理解してくれる奴なんていねえし、誰も彼も自分勝手に生きてやがるんだ」
“ジェノ”の顔が真っ白になっていく。だが、そんなものオレの知ったことか。
「理解者？はっ！気持ち悪いだろうが。そんなの理解したふりしてせせら笑ってるに決まってんだろうが。四方八方上下左右、どっからどう見ても偽善者の間違いだろうが。気付けバカ！」
パクパクと餌をねだる鯉のように“ジェノ”は何も言えない。オレはここ3日間ため込んでいた気持ちを全部吐き出したので、超スッキリ。スッキリついでにたちあがって大きく伸びをした。
「・・・どうして」
蚊の鳴くような、辺りが静かじゃなかったら決して聞こえないような声で“ジェノ”はあたりに全く音がない状況でも決して聞きたくない言葉を言う。
「どうして君までそんなことを言うんだ。どうして、どうして・・・。やっとなんだ。何人も何人も何人も違ったんだ。やっとなんだ。やっと見つけた。僕を理解してくれる人を。それなのに、どうして」
何かに祈るような、何かに嘆くような言葉。それすらもオレにとっては小説の中のどうでもいいセリフで。
「助けて、誰か。助けて、神様。なぜだ。どうして、世界で一番不幸な僕をどうしてだれも助けない！」
「自惚れんなよ。そして手前勝手にオレにも神にも幻想を抱くな。人は誰も救わない。自分自身が一番大事だからだ。神は誰も救わない。自分が一番かわいいからだ。オレはお前を救わない」
オレは言う。ずっと言いたかったことを、胸一杯に息を吸って言い

放つ。
「――お前なんかに、興味はないからだ」
似てると思った。昔のオレと“ジェノ”が。だが違う。決定的に違う。オレは戦った。戦って、戦って、戦って、戦った。ただ、オレにとっても周囲にとっても最悪なことに、そのベクトルが破滅の方向を向いていた。それが似ているという錯覚。勘違い。
「取り返しのつかなくなる前に誰かに頼ればよかったな、なんて言わねえさ。誰かに頼ったところで何も変わらなかっただろうし、お前も変わらなかっただろうよ。そうだな、あえて言うなら――」
ほかに言うことはないだろう。古今東西死者に言えることなど限られている。
「――ご愁傷様」
「うわあああああ！！」
１８人。１８人を自殺に追い込んだ「殺人鬼」は壊れ、叫ぶ。心が砕ける音はしない。そんなものはどこにもないから。あるとしたら脳の中。だからこの叫び声こそが、脳が壊れた音だろう。
“ジェノ”は陽炎のようにゆらゆらと、自分かオレか、どちらかを吊る予定だったロープを手に取り、オレに歩み寄る。要するにあれだ、吊らない代わりにオレの首を絞めてやろうという魂胆。別に結果は変わらない。過程がほんの少し違うだけ。数学みたいなもんだ。しかし、残念ながらその光景におののいたりしない。あー、マジ昔のサスペンスドラマで見た光景、とか思うだけだ。自殺方法といい、お前マジで古臭い方法好きだな。じじいかっての。
だいたいいつも思ってたんだ。ニタニタ笑いながら襲いかかってくる犯人になんで被害者は抵抗しねえんだよ。わかんねえ。それこそ自殺志望かっての。
こぶしを握りしめ、体を沈める。ロープは両手で持っている。要するにボディががら空き。こぶしは吸い込まれるように決まった。
「がっ、ごほっ・・・！」
うずくまって倒れる“ジェノ”。腹筋があれば少しはましだったか

もしれないが、病的なまでにやせ形のこいつではその望みも薄い。
ダメージはダイレクトに体を駆け巡り、痛みは瞬間に脳まで達する。
「確保！」
神経伝達速度よりは遅いが言葉が相手に伝わるよりも十分に早い速度で黒ずくめたちが“ジェノ”を取り囲む。終わりを告げる手錠の音が静かな闇の中に響いた。
「よくやった、ホーク。お前が殺されて殺人罪に問えれば言うことなしだったんだが、まあいい。殺人未遂でも十分余罪の追及はできる。まだセンターに送られるかはわからんがな」
などと、血も涙も、もちろん心もない言葉とともにトモさん登場。
「これからお前は警察でみっちりと取調べを受けることになる、覚悟しておけ」
追い打ちをかけるトモさん。もっとも、すでに“ジェノ”の脳に言葉が届いているか怪しいが。
「自殺した18人の中にはまだ戻れたやつがいたかもしれない。勝手に死んだのは奴らであっても、殺したのはお前だ。だから肝に銘じておけ。死すらもお前を救わない」
「・・・・・・・・・っ！！」
それは、言葉にならない悲鳴。世界に愛されなかったものの末路。
2か月もの間、世間を騒がせ続けた“ジェノ”の最後の叫びだった。

地下鉄に乗って、家に戻る。そのまま寝ようかと思ったが、最近寝すぎていることに気づく。本当はパーっと何かを食いたいが、金は明日中に振り込まれるそうだ。さすがに現金でポンっと渡すほどトモさんは世間知らずではない。というわけでやることがない。気まぐれに、眠くなるまで何かを考えてみることにした。
人は誰も救わない。
この言葉をどれほど本気で言ったかといえば、実はそれほど本気じゃない。広い世界の中にはちゃんと人を救っているやつがいて、その努力を切り捨てるほどオレはひねた性格をしてはいないつもりだ。

だが、神はオレたちを救わない。これについては本気だ。どんな宗教家に聞いても神は万能だという。万能であるということ。全ての能力を持っているということ。つまり、一人で十分事足りるということだ。自分だけで生きていける奴がどうして他人を助けようという発想を持つ？助けられた経験も喜びも知らないやつがどうして人を助けようと思い立つ？今も昔も、国が滅びようが地球が破滅しようが変わらない。絶対は弱者を救わない。きっとオレたちがこうして地面を這いつくばっていること自体気付いていないだろう。
この広い世界の中で、オレは数多くいる敗者の一人ではない。ただ一人しかいない自分だ。だからこそ、自己中心であってもいいと思うし、自分を守る義務がある。“ジェノ”はそれを放棄したのだ。そして、その放棄を周囲のせいにした。自分は間違っていないと信じた。それなのに自分が一番不幸だと論じた。
くだらない
考えるだけ時間の無駄だ。もうすでに終わった物語で、それもごくごくありふれた、二度目なのか初めてなのかもわからない、そんな単純な物語。
今日はもう寝ることにしよう。ごちゃごちゃと考えるのももう飽きた。

Where is her heart? 1

オレの生活は順風に回っていた。多分東京に出てきて初めてのことなんじゃないだろうか、通帳の中にまとまった金があるというのは。ただ、目の前の定食を見てると、ああ、この金もそのうちなくなるな、とか思わないでもない。節約すべきだとわかっていてもできない男、それがオレである。

というわけで、ソッコーでバイトを探し、すぐに見つかる。こちとら半年以上バイトを転々としている身だ。ルートは完全に確保してある。ただ、これ以上バイトを辞めると信用をなくしかねない。命には代えられないとはいえバイトができなくなるのは非常に困る。こちとら監視されている身なので（しかも監察官がトモさん、逃げることなど決してできない）、あまり遠くに行くことはできない。条件もおのずと家の近くになる。いろんな条件を照らし合わせた結果、今現在卸売業者の倉庫番をやっている。倉庫番といってもただただ商品を見ていればいいというものではない。倉庫に送られてきた商品を整理して入れ、売りに出す商品をトラックに積む。結構肉体労働だ。その分割がいいので、気に入ってはいるが、それだけにケータイのあの着信音が怖い。

常時三人態勢で臨み、仕事がないときは休憩。休憩が３０分までならちゃんと１時間分の給料が出るというから驚きだ。要するにオレのほかにも何人か、というか何人も働いているのだが、みな現代人とは思えないほどの肉体を持った中年である。なんでこんな細いオレが採用されたかというと、鍛え方に起因するのだが、そこはそれ、トモさんのおかげ、あるいはトモさんのせいである。

今日も今日とて朝から３台のトラックが来て、商品を落としていく。このあたりは安いスーパーが多く、その商品を一手に引き受けているというのだから忙しいのもうなずける。オレ以外の二人は無駄にくっちゃべっているが、オレは一人で黙々と働いていた。いずれ心

証がよくないことになるのは目に見えているので、とりあえず点数稼ぎ。
「いた～～～～～～！！」
突然倉庫の外で声が上がった。馬鹿な女子高生が殴られでもしたのだろう。つまり、「痛！」と言っているということだ。果たしてこの辺に高校はあったのかということと、そうだとして、どうして女子高生が殴られているのかということは考えない。そこに現実があるのならば、それが起こる可能性はどれほど小さくても結果起こったことなのだ。
「やっと見つけた！すいません、ちょっといいですか！」
うるせえなぁ、保護者は何やってんだ。しかし、どうやら「居た」ということらしい。そりゃそうだろう。このあたりに高校はないし、こんな白昼から女子高生が殴られるほど悪い治安じゃない。貧相な地域だけど。
「ちょっと、無視しないでください！」
はっ、無視されてるし。そりゃそうだろ。突然叫びだす女子高生となんて誰も係わり合いになりたくねえな。さてと、このダンボールは・・・食品か。じゃああっちだな。
「あの、すいません！」
肩をグイっと掴まれ、後ろから引っ張られた。それほど強い力ではなかったので、ダンボールを落とすことはない。
ていうかなんだよ。呼ばれてたのオレかよ。！
振り返ったオレの目の前には眼鏡に首ひも付きのデジカメ、しゃれた格好をした、二十歳を越えている女が立っていた。
「誰？」
いやマジで。オレは人間関係は最低限でいいと思っている人種なので、知り合いの顔は忘れない。いや、待てよ。今までのバイトの同僚かもしれない。それならほとんどが忘却の彼方だ。だからそうに違いない。
「若いっていうのはいいねえ」などとからかうおっさんたち。ガン

無視。
で、目の前の女は一つ咳払いをして、かっこうに不似合いな黒い大きなカバンから名刺を取り出し、オレに渡した。いまどき名刺とか・・・。
「情報誌ルポのものです。支援法のことに関してお話を伺いたいのですが」
あ？今なんつった、この女。
「支援法？ああ、途上国支援法の話っすか？いいんじゃないですか。もう少し予算つぎ込んでも問題ないでしょ」
さ、仕事仕事。
「違います！自殺支援法のことです！私見たんです。先週の夜、あなたが・・・もご」
オレの右手が女の口をふさぎ、オレの右足が女の足を払い、オレの左肩が女を担ぐ。うわ、着てる服がオレが触れたことのないような感触だ。いい服着てやがるな、とか思いながら、「すいません、急用っす」とか言って、背中におっさんどもの笑い声を浴びせられながら、走った。
必然、走っている間は口をふさいでいるわけにはいかないので、オレの左耳は「ちょ、ちょっと、何をいきなり、突然・・・えっと、あの、下ろしてください！」とか聞かされ、じたばたされることになる。めんどくさくなったので、人気のない所で落とした。下ろしたわけではないというところが肝要である。
「えっと、タカシマさん？何の用？」
名刺の名前を見て、足元に落ちている女に声をかけてみる。ああ、やべ。オレの額に今怒りマークがふんだんにあるわ。
目の前の女―――高嶋優衣というらしい。は若干の涙目で立ち上がり、汚れてしまった（汚したのはオレだが）スカートを払った。
「で、ですから、自殺支援法のことでお話を伺いたいのです」
オレは情報誌ルポという雑誌のことは知らないし、名詞に書かれている会社も知らない。どうやら下にあるような小さな会社らしい。

「それで？」
「私、私見たんです！先週あなたが誰かと話しこんでいて、それも自殺の話をしてて、襲われたのに返り討ちにして、その後現れた人がセンターの話をしてて・・・」
あっちゃあ、最悪。何が最悪ってオレがここまでこの人を拉致って来ちゃったこと。あの時点で人違いと言い張ればよかったのだ。これじゃあすでに認めてしまっているようなものだ。
「あなたはいったい何者なんですか？支援法と一体どんなかかわりがあるんですか！？」
はあ、そもそもあれ見られてたのかよ。トモさんですら気配に気づかなかったってことだよな。忍者か、こいつは。
「人違いだろ。たまたまオレと背恰好が似てるやつでもいたんじゃねえの」
あくまでもはぐらかしてみる。無駄かもしれないが、いい張れる所まで言い張ってみようか。
「そんなことはありません。私、あの後あなたを尾行して、ちゃんと顔も覚えましたから」
「・・・・・・」
犯罪者か、こいつは！おかしいな。そんなオレ気を抜いてたか？
「支援法についてはどれほど調べても途中で止まってしまうんです。まだ細かいところが整備中だとか言って。おかしいですよね！法自体はすでに適用されていて。ちゃんと職員もいて、それなのにまだ確定していないなんて！」
助けて、トモさん。とかガラにもなくトモ頼みしてみるオレ。人のこと言えねえかも。他人が誰かを助けることなどないというのに。
「やっと見つけた手掛かりなんです。お願いします。支援法について話してください！」
９０度直角の礼をされる。うわっ、人が来た。すっげえ怪訝な目でオレのこと見てるよ。
「いや、だから知らねえって。じゃ、オレバイトあるから。そろそ

ろ休憩時間も終わるしな」
まだ5分しかたっていないが。
「どうして職員の人数や名前が公表されてないんですか！？どうしてセンターの場所を誰も知らないんですか！？何かあるからじゃないんですか！？」
背中に高嶋優衣の声を浴びる。それを聞いて口元がわずかにほころぶ。
ああ、その通りだよ。あそこには世間に公表できない理由がある。知ればすべてが覆るようなものがある。あそこはどう考えても地獄だよ。天にあってもあれは地獄だ。だが、それがどうした。それでも世界が回るなら、そんなことオレにもあんたにも関係ないだろ。

Where is her heart? 2

だが、オレはなめていた。ジャーナリストという一ヶ月間生ごみを入れっぱなしにしといたポリバケツの蓋を「面白そうだから」という理由だけで開けてしまえるようなその精神力をなめていた。
あの夜、オレを尾行してきたという。それは別に不可能というわけじゃない。ここ東京じゃあ夜に誰もいないことの方が珍しいから、人の中に紛れ込んでいても不自然じゃない。だからその言葉は本当なのだろう。その時点でオレは気付くべきだったのだ。オレのパーソナリティを調べられていることを・・・。
たとえば、オレの家とか。
いやマジビビった。何の冗談かと思った。確かに今オレの部屋には鍵がない。入ろうと思えば、ドアノブを回して、重い扉をあける労力さえ厭わなければ簡単に入れる。だからって入るか、フツー。
「おじゃましてます」
・・・じゃねえよ、高嶋優衣！
「すいません、非常識ということはもちろん十分承知なのですが、どうしても聞きたいんです」
ソッコーでケータイを取り出すオレ。押すのはもちろん3ケタの番号。なんて覚えやすい。
「けーさつですか〜〜？」
「失礼しましたっ！！」
荷物を持って、オレの脇をかいくぐって出ていく。オレのケータイからは、とってもベタに、前時代の遺物、時報が鳴っていた。
とりあえず何か取られてないか見て回って（そもそも取るべきものがあるかという問題だが）、トモさんに連絡してみる。
「タカ君？何か用？」
今日はこっちのトモさんだった。なんか久しぶりに声を聞いた気がする。っていつものトモさんも同じ声だけど。

「いや、実はですね。困ったことになってまして、“ジェノ”逮捕の時の現場を一般人に見られたらしくて、しかもそれが雑誌記者で、オレの家まで調べ上げられていて・・・」
どうしよう。という状況なのだ。このままじゃオレあの女に逆恨みされて殺されるんじゃないだろうか。
「う〜〜〜〜ん、そっかあ。うかつだったわ。タカ君が誰もいないって言ってたから鵜呑みにしちゃってた」
・・・・・・あれ？言ったっけ？ってかオレのせい？
「わかった。とりあえず取材を受けて」
は？なんつった、今。
「だから取材を受けて。あんまり逃げ回っていると怪しまれるから。今まではぐらかして理由は機密だから。取材を受けた理由は上司の許可が出たから。あなたはカウンセリング担当の臨時職員。あの夜は自殺しそうになっていた人のカウンセリングをしていて、落ち着かせたら病院まで運ぶ予定だったけど、失敗して逆上され、仕方なしに取り押さえることになった。いいわね？」
すげえな、トモさん。よく一瞬でそこまで考えが及ぶもんだな。
「ただ、そのタカシマという記者はあれが“ジェノ”であることは知らないみたいだから通用するのよ。そこは絶対隠してね」
人間の才能は生まれた時に決まってる。オレにはなく、トモさんにはある。それだけの話。今さら妬ましくもなんともない。
「で、あんまり深く踏み込ませないこと。最悪こちらから会社のほうに圧力をかけることになるわ」
怖いなあ、権力。しかしその強すぎる権力は強すぎるからこそ使いどころが難しい。
「ほんとに気をつけてよ。タカ君ってこういうことするといっつもボロが出るから。自殺者相手だと優秀なのに」
トモさんなりのフォローだと思うが、あまり嬉しくない。それはつまり、オレは一般人よりも自殺志願者の属性に近い、というかむしろそこに属しているという何よりの証拠だろう。

「じゃあ、頼んだわよ」
返事をする間もなく通話終了。相変わらず忙しいらしい。そういえばオフのトモさんというのも想像がつかない。もしかしたらそんなのないのかもしれない。
はぁ、憂鬱。相談しただけなのにプレッシャーをかけられてしまった。捨てるのもめんどくさくて床に投げてあった名刺（彼女はそれを見てどう思っただろうか）を拾い上げて、そこにある番号に電話する。コールは2回。暇なのだろうか。
「もしもし、オレです」
詐欺か！？・・・そういえばやつはオレの名前知ってんのか？知らないはずないか、調べられてるんだし。
「・・・藤田です」
はあ、と気の抜けた返事が返ってくる。そりゃそうだ。むこうからしたら電話が来た理由なんて不明すぎるだろう。ともかく、オレということはわかったらしい。・・・多分。
「上司に連絡したら、取材を受ける許可が出ました」
「ほんとにっ！？」
鼓膜が破けるかと思った。オレのケータイも音量調節機能をつけとけばよかったなあ、と激しく後悔。やっぱり安物はいけない。
「やった、やった、やった、やった！」
女子高生のような歓喜の声をあげ、「あ、はい、すいません」突然謝った。オレにではなかったので、多分近くにいる上司とかにだろう。
「えっと、機密ということで取材断ってたんですけど、ようやく許可が出たんで」
ていうかこのままじゃオレが危ないんで。
「わかりました、はい、ありがとうございます！！時間は、今日・・・はもうだめか、明日！明日はどうですか！？」
女子高生のようなはしゃぎっぷりである。とりあえずオレも早く済ませたかったし、明日はどうせシフトも入っていないので明日とい

うことになった。
ケータイを切っていそいそと押し入れの中に入り込む。気疲れが半端ない。明日もマジ憂鬱。こんなときはさっさと寝てしまうに限る。

Where is her heart? 3

翌日、オレは臨時職員っぽく見える格好をして、指定されたカフェに行く。もっとも、オレの持っている安物の服では限界があるのだが、自殺者に親身になることを信条にしているとか何とか、理由を後付けすれば納得するだろう。
先に来ていた高嶋優衣と適当な挨拶口上を並べる。では早速と言って、ボイスレコーダーを出した。“ジェノ”といいこいつといい、骨董好きなのだろうか？
「では、よろしくお願いします。まず、藤田さんはどういった業務を行っているのでしょうか？」
お、最初は軽く来たな。
「えっと、基本的にはカウンセリング。自殺しそうな人を説得したりとか・・・です」
おっと危ない。一応臨時職員ということで来てたんだった。ちゃんとそこの壁は設けなくてはならない。あーあ、めんどくせ。
「つまり、勝手に自殺しそうな人をセンターに送りこむということですか？」
ん？棘がある。・・・ああ、そういえば前の口ぶりから察するにこの人は支援法反対派か。でも仕事とプライベートな感情は分けろよ。
「いや、ちゃんと更生させて社会復帰した人もいます」
・・・はずだ。
「精神病だったらちゃんと病院に送って、治療をしています」
・・・はずだ。
「それで、本人の希望がある場合のみ、センターに送られています」
・・・なのか？
残念ながら何も知らない。所詮オレはトモさんの手足だ。
なんだ？精神病のくだりのあたりで表情が険しくなった気がする。
気のせいか。

「・・・なるほど。では次の質問に移らせていただきます。支援法の受け入れに関してです。末期がん患者に対してセンターでの受け入れが拒否されたという事例があるのですが、それについてはどう思われますか？」
あったのか、そんなこと。知らねえし。でもセンターの二つの目的から言ってわからないでもない。末期がん患者は自分で死ぬのが難しいし（もちろん不可能ではないが）、がんが全身に転移していれば移植も不可能だ。つまり、センターで受け入れるだけ無駄だということ。
「別に問題はないと思う・・・思いますが」
「なぜですか？」
うおう、突っ込んできやがる。
「そうですね。まず、そもそもその患者はセンターの意義を取り違えていますね。センターは自殺者を救う所じゃなくて、生きている人を救うところなんですよ」
詭弁だ。実にくだらない。今悟った。オレがここでこうして質問に答えることに意味はない。暇つぶしにすらならない。ただの時間の無駄だ。
こいつは徹底的に支援法とセンターに対抗したい。記事にしてそれを知らしめたい。だから記事にできそうな事だったら何でもよかったわけだ。こいつにとっては反対派の記事を書くのが第一で、オレとの会話はどうだっていいというわけだ。
「楽に死にたいのなら安楽死を望めばいい。現代医療では可能でしたよね？その患者がわざわざセンターを選んだ理由がわからない」
高嶋優衣はむっとした表情をする。絶対に記者には向いてないと思う。
「その患者は未来を生きる人々の力になれればと思ってのことだったそうですよ」
やべ、笑えてきた。そのもしかしてがんが何か知らなかったのか？ていうかこの女も知らねえのか？未来のために自分の体を財産にす

る？その臓器は爆弾なのに？細胞がＤＮＡレベルで変異して無限に毒をふりまき続けるのに？なんだそれは。未来のためを思うなら、さっさと身を引け。それともなにか？その患者はレシピエントをがんにしたかったのか？無限に増える細胞を力か何かと勘違いしたのか？

「残念ながらその方では何の力にもなれませんよ」

これでも必死にオブラートで包んだ言葉である。もう包みすぎて蛾の繭みたいになってる。ほんとはこう言いたい。

―――身の程を知れ。

高嶋優衣押し黙る。無言で心の中で気持ち（おそらく怒り）を整理して、顔を上げた。

「・・・では、次の質問です。支援法によってセンターが行っている行為は殺人ではないかという見方があります。それについてはどう思いますか？」

駄目だ、我慢できねえ。笑いが止まんねえ。

「・・・どうされました？」

さあ、どうしちゃったんだろうな。わかんねえ。オレ自身わかんねえよ。

「失礼。・・・殺人ではありませんよ。それについては断言できます」

だって、「アレ」は死んじゃいないから。生きてはいないけど、死んだこととにすらならない。

「なぜですか？」

「ちなみにセンターでの所謂「自殺」の仕方についてはどう聞いていますか」

「えっと、強力な麻酔を使うと聞いています」

半分正解だな。まあ、そのルートで行くか。嘘は得意だ。オレの人生そのものが冗談みたいなものだから。

「そうです。しかし、志願者は自分の意思でセンターに登録します。そして、麻酔を打つのも自分の手で行います。さすがに踏ん切りが

つかない方もいるので、その時は承諾をいただいて、職員の手を貸します」
「つまり、殺人ではないと？」
「そうですね。あえて言うなら同意殺人にはなるでしょうね。その特例こそが支援法の大本です。もちろん受け取り方は人によってさまざまですが、少なくとも殺人「罪」にはなりません」
ククク、爆笑。マジ腹いてえ。つーか片腹痛い。なんて茶番。
「・・・わかりました。では・・・」
質問は延々と続く。オレは胸の内で笑いを必死にこらえながら、それなりにちゃんとしている（と外からは見える）答えを返し続ける。そして最後に彼女は言った。
「今度仕事をちゃんと見学させていただきたいのですが」
・・・は？
「ですから、どのような業務なのかを取材したいのです」
いやいや、無理無理。そんなの許したらオレの命は今日までだよ。
突然カフェに鳴り響く着信音。オレのではない。オレの着信音はこんなファンシーな感じじゃない。
「あっ、私です。申し訳ありません」
マナーモードにしとけ！・・・ってオレもだけど。
「あっ、はい。・・・えっ！？そうなんですか！？わかりました、すぐ戻ります」
ケータイを切って、パソコンを閉じてバックに詰める。
「申し訳ございません。会社のほうでトラブルがあって、取材はここまでということで。どうもありがとうございました。仕事の件、よろしくお願いします」
鞄を背負ってレジに向かって行く。・・・っておい、ふざけんな！
なに勝手に了承したことにしてくれてんだよ！

Where is her heart? 4

「はあ、何をやってるんだ、お前は。だいたいな、反対派の人間に真っ向から賛成を打ち出す奴があるか。しかも最後は押し切られる形で。・・・いや、もういい、最初からお前にそこまで期待はしていない」
経過報告。こっぴどく怒られるオレ。オレの中では理不尽極まりないことで怒られている気がするのだが、トモさんいわくオレが悪いらしい。
「仕方ないな。圧力をかけるしかあるまい。本当はやりたくないのだが、これ以上野放しにしておくわけにもいかない」
トモさんの憂鬱気な顔が目に浮かぶようだ。今頃眉間にしわが４本。
「それでももし近づいてくることがあったらすぐ報告しなさい。それで、何かを聞かれても適当にあしらうこと。絶対にセンターについて答えるな」
りょーかい、と力なく返す。トモさんは相変わらず断りなくケータイを切った。なんだろう、トモさんのケータイには制限時間でもついているのだろうか。
圧力をかけてくれるならオレとしては申し分ない。もともとオレにはセンターを庇護する理由なんてないし、怪しむんなら勝手に怪しんでくれればいい。要するに、オレに害が降りかからなければそれでいい。これでオレの部屋に知らない人が座っていることもなくなるだろう。ていうかそろそろ鍵つけなおそうかな。今だけは金もあるし。

だが、オレの考えは甘かった。オレはジャーナリストという好奇心のためなら虎穴（いまだに勢いの衰えない「とらのあな」とかいうオタクの聖地ではない。まあ、ある意味正しいが）ですら我が家感覚で入り込む人種をなめていた。

「どうしてカウンセラーをやっているのにバイトもしてるんですか？」
いつもに比べ、やたらカジュアルな格好だった。ちなみにあたりはうす暗い。ようするに出社をしてからここに来たということ。業務外だということ。ようするにプライベートの格好はこんな感じだということだ。いつもジーンズにＴシャツのオレが何をかいわんやと言ったところだが。
圧力がかかっていることくらいは本人も認識しているだろうが、オレは知らぬ存ぜぬで行く。注意事項を５０項目ほどトモさんからメールで送られている。しかしなんだろうな、これ。鍵をつけなおさなかった祟りだろうか。それならトモさんを祟ってほしい。まあ、間違いなくトモさんなら祟りごと撃ち殺すだろうけど。やれやれ、面倒事は御免なのに。
「臨時の職務だからな。バイトでもしないと食ってけないんだよ」
「ああ、なるほど」
納得です、と高嶋優衣は手を打つ。職務中でないからか、いつもみたいに無理している感じはない。それは恰好を見ればだれでも納得するかもしれない。いや、別にセンスが悪いわけじゃなく、なんていうかこう、行きすぎてるだけだ。
・・・オレは一体何のフォローをしてるんだ？
ちなみに今は休憩中。ただしさっきまで重い荷物を運び続けていたので追い払う気力もない。
「ちなみに、私がここに来たってこと、言わないでくださいね。編集長に取材中止を
宣言されて、下手したら謹慎なんです。どうやら圧力がかかってるらしくて」
などと、あまりにもわかりきったことを言う。しかし、そこをオレに言っちゃうあたり、ああ、こいつ馬鹿なんだなと思う。まあ、人の家に不法侵入する奴に何をかいわんやだけど。
「聞かせてください。カウンセラーとしての誇り、みたいなのはな

いんですか？」
たとえば、自分の塾の講師が深夜に交通整理をしていたら幻滅だろう。今オレはこんなに頑張って勉強してるのに、その先にあるのがああなのか、と。だがそれは、交通整理を蔑む頭脳労働派の考え方だ。仮にオレが本職でカウンセラーなるものをやっていても（もちろんオレが今やってるようなものではなく）、誇りなるものは持たない。
「誇り？そんなもんいらねえだろ。そもそも誰に誇るんだ？」
自分か？他人か？それに何の価値があるんだ？オレには分からない。もちろん言語としてはわかる。誇り、矜持、プライド、ｐｒｉｄｅ・・・。概念としてはわかる。名誉に感じること。だが、だからなんだ？そんなものがなんの役に立つ？足を引っ張るだけだろう。だったらそんなものは最初からいらない。
「・・・・・・」
高嶋優衣は答えない。
「オレにはあんたがそこまで頑張る意味がわからない。圧力？だっけ。しらねーけど。それがあんだろ？それでも頑張るのがあんたの言う誇りってやつなのか？」
少しわざとらしかった気もする。ま、いっか。
高嶋優衣は沈黙のまま首を横に振った。
「違います。誇りとか、そんなきれいなものじゃありません！これは私の復讐です！センターで殺された友人の・・・」
相変わらず声がでかい。こいつ、忍ぶ気あんのか。謹慎させられてしまえ！
「だから・・・だから絶対に私はセンターの全貌を暴いて見せます！」
ああ、やっぱ馬鹿だな、とオレは思う。こいつの価値観は１つしかない。そりゃ勿論こいつが確固たる個人である以上、二つもの価値観を持っていることは人格の破たんを意味するが、こいつの視野は著しく狭い。美術品をのぞき穴から見て楽しいか？ガラスケースで

見た方が良いに決まってんだろ。さらに言うなら浮かせてガラスの球に入れればさらに良い。それがわかっていないのだ。だが、あらゆることの当事者というのは案外そういうものかもしれない。
「そんなの知るかよ。殺された？はっ、センターは誰も殺さねえよ。志願者が勝手に死ぬだけだ。死にたくてセンターに入ったんだろ？願いがかなってよかったじゃねえか」
もうやめだ。猫を被るのも無理するのもやめだ。オレはオレの言いたいことを言わせてもらう。
「ひどい・・・」
高嶋優衣は肩を震わせる。にらんだ眼はその攻撃的なファッションと合わせて確かに力強い。しかし、それは強さなのだ。オレはここ数ヶ月間、強さでも弱さでもない絶望が込められた目を見てきた。失望をたたえた目で見られてきた。それに比べれば、この目はいささかも怖くない。
「何が？こんな偽物の世界なんだ。生きてようが死んでようが同じ。テレビをつけるか消すかの差だ」
「・・・・・・あなたは！」
高嶋優衣は声を上げる。オレの言葉をこれ以上聞きたくないと叫んだ。
「あなたは、自殺を肯定しますか？」
自問自答。オレは6年間この問いを自分の中で繰り返してきた。つまり、お前はお前自身を殺せるかということ。人殺しになれるかということ。
「どうしました？聞いているんです！あなたは自殺の存在を肯定しますか！？」
聞かれなくたって、とっくに答えは決まってる。
「・・・否定はしない。肯定もしない」
「じゃあなんでセンターでカウンセリングなんか・・・」
「静かにっ！！」
突然声を上げたオレに彼女は驚く。次いで立ち上がって肩に手を回

したオレに困惑する。
「やっぱそこはロングパスに合わせるべきだったよな。やっぱさ、攻撃力が低いんだから一発狙いで行くしかないんだって」
突然話を変えたオレに眉をひそめ、声を上げた。
「またはぐらかすつもりですか！」
いや、マジで黙れお前。
肩に手を回したまま歩きながら目線だけは背後を見る。そこには確かにただならぬ気配を持ったスーツ姿の男たちが立っていた。
地下鉄で行くか。
「すいません！用事できたんで抜けさせてもらいます」
まあきっとあのおっさんたちなら何とかなるだろう。とにかく今は行くか、地下鉄は、どのルートが良いかな。
「ついでだ。送ってくわ。家は品川のほうだったよな」
男たちに聞こえるように声を上げる。もちろん彼女の家は知らない。興味もない。
「あ、いえ、違います！しながわじゃなく、てっ・・・！」
うっかり住所を言いそうになるバカ女の首に力を込めて黙らせる。
「いたいっ、いたいです！警察を呼びますよ！！」
うぜえ。誰のためにやってると思ってんだ。
「そーかそーか、品川かぁ」
睨みながらもいい加減腕を離す。オレとしてもこんなパンクなファッションをした女にあまり近づきたくない。
「さっきからモノローグで私のファッションセンスをバカにされている気がします！」
うおお、大正解。しかしそう思うってことはそんな風に自分の服装を感じているということか？
とにかく適当な切符を買って、出発間際の電車に乗り込む。
「なんなんですか一体！」
帰宅ラッシュにつき混んでいる。大声を上げるような女はもちろん凝視の対象である。

「いいか、これからお前は何も考えるな。そんでオレが手を引いたら黙って動け」
なんですか、突然！ふざけないでください！！という叫び声を無視して路線図を眺める。よし、２つ動いたら別の線に乗り換えて、と。電車に揺られながら考える。昔々というほどでもない、ほんの数ヶ月前の話。
オレは確かに死にたかった。だけど最後に死にたくないと言った。もしかしたらオレは“ジェノ”のようにオレと同じような奴を探しているのかもしれない。だけど、そんな奴はどこにもいない。当然だ。この世にオレという存在はオレ一人しかいないのだから。
「よし、行くぞ！」
女らしい小さな手を引く。階段を駆け上がり、駆けおりて飛び込み乗車する。
「よし、次は、この方向だから、ここから・・・」
「あの、もしかして私今追われてます？」
ああ、さすがに気づいたか。
「ん～～、どうだろ」
「でも圧力をかけたり妨害するのはやましいことがある証拠・・・」
「そうか？たとえばの話。たとえばの話だぜ？あんたなら自分の家に勝手に入られていろいろと嗅ぎ回れたらどうだ？『なにも盗まなきゃ別にいい』って許せるか？」
「あれは、その・・・」
「オレならやだね」
やれやれ、さすがに無理、か。相手はプロだ。こちらの心理を的確に読んでくる。こうなったらこちらも最後の手段というか女王様に登場していただこう。
電車を降りて、片手で手を引きながら片手でケータイで電話をかける。
「もしもし、トモさん？なんかめんどくさいことになってるんスけど、なんとかしてもらえませんか？」

困ったときのトモ頼み。
「知っている。私の部下ではないがな。放っておこうかとも思ったが、お前がかかわっているのなら無視するわけにもいくまい。その代わり条件だ。今から言う場所にその女を連れてこい」
トモさんはある場所をオレに示す。ああ、なるほどね。その手できたか。さすがトモさん、頭の回転の早さは計り知れない。しかしここからだと一度戻らなきゃだな。しかもエレベーターで上にも行かなきゃ。・・・めんどくさい。
「いくぞ」
ケータイを閉じて手を引く。目で確認してなかったから若干不安だったが、ちゃんと高嶋優衣だった。知らないおばさんだったらどうしようかと内心ひやひやしていたが、そんな面白いことにはならないらしい。
告げられた場所は言ったことのないところだったが、有名な場所だ。迷うことはないだろう。

Where is her heart? 5

首都小児病院――――
所謂センターの産物。
センターの中で何年も解決法を審議し続けているが、それでも一向に解決しない問題がある。
自殺に至るまでにはそこそこ長い人生経験が必要になる。それがなければ人生に絶望することなどほとんどない。何も知らない子供は絶望すら分からないということだ。つまり、毎年一万人もいる自殺者のうちのほとんどが大人であるということ。そして重要なのは、臓器移植における適合の問題。
血液型、サイズ、部位によっては遺伝子型など、移植が成功するためには様々な障害が存在する。ここで問題になるのはサイズであり、ようするに大人の臓器のほとんどは子供に移植できないということ。部位によっては大人の臓器が余っているのに子供の臓器は全然足りない。さて、この問題をどうするか。
解決法1、技術を進歩させる。これができれば世話ない。
解決法2、子供のレシピエントを待つ。一般的な脳死や病死した子供のうち、親が承諾した場合は移植可能な臓器を移植できる。
解決法3、患者が大人になるまで待つ。
1はもちろん研究がつづけられているが、2と3はどうしても患者に長生きしてもらう必要がある。
そこで考え出されたのがこの病院。患者を一堂に集めることで医療効率を上昇させ、さらに移植も病院内で行う。この利点は何か。ともに闘病していた仲間が回復する。次は自分の番。頑張ってみようと思うだろう。人によっては根拠のない根性論と批判するが、人間の根性をバカにしてはいけない。本人の頑張り次第で栄養摂取の向上などなど長生きすることは可能だ。批判したければデータを見ることだ。

この病院には１５歳以下の子供しかいない。もちろん中には間に合わずに死んでしまう子供もいるが、それでもこの病院の存在が子供たちの命を救っていることに変わりはない。
さて、そんな皮肉るのもいささかはばかれる病院にどうしてオレがいるかというと、そりゃトモさんに呼ばれたからに決まってる。
「藤田の上司の井上といいます。高嶋さんのお話は藤田から聞いております。本日はぜひ見ていただきたいものがございまして、お呼び立てしました」
応対したトモさんは笑顔バージョン。ああ、なるほど、そういう流れね。じゃあオレいらねえじゃん。オレは軽くため息をつき、歩き出したトモさんと高嶋優衣の後を追った。
トモさんが向かうのはＡ棟。いるのは移植手術が成功し、経過観察も終盤で、退院間近な子供たち。９時の就寝までの間、集合スペースで仲良さそうに話している。オレはここに来るのは初めてだが、ここだけ見るとほかの小児病棟とあまり変わらないように見える。高嶋優衣は何も言わなかった。何も言わずに支援法に命を救われ、生を喜ぶ子供たちを見ていた。
トモさんのやりたいことはわかる。でもさ、ちょっと卑怯じゃないか？この空気に水を差したがるオレがいる。
「確かに支援法にはまだまだ倫理面に大きな問題があります。１つの命を救うために別の命を奪う。それはあまりにも大きな矛盾です」
しかし、とトモさんは笑顔を浮かべて続ける。視線の先には笑いあう子供たち。
「あの子は先週まで目が見えませんでした。今でも視力は好調とは言えませんが、矯正によって日常生活に不自由がない程度には見えるようになりました。あの子は生まれつきの重度の腎不全で、ずっと透析を受けてきました。しかし、今では自分で用を足すことができます。あの子は先月まで外に出たことはありません。白血球の異常で、免疫があまりに弱く、生まれてすぐに滅菌室での暮らしを余儀なくされていました」

ずいぶん気にかけてるんだな、と思う。まあ、トモさんのパーソナリティを鑑みればわからないことではないか。
「・・・・・・」
高嶋優衣は何も言わず、じっと子供たちを見ている。その視線に一人が気付いて、手を振った。３人のうち振り返したのはトモさんだけだ。
「この笑顔を守るために、私たちは矛盾を抱え続けます。それだけの覚悟が私たちにはあるのです」
トモさんはぶれない。信じるものが変わらない。だから強い。多分これこそが小学校の担任が言っていた“強さ”とやらなんだろう。
高嶋優衣は嗚咽を漏らす。その頬には涙が見て取れる。
「私の友人も・・・エミも、今どこかで誰かの笑顔になっているのでしょうか？」
友人がセンターで殺されたと言っていた。もしかしたらこの中にいるかもしれないし、まだ移植待ちかもしれない。
「ええ、きっと」
トモさんは言った。きっとオレでも同じこと言うだろうな、とかガラにもなくそう思った。

「お疲れ様、タカ君。うまくやってくれたわね」
高嶋優衣を送って、ロビーに座るオレの横にトモさんは座る。その表情はいつもと同じ。笑顔のまま。あっちのトモさんと同様にこちらのトモさんも感情表現にあまりにも大きな制限がある。あっちだろうがこっちだろうが結局変わらない。どちらも等しく欠けている。
「いや、オレが何もしなくてもトモさんがいるだけで問題なかったでしょ」
案内役というのもおこがましい。オレは無駄に場をかき乱しただけだ。
「それに、半分は事実だとしても、半分は詭弁でしょう？」
確かに嘘はついていない。ただ、１つの面だけ見ればああなるとい

うだけ。それだけで納得したあの女も相当馬鹿だ。
「そうかしら？」
泡の音。何かと思ってあたりを見て見る。それが記憶によるものだと気付いたのは数秒後。恐怖を思い出すまでさらに数瞬――――
「・・・・・・」
トモさんにはわからないだろう。決してぶれない信念のあるトモさんには、あの異常がいかに異常かわからない。
「とにかく、おかげで助かったわ。上司からの褒め言葉は素直に受け取っておきなさい」
立ちあがって、オレの肩に手を置いた。それは不愉快とはいかなくても不可解で、オレは何も答えられない。オレは何も応えない。オレの中のどこを探してもこの問いの解は出てこない。
トモさんがいなくなってしばらくしてから、オレは立ち上がって病院を出た。ここは上の、しかも排気ガスとは無縁な場所にある。それでも星はどこにもない。満月が1つ、下のほうに浮かんでいる。東京の天は薄気味悪い。大気汚染と明かりのせいで星がない空。深いねっとりと絡みつくような闇色はあの日の動悸を思い出させる。
「・・・・・・・・・・・・・・くそっ」
オレはようやく足を進める。忘れたくても忘れられないあの日の自分。もはや価値のないはずの過去はこの闇のようにオレを絡めて放さない。

Dead Line 1

――普通が嫌いだった。
凡俗であることが耐えられなかった。
あるいはそちらのほうがありふれていたのかもしれない。つまりオレはいくらでもいるありふれた「個性を求める」子供たちのうちの1つ。
小学校のディベートでわざわざ賛成から少数派の反対に移った。インプッターゲームはやってもよいか、というどうでもいいものだった。自分の意見よりも4人しかいない反対派のほうに魅力を感じた。将来の夢を聞かれて、周囲のように運動選手と答えることが耐えられなかった。だから周囲にはいなかった「夢はない」といつも答えた。
頭はよかったし、運動神経もよかった。子供のころに何かをして負けた覚えがほとんどない。それは果たして凄かったからなのか、それとも勝てる勝負しかしなかったからなのかは分からない。
だからこそ、自分の現実を知ってしまっていた。将来はすでに決まってしまっていて、夢など持つだけムダであり、ただの虚無だと知っていた。
東海市、旧静岡県。
しかしそんな名前なんてもう意味はないのかもしれない。むしろこう一言で言ってしまった方が通りがいいだろう。
――地方、と。
東京は豊かで人が多い。しかし、いかんせん土地が少ない。だから産業を発展させることができないのだ。いかに上に街を作ろうともそれは変わらない。それとは真逆に地方には少ない人と、あまりにも広大な土地がある。この差をいかに埋めるか。ようするに役割を国が定めてしまったというわけだ。
米国のような大農場。それが可能になった。余っていた土地を国が

買い取り、農家を名乗り出るものに提供する。農家は地方の田舎暮らしをしなければならないが、仕事に困ることはない。補償制度も整っていて、水害や日照りで作物が全滅しても、食うに困ることはない。作物は複数の企業に分割して買い取られ、都市で売られる。同時に品種改良や遺伝子操作も積極的に行われ、少なくともここ２０年間はこのやり方での破たんは見られない。

地方に住んでいるものは総じて金持ちだ。しかし、それは土地に縛られた金である。土地を手放して都市で暮らそうと思えば膨大な手続きと支払いが待っている。あるいはそれは囚人なのかもしれないが、本人たちはそうは思っていない。品種改良のおかげで手間が少なくなった作物を作り、出荷すれば何不自由なく暮らしていける。周囲にコンビニやスーパーは少ない（あるところにはあるが、おおむね無人であって、販売は機械がする）ので、たいていの商品は通販で買う。

オレの両親はメロン農家をやっていた。南アルプスと暖流のせいで無駄に暑い静岡の土地をさらにビニールハウスで囲い、メロンなどとなくても別に誰も困らない嗜好品を生産する。なんだよメロンって！誰の役に立つんだよって話だ。このメロン農家はこの制度が始まる前から脈々と受け継がれていたらしく、戦後にまでさかのぼるというから驚きだ。もっとも、制度によって土地面積が１０倍になったので、元がどうであれ関係ないだろう。オレにとって最も重要なのは、オレの将来は両親の後を継いでメロン農家になるしかないということだ。

地方にもちゃんと学校がある。中学までは義務教育なので、国としてもそれを放置するわけにもいかない。地域によっては中学校には１クラスしかない、みたいなところもあるが、オレの周囲には作地面積当たりの手間が大きい米農家も多くいたので、割と生徒がいた。そうは言っても一年の４月には同学年の生徒の名前は完全に覚えられるくらいのものだったし、中学に行くのに無人バスで３０分かかったが。

オレはここが嫌いだった。変わらない平凡な毎日。毎年機械人形のように同じことを繰り返す両親。不変で退屈な日常。テレビである時、東京のタレントが地方に行って「空気がうまい」と言っていた。馬鹿じゃないのか、と思った。空気がうまい？それで腹が満たされるのか？それで退屈が満たされるのか？綺麗なのは当たり前だ。平々凡々と暮らしてるから森がある。木があれば大気の交換をする。そんなことも知らないのか？

中学に上がるころには平凡なクラスメイトと触れあうことすらも耐えがたくなっていた。もちろんオレは誰よりも能力があって、社交性がいかに大事かわかっていたので表面上はクラスの中心であり続けた。馬鹿なクラスメイトどもはすっかりだまされていたようだ。

そんなころ、オレに転機が訪れた。

自殺支援法――――制定。

オレは感動した。心が震えたのがわかった。なんて普通じゃないんだ、と思った。感動が収まるまで数分、そしてそれがオレの人生の目標になるのは一瞬だった。

センターの職員になる。それがオレの夢。誰かに聞かれたらそう答えた。それには東京に行って、一流大学を出なければならない。そのレベルの大学に行くと言えば両親も納得するだろう。幸いオレには年が少し離れた妹がいる。メロン農家は妹が継ぐことだってできる。

オレは必死に勉強した。もちろんガリ勉なんて拒絶の対象となる面をクラスメイトに見せたりはしない。普段は今まで通り何の努力もしないができる奴、というスタンスを取り続けた。そして隠れて努力した。

どうやら両親もオレを応援してくれる気になったらしい。あたりに高校はなかったので通信制ではあるが、高校に入ることを許してくれた。

思えばあの頃はオレの人生の中で一番充実していたのかもしれない。少なくとも夢があった。夢を持ち、それに向かって努力する子供。

ありふれた存在の中に浸っていることを許していた。もっとも、当時はそんなことに気づいていなかったが。
だが、そんな日々が7年ほど続いたある日。唐突にオレは――――飽きた。
中学校3年間。通信高校4年間。大検を取り、大学を受け、落ちた。それ自体はわかっていたことだ。都市の奴らは小学生から、あるいは幼稚園のころから努力している。それは模試の結果にも如実に出ていた。だが、一年間努力すればなんとかなる。オレはやる気に満ちていた。
何があったんだろうか、オレ自身にもわからない。模試の結果が届いて、どんなに間違っても受かるというレベルの学力に達した時だったと思う。
何をやってるんだオレは、と思った。今年で20歳。7年間も使っていったい何をやっていた？職員になる？なってどうする。もう7年だ。職員だって十分平凡な存在じゃないか。そんなものになったところでどうせ誰かの下らない人生の焼き写しでしかない。
人生はまた、退屈になった。
――――ああ、そうか。
オレは思う。
――――そういうことか。
オレは考える。
――――オレには役割がないのか。
オレはつぶやく。
――――だからこんなに退屈なのか。
オレは言う。
――――ああ、死のう。
オレは・・・オレは、決意した。
大学には当然のように合格した。家族との別れもそこそこに上京。
オレはこの街に来た。

Dead Line 2

都市であっても地方であっても蚊のうざったさは変わらない。めんどくさいから血を吸わせてやるか、と考え始めたのは何日前だっただろうか。今では死に向かうオレよりも必死に生きるこいつらの命のほうが尊く見える。

一寸の虫にも五分の魂。ならば今のオレの魂は一体何厘なんだろうか。たぶんゼロだろう。少なくとも、オレはオレの内側に魂を感じることはできない。

大学に入って数カ月。とはいってもほとんど行かない場所だから、自分が所属していたという実感もない。最初からやる気はなかったし、こうなることは初めから決まっていた。

大学を辞めたのは昨日のこと。本当は入学してすぐに辞めるつもりだったが、だらだらと続けてしまっていたのは良心の呵責のせいだろう。親にだって恩がある。それを感じないほどオレは馬鹿じゃない。多分そういうくくりがオレをとどめていた。だが、それも終わり。もはや全てがどうでもいい。

日本一勉強が嫌いと自認する大学で唯一の友人はなんて言っていたんだったか。それなのに無理やり勉強をさせ続けられたせいで相当な若ハゲのあいつの奇妙奇天烈な言葉の数々の中ではずいぶんまともだったと思う。

「ちくしょう、先越された！見とけよ、オレもすぐ追いついてやる！！」

だったか。もちろんそれは後を追って死ぬということではあるまい。あいつには学費が底をついたと言ってある。都市で育ったあいつは地方出身者がどれだけ金持ちかを知らない。土地を離れる以外のことなら大抵のことはできるのに。

死が恐ろしいなんて感じたこともない。振り返ってみれば、どんな時もオレは生きていなかった。朝起きて、普通な日常を送り、夜眠

る。オレ自身がロボットで、さまざまな記憶はあらかじめつくられていて、今さっき動き出したと言った方がまだ納得できる。それくらいの現実感のなさ。オレにとっては現実は虚無。だから今は何も感じない。
あるいは小説。今日のオレのストーリーがあらかじめ決められている。それは一日に一冊ずつ読まれ、終わりは常に死である。バッドエンドならぬデッドエンドというわけだ。
はは、こりゃ面白い。人生ってのはただの小説ってわけだ。しかもとびきりの絶版商品。納得した。だからか。だからこんなにつまらないのか。だからオレは何をやっても誰かの焼き写しのように感じていたのか。そりゃそうだろう。すでにある活字を線路のようにたどってるだけなんだから。
自殺者センターの場所は知られていない。実在するかも怪しい施設だとも言われている。だが、どうであれ関係ない。実際に志願者がして、ちゃんと臓器が提供されているということは死んでいるということだ。死ねるならばそれでいい。ほかに望むことはない。
長かったオレの人生。楽しかったことなど何一つない。少なくとも今のオレはそう実感している。ただつまらないだけ。それもこれで終わり。
脳髄に響くインターホンが鳴る。オレは無言で立ち上がり、今や骨とう品に近いスチール製のドアを開けた。立っていたのはスーツ姿の男。
「どうも。藤田鷹雄さんですね。東京都立自殺支援センターのものです。お迎えにあがりました。身辺整理はお済ですか？」
男は若い。といってもオレと１０近く違うだろう。要するにエリート中のエリート。オレが決してなれない、雲の上にいるお方。しかし、こいつも誰かの焼き写しだ。
男の問いに首肯する。しゃべるのはめんどくさい。できればもう言葉を発することなく死にたい。面倒事は御免だから。
男の言われるままに近所のコンビニにでも行くような格好で部屋を

出、鍵をかける。なんとなく、いつもの習慣だったが、男に驚かれた。自殺者というのはこういう日常の動作ですら普通はやらないものらしい。だからどうした、という言葉を飲み込んだ。
真っ黒なバンの後部座席に乗せられる。機密のためか、窓さえすべて黒塗り。逆に怪しい。中にはすでに3人の明らかに志願者である表情をした男女と、明らかに堅気ではないスーツ姿の高年が座っていた。志願者たちはオレを見ることもない。何をするわけでもなく、ぼーっと自分の膝を眺めていた。まるで面白い映画がそこに上映されているように凝視している。
オーケイ。そういうことか。まあいいや。オレもお前たちに一切興味はない。どうせこれからお互い死ぬ身だ。最期くらい仲良くしようぜ、なんて言わねえよ。
真っ黒なバンはゆっくりと発進し、エレベーターホールで上昇すると、今度は信じられない速度で移動する。もうどちらの方向に向かっているかは分からない。もともとそんなもの探る気もない。ただ腹減ったなと思うだけだ。身辺整理というのなら、死ぬ前に飯でも食っとくべきだったか。
どのくらい経っただろうか。乗ったのが昼ころで、夕方だろうか、夜だろうか。それとも昼のままだろうか。バンが開けられる。眩しい光に思わず目を細めた。それは太陽かと思ったが、ただの駐車場の蛍光灯だ。スーツ姿の高年に促され、オレたちはぞろぞろとバンを下りる。さっきの若い男が誘導し、眩しすぎるくらい壁が白い廊下を通る。迷路というか、壁が真っ白な洞窟のようだ。再び出た広い空間はまたしても白い。そして眩しい。それが標準の明るさなのだとようやく気付いた。上と下ではこんな小さなことから違うのだ。そこは広い部屋で、その中にも小さな個室がいくつかある。
「ではあなたはここで・・・次は、あなたです、どうぞ」
物の知らない子供のように志願者たちは一人ひとり誘導されていく。目に光はない。きっとこの明かりを眩しいとさえ思っていない。オレとは全く次元の違うオレと同じ自殺志願者。

「どうされました？」
若い男はオレに尋ねる。ははっ、わからねえのかよ？こんな面白いのに。こんなおかしいのに。これが笑わずにいられるか。
「ははははっ、ははははははっ」
だって考えても見ろよ。今まで生きてからずっと異端であることを望んでいたオレが、望みながらもずっと平凡だったこのオレが自殺者というくくりの中でようやく異端でいられたんだぜ？つまりさ、オレが望んでいたオレってのはこんな人間やめた底辺の底辺の底辺にしかいなかったってことだ。ははは、これが笑わずにいられるか。
「ひゃはははははは！！」
これが死なずにいられるか！！
誘導を待たずにオレは開いている個室に勝手に入る。男が制止しようとしたが、後ろ手でドアをぴしゃりとしめた。
「志願者か。今日は多いな。そこにかけろ」
中には様々な機材とデスクと患者用の丸椅子。そして白衣姿の女。胸に付けられたプレートには「井上友」と日、英、中の三か国語で書かれていた。
機材は全て検査用のものだ。だいたいどれがどんな検査をするのかもわかる。これからオレの臓器はほかの誰かの小説の冊数を増やすために使われる。そこに欠陥があったら大変だ。そのための検査だろう。
個室は思ったよりも広い。奥にも部屋がつながっている。大がかりな機械で検査したりもするのだろう。
「ほう、珍しい血液型だな。よかったな。これだけ珍しければすぐにでも移植に利用される」
この人、デリカシーゼロか？突っ込もうかと思ったがやめておいた。さっきから目つきがやたらと怖いのだ。そもそもあちらはこっちがすでに死んだ目であることを考慮したうえで、返事など全く期待せずに発言をしているのだろう。
「すいません、トイレ行ってきていいですか？」

片手でパソコンのキーボードをたたきながら、もう片方の手でアナログなカルテを書くという神技に見とれるのも飽きてきたころ、オレは言った。

「何？」

両手が止まる。目つきが変わる。物を見る目から虫を見る目になった。もちろんオレの声が聞き取れなかったわけではないだろう。しばらく逡巡した後、許可が出た。もちろん一人の監視付き。そもそもトイレの場所がわからないのでほかに選択肢はない。監視はさっきの若い男。同じように後ろをゆっくりとついていく。

Dead Line 3

「すいません、大っす」
別に理由があったわけではない。ただ、死ぬ前に1つだけ、もう少し人と違うことがしてみたくなった。だからオレはトイレの個室の天井にある扉を開け、そこに入り込んだ。
電線、コード、排気ダクト。さまざまなものを一手に集めたそこはあまりにも狭い。だが、こういう場所は故障時に修理用ロボットが入れるようになっているから細身のオレなら通れないほどでもない。ただ問題はどこに行くかだ。ここで戻っても精神的に病んでいる志願者が奇怪な行動を取った（実際さっきの爆笑もそう取られたようだ）と考えられるだけだろう。一応目的は果たしたわけだが・・・。考えながらも体は先に進む。もう初夏だしここは空調もなくて暑いからもういい加減戻ろうかな、と思ってたところ、頭上に扉があった。ラッキー、こっちから開けられる。せっかくだから幻の施設とか言われるセンターの見学でもさせてもらおうか。
扉は押すだけですんなり開いた。
こぽこぽ・・・
泡の浮かぶ音。小さいころ風呂で何度も聞いた音。ここは眩しくない。むしろ薄暗い。
「なんかの倉庫か？じゃあなんか資料でも見つかるかも・・・」
思考が、止まった。
「は・・・・・・・・・・・・」
何だよ、これ。
膝に力がなくなるのがわかる。膝だけじゃない。全身に全く力が入らない。脱力。いや、違う。これは恐怖だ。そうだ、この震え、この感覚。怖い。なんだよ、おい。冗談だろ。
円筒形のガラス管。野球ができるくらいの広い部屋にそれが所狭しと並べられている。まるで森だ。地面から突き出たガラス管は部屋

を串刺しにしているように天井に突き刺さっている。中に入っている液体。それは間違いなくただの水ではないだろう。
———だって、ただの水なら人間を腐らずに保管できるはずがない。そのうち一つに近付いてみる。全身の毛を剃られている真っ裸の女。普通なら雄として興奮を誘う姿。だが、そんなことはあり得ない。こんな不気味なものに性的興奮を覚えるはずがない。
これは何だ？死体か？死体を保管しているのか？
じゃあどうして口に自動呼吸器をつけている？脈打つ鼓動の音は何だ？死んだとは思えない生き生きとした顔色は何だ？
生きているからじゃないのか？死んでいないからじゃないのか？
森のようにそびえたつガラス管。暗すぎて向こうまでが見渡せない。だから無限に広く見える。実際相当広いのだろう。８年だ。もちろん利用され、補充のために使われたものもあるだろう。しかし、さっきの女が言っていた。血液型によってはすぐに移植されない。つまり、ここにあるのは８年間の蓄積だ。何のかって？聞くまでもないことだろう。
自殺志願者の末路に決まってる。
気になってはいた。毎年数千人もの志願者数。それに対して国内、国外合わせても移植を行える外科医は足りない。医者が足りても時間が足りない。時間は足りてもそのうち患者が足りなくなる。じゃあ臓器はどうなっている？冷凍保存されるのか？それがいつまでもつんだ？
答えは本当に簡単だった。オレが生きてきた２０年とちょっと。その間に臓器は腐っていない。それどころかより強く育っている。それはオレが生きていて、代謝を行っているからだ。自殺者の臓器の保存は難しい。じゃあ簡単だ。生きたまま管理すればいい。薬かなんかで脳だけ壊して体だけ２４時間機械で管理すればいい。少なくとも紫外線やらジャンクフードやらで汚染されている現代人よりははるかに丈夫で健康的な臓器を維持できるだろう。
これが答えだ。これがエンドだ。これがオレの求めた、あるいはオ

レの小説の作者が決めたデッドエンドだ。
「は、はは・・・」
笑っちまう。いや、笑うことすらできそうもない。オレは何を期待していた？自殺者の臓器を使って正義を語るやつらがその手段を選ぶとでも思っていたのか？そこまで道を踏み外した正義を掲げる奴らが、いまさらそんなちっぽけな倫理を気にするとでも思っていたのか？オレたちを人間扱いするとでも思ったのか？この非人道的な光景を否定する脳みそを持っていたとでも思うのか・・・！？
「誰だ！そこにいるのは！！」
「・・・・・・っ！！」
声がどこから聞こえてきたのかは分からない。オレが出てきた穴からかもしれないし、この部屋本来の入り口からかもしれなかった。そんなことは関係なく、反射的にオレは駆けだした。穴に潜る暇はない。とにかく走れ。壁があればどこかにドアがある。逃げろ。ただそれだけ。７年以上、オレが入りたくて入りたくてしょうがなかった場所は、今やオレにとって逃げなければならない場所になっていた。
「だ、誰だっ！？」
細い中年の白衣の男。オレは森の木々に隠れながら、男に当て身をする。子供時代を勉強漬けで過ごした男と地方で跡取りとして畑仕事を強要され続けたオレ。力では負ける気はない。
男は気絶した。首にかかっていたカードを奪う。恐らく何かの認証とセットでしか使えないだろうが、ＩＤを持っていて損はない。
オレは走る。廊下はどこも同じように眩しいくらい真っ白で、シミ１つなく、入り組んでいる。
ここは一体何階だ？もしかしたら地下なのか？まあいい、とにかく出口。とにかく逃げろ。自分の両足に言い聞かせる。ここ最近の怠惰な生活でなまった肺はすぐに音を上げ始めたが、それでも脳は止まることを許さない。こんな地獄みたいなところ、一瞬たりともいたくない。早く逃げなければ食われてしまう。自分の恐怖に食われ

てしまう。
洞窟のような、と思ったのはあながち間違った比喩ではなかったのだ。窓がなく閉塞感のある建物全体の空気。先もわからぬ道の末にあるのは地獄。
どこをどう走ったのかなんて覚えちゃいない。さっきまでのようにセンターの秘密を暴くなんて真似はもうごめんだ。もうなにも見たくない。あんな恐怖を味わうくらいなら死んだ方がましだ。だからここから逃げなければ。ここにいたら死ねない。冷蔵庫ならぬ冷臓庫となって倉庫が空になるまで生かされ続ける。

Dead Line 4

走って、走って、いつの間にか外にいた。恐らくは深夜。満月がオレを探すスポットライトのように照っている。車の全く通っていないハイウェイ。それは時刻のせいではないだろう。あんな地獄がそばにあるから近づけないに決まってる。

オレは止まらない。センターを出たからといって安心なことなど何一つない。追手が来るという確信がある。自殺者の臓器の保管。冷凍保存くらいならだれでも考えうることだ。それくらいならば公表すればいい。眉をひそめる者はいても、そこまでの拒絶はない。だが、あの魔の森では話が別だ。センターの場所や運営、職員までもが隠匿されている理由。くそっ、どうしてオレは何も考えなかった。それが倫理に、道徳にもとるものだとわかっているからに決まっているじゃないか。ならば、たった今すべてを知ってしまった、センターの存在を根底から覆す可能性のあるオレを野放しにしておくはずがない。

東京を出なければならない。都内では権力でどうにかなっても、地方の連中にはそれが通じない。そういう種類の特権がある。だからどこでもいい、地方の農家の保護を申し出る。生きていれば、生きてさえいればどうにかなる。

死線だ。じわりじわりとオレに近付く追手のライン。これに触れればオレは死ぬ。そして触れるまでに東京から出られればオレの勝ち。はっ、どっち道オレの人生はもう破滅じゃねえか。まあいいか。破綻していたというのなら、この世界がそもそも最初から破綻していたのだから。

とにかく今は下へ行こう。この無人は目立ちすぎる。

どうやらセンターは東京の中心近くにあったらしい。とにかく下へ行く階段を探すまでに一時間。階段を必死に駆け下りるのに３０分。

ああ、なるほど、ここの上にあったのかと考える間もなく、オレは人ごみに紛れた。センターの連中にはとっくに顔がばれているし、プロフィールもすべて公開されている。家はすぐに押さえられることになるし、場合によっては指名手配もあり得る。ごみ箱をあさり、臭い深手の帽子をかぶった。

人込みを避けることはしない。路地裏を通った方がもちろん見つかりにくいが、見つかったときは逃げられない。深夜とはいえ繁華街ならば人通りがまだある。これを利用しない手はない。

西だ。西へ急ごう。関東市、旧山梨県ならば東京寄りの場所にも農場があると聞く。

ぞくりと、背筋に寒気が走った。オレはゆっくりと振り返る。警官の格好をした二人組が走っている。その目はオレを見ていない。つまり、オレに気付いていない。まだ何とかなる。ごくごく自然に路地裏に入って隠れた。警官はそのままっすぐ走って行った。ちらりと見えたのは手に顔写真を持っていること。それがオレのじゃないという可能性ももちろんある。だが、そんな確率は砂粒程度のものだろう。ただの思いこみかもしれないが、奇妙な確信がオレにはある。

くそっ、これじゃあもう繁華街は歩けねえ。

警官まで動員できるということは、最悪東京都民全員が敵になるということだ。敵の周りに身をひそめる、という手もありっちゃありだが、見つかったらそれで終わり。死線がオレに絡みつく。

オレは———オレは、死にたくない。

逃げて、隠れてを繰り返す。相手が警官のように外見から判断しやすい相手ならばいいが、なかには明らかに何かを探す目的で路地に入るスーツ姿の男もいた。それはオレとは全く関係ないかもしれないが、警戒せずにはいられない。

満月が眩しくなくなった頃、つまり、東側の空が白くなり始めたころ、オレは下の街を出ることにした。入り組みすぎていてまっすぐ進めないのだ。明るくなれば隠れることも難しくなる。とにかく早

くここを出なければならない。
階段を上る時間ももったいない。しかし、今のうちに上に行かないと取り返しのつかないことになる。もう5時間近く逃げ続けているから体力ももう限界といっていい。だからと言って休むことなどできない。この街にオレの休まるところなどないのだから。
空はどんどん明るくなっていく。あれが死線だろう。太陽が完全に上れば、ここはあまりにもよく目立つ。砂漠の中をクジャクが走っているようなものだ。だが、なんとかなる。東京を出るまであと少し。オレのエンドは確かに先に見えている。
その時、上空から聞きなれない音が聞こえた。ひゅんひゅんと何かを振り回すような音。オレはとっさに高速の隅に並んでいる植え込みの中に身を隠した。
音の正体はヘリコプター。そういえばさっきから車は走っていない。ちくしょう、どうして気付かなかった。すでに死線はオレを越えてしまっていたことに。
「このあたりにいたのか！？」
縁から降りてきたのは3人。2人は真っ黒な格好に覆面までしているが、一人だけは覚えがある。格好こそ白衣ではなかったが、さっきの検査医。確か名前は井上友、だったか。
「飛び降りたか、それともどこかに隠れているか・・・。できれば後者であってほしいものだ。珍しい血液型だ。ぜひとも完品で回収したい。
背筋にぞくりと寒気が走る。あの女は最初からオレを人として見ちゃいない。生物としても見ちゃいない・あの女にとっては何も変わらないのだ。生きて、自殺を志願しているオレとガラス管の中で生きているあれら。どちらも等しく冷臓庫。正義を執行するための道具にすぎない。
「うわあああああ！！」
タイミングをはかって植え込みを飛び出した。黒ずくめの一人に体当たりして腰につけられている銃を奪った。

「動くなっ！！」
反撃しようとした黒づくめの動きが止まる。オレは距離を取る。格好から言って、間違いなく相手はその道のプロだろう。肉弾戦でも相当できる。拳銃を持っているからといって油断して接近を許すほどオレは馬鹿じゃない。
「バカが」
井上友はオレを見る。切れ長のその目は、見ているだけで焼けてしまいそうなほど強い。そしてその言葉は決してオレに向けたものではない。部下に対する叱責だった。この女はオレを足元の蟻程度にも思っていないのだから、怒りを持つことなどない。
くそっ、もう少しなんだ。もう少しでゴールなのに。
「来るなっ！」
一歩、こちらに足を進めた井上友に標準を切り替える。撃鉄を上げた。初めて使う拳銃は案外あっさりとオレの手になじんでいる。
「下らない。撃てるものならば撃ってみるがいい」
井上友の目が変わる。物を見る目でも、虫を見る目でもなく、敵を見る目つきに切り替わる。正義の敵の悪としてオレを見る。
「あああああああっ！！！」
腕の中に重く残る反動。耳をつんざく発砲音。力の抜けたオレの前の前に———井上友は毅然と立っていた。
瞬間、世界が一回転した。いや、そんなはずがない。世界は変わらない。狂ったまま、腐ったまま変わらない。だから回転したのはオレのほう。いや、それも正しくない。正しくは、回転させられたのはオレのほう、だ。
鼻が一気に熱くなる。それが鼻の奥から出る血の熱だと気付いた時にはすでにオレの顔面はコンクリートに叩きつけられていた。後頭部には女の力とは思えないほどのGがかかっている。
「どけっ、どけっ・・・くそっ」
身動きを取ることなんてできるはずもない。そういう組伏せられたかをしている。頭の上の方から声が聞こえた。

「何が不満だ？このままじっとしていればちゃんとセンターに送り返して死ねるぞ。死にたかったのだろう？」
・・・そうだ。オレは死にたかった。何もかもがめんどくさい。現代人にありがちな無気力。ありがちな逃避。ありがちな死。そんなものに甘んじるつもりでいた。生きるよりはましだろうと。
「死にたくない。死にたくない。死にたくない死にたくない死にたくない・・・」
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。
首に受ける強烈な衝撃。ショックを受けたパソコンのように脳は強制終了へと移行する。
死にたくない死にたくないシニタクナイシニタクナ・・・イ・・・。

Dead Line 5

こぽこぽこぽ・・・
泡の音。ああ、オレもとうとう死んだのか。いや、死んでないのか。ただ人でなくなっただけか。ただの冷臓庫になっただけか。
目を開ける。病的なまでに真っ白な天井。息を吸ってみると肺が膨らむ。ここは管の中ではない・・・？
ゆっくりと体を起してみる。全身をまとう筋肉痛が痛かった。もともと鍛えていた体とはいえ運動するのは久々だった。
どういうことだ・・・？
あれを夢だったとか、これが夢だとか、そんなことはない。さすがにもう夢と現実がわからなくなるほど子供ではない。つまり、ここにこうしてオレが生きているということ。
なぜだ・・・？
まあいい。考えるのは後だ。病室。つまり、これから再検査ということか？ならば逃げなければならない。
ああ、そうだ。オレは、死にたくない。
ここまできてようやくわかるなんてバカだな、オレは。気付くのに２０年もかかったのか。まあいいさ。どうせ無駄に長い人生だ。泥まみれだって生きてやろうじゃないか。
いつの間にか患者用の服に着替えさせられていた。ここでじっとしているわけにはいかない。オレは生きる。生きてここを出てやる。
ビ――――
鳴り響くコール音
「・・・・・・っ！！」
センサー式のナースコールだ。オレがベッドを下りたら鳴る設定だったのだろう。くそっ、ここには窓がない。ドア以外に突破できる場所はないのだ。オレはそばにあったパイプ椅子を掴んだ。何とも頼りない武器だが、それでもないよりはましだ。

ゆっくりと、カウントダウンのようにドアがスライドする。自動式。つまり内側からは開けられない。ひょっとしたらこれはピンチの中のチャンスかもしれない。
「何をしている・・・」
「うわっ・・・・・・」
井上友。オレの記憶の中では今さっきオレを組み伏せた女が白衣姿で立っていた。
ちくしょう、どうして体が動きやがらねえ。簡単だろ？この女に一撃食らわせてその隙に逃げるだけだ。なんでだ！オレの体だろ！動けよ、おい。寝てんじゃねえよ。ふざけんなよ。今しかねえんだよ。オレは死にたくねえ。お前は違うのかよ！オレまでオレに死ねっていうのかよ・・・！
「座れ。そんなに睨むな。お前を殺すのであれば寝ている間に殺している」
どういうことだ・・・？
「死にたくないのだろう？」
混乱する。困惑する。あれだけ勉強してきたはずなのに、オレの脳はこの状況を理解することができない。数学よりも難解で、国語よりも解き難い。それが現実――
「生かしてやる。ただし、あれを見られたからには放免というわけにもいかん。監視をつけることとその監察官の手足となって働くこと。その二つが条件だ」
目を細めて女を見る。その女は物を見る目でも虫を見る目でも、かたや敵を見る目でもなく、
――人を見る、目をしていた。
「断るならば、この場で即、死んでもらう」
まるで悪魔との契約。しかし、この世は所詮地獄にある。どこへ行っても地獄絵図。ならばあるいは、この世界を統べているのは案外神なんかではなく、悪魔のほうなのかもしれない。
「世界は脆く、不確かだ。それはわたしも知っている。ならば、そ

の世界を生きて、支えてみようとは思わないか？」
差し出された手は、２０年間オレが焦がれていた非日常の色をしていた。
オレは首肯して手を握り返す。握ってみると、武骨だと思ったその手は思ったよりも柔らかかった。
こうしてオレは生きることを決意した。何の喜びもない壊れた世界だが、それでも生きて見ようと思ったのだ。
・・・もっとも、このあとすぐにあの時素直に死んどきゃよかったと後悔することになるのだが――――

Disregard

時刻は12時を回った頃だろうか。いろいろ思い出してる間にボロアパートの押し入れの中にいた。

———くそっ、眠れねえ。

体を起して部屋を出る。足はどこへ向かうでもなく勝手に進む。めんどくせえ。思い悩むのも、過去を考えのも無駄だ。脳の無駄遣い。人間なんてのは今だけ生きてりゃそれでいい。余計なことを考えるからめんどくさくなる。

死にたくなる。

勝手に進む足に道を任せてみると、いつのまにか月明かりに照らされていることに気付いた。下ではなかなか見られない光景だ。街灯の数が著しく少ないのも珍しい。この辺にはだれも住んでいないのか？

・・・ああ、なるほど、この上には道路が通ってないわけか。星は・・・見上げてもわかんねえけど、月が見えるんだからそういうことだろう。太陽の恩恵を受けられる数少ない場所ってか。でも民家も店もほとんどない。どう見てもつぶれた会社や中小工場ばっかりだな。ようは人間ってやつは太陽よりも利便性を求めるという話。傑作だ。

満月が邪魔だ。あんなのがあるせいであの夜を思い出しちまった。

ふと、オレの足が止まる。目の前にあるのは教会。割と大きい。こんなところにあって人なんか来るのか？ていうかそもそも神が来るのか？もちろんオレは神なんか信じちゃいないからキリスト教徒以前の問題だが、なんとなく扉を押してみる。鍵がかかっているかと思ったが、扉はすんなりとオレを受け入れた。

電気は付いていない。ずいぶん豪勢なステンドグラスから差し込む月明かりだけが光源だ。

「どうされました？道にでも迷われたのですか？」

神父は若い。黒い丸眼鏡をかけた顔がこちらを振り返った。
「・・・最初から道なんて歩いちゃいねえよ。ここって愚痴も聞いてくれるわけ？」
神父はゆっくりとオレのほうへ歩いてくる。しかし近づきすぎることはなく、お互いの姿が月のおかげで黙認できる距離で止まった。遠かったので見間違いかと思ったが、やはり若い。その若い神父は薄く笑う。
「いいですよ。今は特にやることもありませんから」
「はっ、暇つぶしかよ。まあ、そういえばそうか。人生ってのは退屈の連続で、生きるってことは暇な時間を殺していくってことだ」
「殺すという表現はよくありませんね」
神父っぽい言葉だな。それにしちゃ肩をすくめるなんてずいぶん神父っぽくない。
「・・・だてに神父をやっちゃいないってか？」
薄く笑う。
「まあ、だてで神父はできないでしょうね。だてが通用するのはこの眼鏡くらいなものです」
内側から眼鏡の枠に指を通す。レンズは入っていなかった。
・・・なんだこいつ。
「おや、気分を悪くされましたか？ほんの冗談ですよ」
ぽいっとレンズの入ってない眼鏡を投げ捨てる。どこまでも神父じゃねえな、こいつ。
「ところであなたは道を歩いていないとおっしゃいましたね？ではどこへ行くつもりなのですか？」
禅問答・・・は坊主の役割じゃなかったか。まあ別にいいのか。無宗教なオレにはどっちも同じにしか見えない。仏だろうが神だろうがそんなものは妄言で、戯言だ。
「別にどこでも同じだろう。今ここにいることに意味がないのと同じように、別の場所に行くことにだって意味はない」
そう、意味などない。この世界にも、他人にも、オレ自身にも。

神父はふむ、と考える。
「そうでしょうか。今あなたがいるここにはあなたがいて、私と話をしています。同じように今からあなたが行く場所には別の誰かがいて・・・。それはつまり、意味のあることではないのでしょうか」
「違うだろ。あんたと話しているのがオレである必要はないし、今からオレがどこへ行こうとそれがオレである必要はない」
それがだれであろうと同じ事だ。ならばその行動に意味はない。
「なるほど・・・。あなたはこの広い世界において、あくまでも個人でいたいのですね」
ああ、なるほど。そういえばそうだ。たしかにそうかもしれないな。
「あなたは誰かの代替となるのが嫌なのでしょう？仮に、です。あなたと別の誰か、そのどちらかしか生きられないのだとしたら、あなたは迷わず自分を選ぶことができる」
「・・・・・・」
「別にそのことを非難するつもりはありませんよ。だってあなたは仮に誰かがあなたのために自身の犠牲を名乗り出ても頑なに拒むのでしょう？」
「なるほどな。さすが、だてに神の父を名乗っちゃいねえってか」
「ですからだてでは・・・・・・って、神の父ではないのですよ」
あくまで私は神の子です。あなたと同じく神の子です。神父は言う。
「なあ、あんた。自殺についてどう思う」
別に興味はないが、なんとなく聞きたくなった。
「自殺は神に与えられた尊い命を無碍にする最低にして最悪の行為です。許されるべきではありません」
その言葉は静かすぎて、見たこともない聖書と話している気分になった。
「それは神父としての意見だろ？あんた個人の意見をきかせてくれよ」
それでこそ、あんたがここにいる意味がある。そうだろう？
「・・・・・・参りましたね。よもや私のほうが回答をし、悩むこ

とになるとは。まったく、神父がいのない人です」
苦笑する神父。神父がいってなんだ？
「そうですね。神は厳しすぎると思いますよ。この世の中で、どうしようもなくなることはあるでしょう。生きるのが苦痛になることもあるでしょう。ゆえに深みにはまってしまった人は死ぬ以外に選択肢がなくなる」
「じゃあなんだ。自殺を肯定すんのか？」
「否定はしませんよ。肯定もしませんが」
それは、どこかで聞いた答えだな。ああ、そうか。オレの答えだ。
オレの、心だ。
「・・・私がこうしているのはせめて救われない人の一部でも救うため。なぜならば私には彼らの苦しみがわかります。私は彼らと同罪・・・いえ、同類なのですから」
神父は天井を見上げる。ガラスの向こうにある月を見る。
「きれいな月でしょう？彼らは自分の内面に注視しすぎるあまり、世界とはいかなるものか、その中で自分とはかくなるものか。その本質を見失ってしまっている。人が死ぬ理由なんて簡単なものなのですよ。ほんの少し道を踏み外す、ほんの少し何かに失敗する、ほんの少し、人生が退屈すぎる・・・」
「・・・・・・」
「彼女を見てるとね、私はそう思うのですよ」
神父は月を見上げたまま言う。
「彼女？」
「話が長くなってしまいましたね。そういえばあなたには行き先がないのでした」
神父は歩き出す。オレの横を通り抜けて教会の扉を開けた。月明かりに照らされている、ある一点を指差す。
「ほら、あそこ。今晩も彼女はあそこにいます。行って、会ってごらんなさい。そこにはあなたが否定した、あなたにしかない意味とやらがあるかもしれない」

Show me the perfect world・・・・1

ここらあたりに数多く点在する廃工場。神父が指差したのはそのうちの1つの屋上。そこには確かにほかにはないものがある。
外についている非常階段を上っていく。屋上には飛び降り防止用のフェンスがついていたが、こんなもの簡単に乗り越えられる。自殺するのに必要な労力なんてその程度のものだということだろう。
「今晩は」
か細い、それでいてなぜか明るさを感じさせる声。貯水タンクに腰かける少女は、まるでピースのかけたパズルのようにはかなげだった。
何かのポリシーを感じさせる真白い服に真白い肌。病的な細い手足。腰まで届く絹のような黒髪。
「ねえ、どうして月が欠けるのか知ってる？」
かけたパズルはオレを見て、それから空を見上げてそう唇を動かした。
「月が光るのは太陽光を反射しているからだ。そして地球の公転と月の衛星軌道があるからな、そりゃ欠けない方がどうかしてる」
「そんなことは聞いてないわ」
不機嫌そうな、しかしそれでいて抑揚のない声。まるでこの世の外から語りかけられているような。
「きっとね、あれは私なの。目も当てられないような世界を見ないようにしているの。でも、ひょっとしたら世界はいい世界なんじゃないかと思ってたまに顔をのぞかせて見る。そしてまた失望するの」
「世界に失望するというのには賛成だが、おかしくねえか？この場所じゃ月から人は見えねえぞ。コンクリートだけ見て何がわかるんだ？人が生きてるのはもっと下だ」
「そうね。じゃあもしかしたらあれは私じゃないのかも」
・・・こいつ、大丈夫か？

「でも、今日はきれいな月。今日の私がここに来たのはね、あの月と私、二つの月が一緒に飛べるかな、と思ったからなの。ううん。今日だけじゃない。いつもそう。私はいつもここに来る。いつでも一緒に飛びたくて、空を飛んでみるんだけど、いつも途中で落ちてしまうの」
ああ、はいはいなるほど。了解了解。大丈夫じゃないんだな。要するに末期症状。遠目にもはかなさが伝わる。月というよりは水面のようだ。ほんの小さな石を投げるだけで、あるいは少し小さな風が吹くだけで、鏡面のようなその均衡はたやすく崩れ去る。
「当たり前だ。人間には分不相応だからな。どうしても飛びたきゃ飛行機にでも乗るんだな」
「いやよ、そんなの。そんな檻のようなものに乗ったら世界の中にいられない。私は世界が好きなの。ううん、違うわ。私が好きなのはもっときれいになった後の世界。今のこの世界じゃ駄目」
「変わらねえよ、この世界は。お前がどれだけ願っても、腐ったものが食えるようにならないようにな」
腐っている。この世界は。オレたちは全部腐った器の中にいる。だから誰もが腐ってる。もちろんオレも腐ってる。それが現実。それが全て。それで終わり。
「・・・あなたは世界が嫌いなのね」
「好きになる要素がどこにある」
オレは考える間もなく答える。当然だ、こんなものは何十何百と自問自答してきたものなのだから。
「・・・・・・あなたはカンケルね。そして私はアストラエア」
「あ？」
なんだそりゃ。
「今日はきっと見えないわ。月が明るすぎるから。だから私は月が嫌い」
はいはい、星座のことか。カンケルはかに座だったか。アストラエアは・・・確か乙女座。いや、別の説の方が定説だったか？・・・

まあいい。
「嫌いって、月はあんたなのにか？」
少女は初めてオレを見る。大きな双眸がオレを見下ろす。そして薄く笑った。
「ええ、そうよ。だから嫌い。いっそのこと静かに燃える六等星でいたかった」
「ふうん、なるほどな。だとしたらオレは六等星かもな。ここでは存在すらもできない。そんな存在。オレがいれるのは何もない世界だけだ」
「そう？私にはあなたがアルタイルに見えるわ。知ってる？夏の大三角の１つでわし座にある赤い星―――」
少女は再び空を見る。月しか見えない空を見る。
「残念ながら鳥違いだな。オレはイーグルじゃない。しがないただのホークだよ」
「同じよ。あなたは生まれながらにして強い翼を持っている。だから私と違ってあの月と一緒に飛ぶことができる」
うらやましいわ、と言う少女。よくわからない。この話がどこから始まり、今どこにあり、そしてどこに行くのかが。お互いに思いつくままにしゃべっている気がする。
「つまり、あんたとか」
「え・・・・・・？」
初めて、少女の表情が変わる。親が死んだと聞かされたような驚きの表情。いや、違うな。この壊れた少女は、たとえ親が死んだとしても表情を変えることはないのだろうから。
「あんたが月でオレが鳥、そうだろう？」
「ああ、そうか、そうかもね」
少女はゆっくりと、まるでどこにも力を込めていないかのように立ち上がる。それは、座っている絵から突然立っている絵へとスライドが切り替わったかのようだった。
「・・・・・・さようなら、大きな鳥さん。私は今夜も飛ばなくて

はならないから」
そう言って、一歩踏み出す少女。
いや、おいちょっと待て！立ってるところは貯水タンクの上だぞ。
一歩踏み出したら次にはコンクリートまでノンストップだ。
だが、頭蓋が砕け、脳髄がまき散らされる音は聞こえない。
「なんだ、それ・・・」
フェンス越しに下を見ると、少女がはねていた。オリンピックの体操選手のようにトランポリンで華麗に跳ねているのではない。まるで想定されていたように下に置かれていた完璧な衝撃吸収マットにぶつかって、それでも衝撃を殺し切れず意志のない人形のように跳ねたのだ。
オレは１つため息をついた。
・・・・・・なんて茶番だ。

Show me the perfect world・・・・2

高嶋優衣のせいで仕事をさぼったので、もしかしたら首になるんじゃないかと思っていたが、どうやらおっさんたちは何も言わずにいてくれたらしい。というわけでオレの財布の中は今のところ何とかなっている。しばらくはあっちの仕事もない。退屈じゃない＋平和ということで、オレの生活はそこそこ充実していたが、それもほんの2，3日のことだった。

「今から第三病院に来い」

ブツ。ツー、ツー、ツー

「・・・・・・」

ふざけんな！

でも行くオレ。なぜなら命がかかっているからだ。

地下鉄代は経費で落としてもらう。それくらいじゃないと割に合わない。しかし平日の昼間だって言うのにこいつらはどこへ行くんだ？どうせやることねえんだろ？家で寝てやがれ！・・・などと八つ当たりの1つも口にしてみたくもなる。そのレベルで理不尽甚だしい呼び出しだ。オレの予定、そしてオレの人権完全無視。

病院に着くと、白衣姿のトモさんが待っていた。ちなみにオレはこの人の職業を知らない。センターの職員か警官か自衛隊か医者のどれかじゃないかとにらんでいる。白衣を着ているということはセンターの職員か医者だと思うが、銃器を携帯し、あまつさえ住宅街で発砲するような非常識人だ。もしかしたら全部なのかもしれない。例によって何の説明もしてくれないトモさん。いつものことなので、全く気に留めずに、トモさんの後ろをついていく。とある個室の前で立ち止まった。

「今日お前を呼んだのはほかでもない。ある人間のカウンセリングをしてもらう」

「は？誰かわかってるならどこにいるかもわかるんでしょ？だった

ら適当な理由つけて拉致って来てセンターに・・・」
睨まれた。ものすごい目で。そうだった。センターは禁句。仕事内容はおろか職員の存在すらも機密なところなのである。高嶋優衣はあり得ないほどの例外なのだ。
「・・・ぶちこめばいいじゃないスか」
声をひそめて続ける。トモさんの睨み顔はそのままだった。ていうかまあ無表情が睨み顔みたいな人である。マジ怖え。
「人を誘拐犯みたいに言うな」
トモさんは声をひそめない。人の気配がわかる、という人外の能力をお持ちの方なので、今はこの声ならば大丈夫ということだろう。
「これは本物のカウンセリングだ」
「はあ？それこそオレの出る幕じゃないでしょ。プロに任せりゃいいじゃないスか、プロに」
なんでわざわざこんなことで呼び出されなきゃならない。まあ、今日は暇だったし。地下鉄代も経費だからまだ許せるが・・・。
「駄目だった」
じゃあなぜオレだ。ビギナーズラックを狙ってるのか？それともウケを狙ってるのか？
「さらに面倒なことにな、患者はお偉方の孫娘だ。権力者っていうのは何よりも汚点を恐れる。どうあっても身内から自殺者を出したくないらしい」
「なるほどね。安いプライドってやつか・・・」
また睨まれた。怖い。
「本人の前でそれを言うなよ。さすがの私でもかばいきれん」
今までかばわれた覚えはないが・・・？
「結果は出さなくてもいい。こちらが取り組んでいることだけ示せればいい。とにかく殺すな、条件はそれだけだ。それ以上は求めん」
「人を殺人鬼みたいに・・・」
しかもそれをトモさんに言われるなんて！屈辱だ。
あ、睨まれた。何を考えているか悟られたらしい。でもそれってト

モさんにも自覚があるってことじゃないのか？
「それほどの相手だということだ。ガラス・・・より脆いな、あれは。泥細工のような少女だ」
泥細工って・・・。仮にも少女に。
「私も一度だけ対面したが、一目見て会話をするのをやめた」
「ビビったんスか？」
睨まれる。
「そうじゃない。会話する意味がなかったんだ。あれはここにいても生きてる場所は別のどこか。そういう存在だ」
「それこそなんでオレなんスか？」
適当すぎる・・・。まじめにやれよ。
「馬鹿を言うな。私だってお前なんか使いたくはなかったさ。だが仕方ない。最後の手段だ」
要するにオレの前に何人もカウンセラーがついて玉砕していったらしい。なんてプレッシャーのかけ方だ。さすが鬼トモ。
「それに。最悪が起こっても、お前一人を始末すればそれで片がつく」
ぞくりと、背筋が寒くなる。トモさんの表情は変化しない。恐らく感情も変化していないだろう。直属の部下であるところのオレが死ぬことになってもこの人はためらわず、何も感じずに殺すだろう。
それがトモさんの生命の代償だ。生きるために失くしたものだ。
「いいから行け。できればミスるな。私としても手駒が減るのは避けたいからな」
「・・・・・・」
・・・・・・ツンデレ？
あ、睨まれた。
音もなくスライドしていく自動扉。文字通り病的なほどに真っ白な部屋。まるでここだけ世界から切り離されているような。
「・・・・・・あ！」

ああ、納得。トモさんから聞いたときは泥細工とか表現が抽象的すぎるだろ、とか思ったが、これ以上ないほどの的確さだった。
「あら？お久しぶり。大きな鳥。あるいは厭世家のカンケルさん」
やせた手足。真白い肌に真白い服。この世界にはいない女神を連想させるほどの白さ。
「あんたか。夜空の月。あるいは嘆くアストラエア」
いつかの夜に会った少女。自分を月だと言った少女。どうやらオレはとんでもない貧乏くじを引いたらしい。
「どうしたのかしら。私のお見舞い？だとしたらそれは間違いよ。だって私は病気なんかじゃないもの。おかしいというのならこの世界がおかしいの。私の方が正常なのよ。いいえ、違うわ。私も間違っている。真実はどこかにあるはずで、私はそれを探しているの」
怖いものを見る子供のように、あるいは満ち欠けを繰り返す月のように世界をのぞいては絶望する。そして自殺に走るわけか。この明かりの中でならわかる。その左手首に刻まれた死への渇望が。
「別に見舞いってわけでもねえよ。たった今あんたのカウンセラーに任命されたんだよ」
少女は首をかしげる。オレの言葉がわからず、オレがここにいる理由がわからず、自分が生きている理由がわからない。だから死を望む。
「そう言うのって本人に言ってもいいのかしら」
「さあ、いいんじゃねえのか。あんたはべつに病気じゃないんだろ？だったらカウンセリングなんてどうせ出来ねえんだしよ」
備え付けの椅子に座って伸びをする。少女は相変わらずきょとんとした表情をオレに向けていた。

リコとだけ少女は名乗った。名字を言えば誰でもわかるくらいの政治家の娘、いや、息女というべきか。というわけでオレにも名前は伏せられてる。別にそんなのはどうでもいいのでリコだけで十分。本人はあの通り面と向かって話していても常に別の世界のことしか頭にないので、名前以外はトモさんから聞いた。

壊れたのは2年前のことらしい。オレと同じく突然のこと。本人があれなので、何があったかは分からない。だがある日突然、リコは死を選んだ。

家族はそれはそれは慌てたらしい。なんせエリート中のエリート。一家全員が一度はテレビに出たことがあるような家だ。リコを何不自由なく育ててきたつもりだったし、当時のリコもかなりの才女だったらしい。

その後、手首の傷を皮膚整形で消し、精神科を無事退院した。だがしかし、やはり怖かったのだろう。家族はリコを閉じ込めた。この場合何が怖かったのかなど言うまでもない。退院をしたとはいえ精神を病んだ娘がいることが世間に知られることが怖かったに決まってる。

だがしかし、それはどうやら間違えだったようで。

最初の犠牲者はメイドだったらしい。リコの部屋に食事を運ぶ仕事をしていた。ある日突然泣き叫び、やめさせてくれと懇願した。落ち着かせて事情を聞くと、メイドは訥々と話し始めた。

窓から月を見上げながら微笑み、語りかける少女。食事をお持ちしましたと声をかけても反応がない。もちろんそのまま放っておくわけにもいかないので、カーテンを閉めて肩を揺さぶった。

「きゃあああ

あああああ！！」
部屋に鳴り響くリコの悲鳴。体の芯から凍えさせるに足る恐怖。メイドは心の底からわき上がる感情にこらえきれずに逃げ出した。逃げて逃げて自分の主人に懇願する。
リコの父親はメイドを別のものに任せ、娘の部屋に向かった。その部屋の台風でも通り過ぎたかのような凄惨な光景の中、食事用のフォークを首につきたてて倒れているリコの姿がそこにはあった――。

「まあ、典型的っちゃ典型的っスね。パニック症候群でしょう？でもそれなら治療法もあるんじゃないですか？」
トモさんはリコのものであろうカルテをパラパラとめくる。それをオレに見せる気はないらしい。
「確かに鎮静剤は利用しているが、あくまで応急処置だな。パニックの原因が内因性か外因性かもわからない。本来の治療は原因の排除から始めるのだが、それができないのは難点だ。本人はあの状態だしな」
ちなみにオレとトモさんが話している場所は病院のロビー。リコは病室にいる。最近は家族の面会もほとんどなくなったらしい。
「精神医療が発達してからずいぶん経つが、どの症例とも一致しない。本来パニック症候群は落ち着いているときはまともなものなのだがな」
パニック症候群
いわゆる感情の起伏が激しくなっている状態。ハイの時はまるで手がつけられないが、ロウの時は通常の人間。
だがリコは違う。
「複数の精神病が複合的に絡み合っているとみていいだろう」
たとえばだ、肺を病んでいる患者が心臓を病むと死亡率は激増する。これだけ医療の発達した現代においても進行度合いによっては臓器自体を回復するのは不可能に近い。日本では移植技術が発達してい

るが、逆にいえば移植しかないともいえる。何でもかんでも入れ替えるのだ。あの冷臓庫から引っ張りだすことによって。
だが、脳を引っ張りだすことはできない。それは人間を取り換えるのと同じ行為になるからだ。心は脳にあるからだ。
「事実、あの娘はパニックでない時でも自殺を図る。あれは怖いぞ。さっきまで笑っていたと思ったら急に死ぬんだ」
知っている。オレはそれを知っている。あの満月の夜、あいつが飛び降りたのは何の冗談でもなかったのだ。あいつは別に階段を下りるのが面倒だったから飛び降りたのではなく、呼吸するように自殺を図ったのだ。
「あれでもまだ減った方だ。ずっと閉じ込めていたときはひどいものだった。ベッドに縛っておけば話が早いのだが、家族が拒否したのでな」
早くねえよ。
「ストレスの発散ということスか？」
わざわざ自殺の対策をして散歩に出させる。なんてめんどくさい。だがそうするしかない現状。先回りしてマットを用意してくださる皆さん御苦労様ってとこか。
「あれもお前を気にいったみたいだし、どうやら顔見知りのようだしな。まかせた。私の目に狂いはなかったということか」
「・・・・・・」
さらりと自分褒め。さすがトモさん。
だが、オレとしてはできるだけ任されたくない。面倒事のにおいがする。それだけじゃなく、何か嫌な感じがするのだ。
あいつとオレが似ているからか？
いや、違うな。オレとあいつは似ていない。もちろん同じでもない。オレとリコは全く違う。それなのに感じる何か。縁起でもない何か。その正体がわからねえ。ただの気のせいだといいんだが・・・。

Show me the perfect world・・・・ 4

ふと気がつくと、足は月の見えるあの場所へと向かっている。月のいるあの場所へと向かっている。教会は今日も静かに月明かりを受けている。月が欠け始めた今日は以前よりも少し暗い。それでも神父はそこにいた。眼鏡はちゃんと外していたが。

「おや、また来られましたか。また道に迷われましたか？」

「言ったろ。最初から道なんか歩いちゃいねえって。とっくに踏み外してんだよ、そんなもんは」

道を踏み外して、全てを失って、だからオレはここにいる。後悔はないわけではない。しかし、何度オレの人生をやり直したところで、結局オレはここに来るだろう。なぜなら世界もオレも変わらないからだ。

「そんな言い方はいけませんよ。生きている以上誰もが道を歩いているのですよ。道なき道もまた道なのです」

「へえ、面白いこと言うな。さすが神婦」

「いえ、神の家内ではありませんよ。もちろん父でもありません」

「だろーよ。神はオレたちに興味なんか示さないだろうな。地面にいる蟻のうちの一匹だけを愛する人間がいたらただただ気持ち悪いだけだ」

だいたい空から見たってこの街は見えない。だからここに神はいない。この場所だけは違うのかもしれないが。

「それでもあなたは神の存在を信じているのですね？」

「まさか。ただの言葉の綾だ。それに何十億人が信じているものを否定できる材料がないだけだ。結局大多数が黒と言えば白もまた黒だろ？そんでも、全能な神なんていてもいなくても同じだ。無能な人間がそうであるようにな」

あるいは、オレ自身がそうであるように。リコがそうであるように。オレたちはいてもいなくても同じだ。歯車にさえなれなかった半端

もの。それゆえ居場所が見つけられず、それゆえ道を歩けない。
「なるほど・・・。確かにあなたであれば適任かもしれない」
「あ？」
何の話だ？
「彼女の話ですよ。本人から聞いています」
オレに背を向けてステンドグラスを見上げる神父。そこに描かれている女。名前は、確か聖母マリアだったか・・・。
「本人から、ね。あいつと会話できるなんてすげえな、あんた」
「できません」
振り返って首を振る。
「彼女の生きている世界は私の世界とは違う。だから彼女の言葉はこちらに届いてもこちらの言葉は彼女には届かない」
トモさんも同じようなことを言っていた。ほんとにこの神父何者だ？
「だが、あなたなら届くかもしれません。わずかでも世界を共有できるあなたなら」
「・・・・・・」
どいつもこいつも勝手に期待するなよ、不愉快だ。オレはオレのやりたいことをするし、それ以上のことはしない。
「無力、だな」
「そうです」
即答だ。そういうことだ。この程度のこと、こいつは何度も自問自答を繰り返したに違いない。そしてそのこいつがオレを推す。オレを押す。オレならできると確信を持って。
「誰も彼も面倒事はオレに押しつけやがる」
「そうではありませんよ。あなたの見えないところで、面倒事は勝手に片付けられています。あなたがやる面倒事は最初からあなたに割り当てられていたものなのですよ」
はっ、わかってんだよ。そんなことは、全部。
「ちっ、わかったよ。やってやるさ。しかしあんたには感心させられるな。だてに陳腐じゃねえってか」

「いえ、別につまらなくはないでしょう。こんなに面白い神父はほかにいないと自負していますよ、私は」
「・・・・・・」
自負してたのか・・・。
扉を閉める。秋になりかけた夜の空気。この場所は悪くない。空気が止まって腐ってはいない。まとわりつく空気はまだかすかだが生きている。そして生きろと駆り立てる。神父がこの場所に教会を建てている理由もわかる気がする。
「ま、どうせ変人すぎてほかのところにいられなかったみたいな理由だろうけどな」
どうでもいいさ。オレはオレに押し付けられた、オレに割り当てられた仕事をするだけだ。
はっきり言って買いかぶりだ。オレにアイツの心はわからねえ。当然だ。あれはもうすでに壊れたもので、オレらが持っているものとは決定的に違う。部品が足りない。心が足りない。それでもオレとアイツが通じ合うと錯覚してしまうのは、オレ自身でさえ錯覚してしまうのは世界の腐敗を知っているということだけ。眼球が黒く染まっているかということ。

「片目だけしか見えないな。そろそろ見ていられなくなったのか？」
半月を見上げてオレは言う。
こいつの家族に雇われたやつらはこいつの命を守り続ける。ぞろぞろと人を連れての闇夜の散歩。こいつの知らない所で死の可能性は全て先回りし、その全てを駆逐する。生かされるために自殺者の臓器を移植されるレシピエント。生かされるために徹底的に死を排除されたコイツ。そこに差はない、などといったらトモさんにキレられてしまうだろうけど。
「――ねえ、どうして世界は滅びないのかしら？」
振り返ることもなくぼーっと半分の月を見上げたままリコは言う。
「滅ぼす奴がいねえからだ。そんなに嫌ならあんたが滅ぼせばいい

だろう」
「無理よ、私はここにはいないもの。ここにいるのは偽りだもの」
オレにはこいつがわからない。だから、こんな口上に意味はない。意味はない問いに意味はない答え。応えることができるのはこいつの思考の道をオレが一度通ったから。だからこそ知っている、この会話に意味はないと。
「偽りよ。ねえ、偽善と偽悪ってどっちが悪いのかしら？」
「偽善は善じゃなく、偽悪は悪じゃねえんだろ。だったら偽善の方が悪いんじゃねえか」
「でも偽善は偽りでも善でしょう？偽悪は偽りでも悪じゃない」
「あんたはどっちが悪いと思うんだ？」
「私は両方嫌い。善でも悪でも・・・神様だろうと悪魔だろうと――偽物の存在が許せない」
なるほどね、それがこいつの壊れた理由。過去に何があったか知らないが、世界が間違っていると知ったこと。自分の存在は間違っていると気付いてしまったこと。原因などまるで無意味なほどに自分がいかに偽りで、世界がいかに壊れているかに触れてしまったこと。それはあがきというよりは呪いに近くて、もがきというよりは諦めに近い。
「ああ、せっかくの空なのに、雲で隠れてしまったわ」
「なあ、あんたはなんで飛ぶんだ？死に方なんていくらでもあるだろ？」
「あなたは、本当の世界ってどういうものだと思う？」
オレの問いを遮ってリコは尋ねる。そしてオレの答えなど待つこともなく自問自答に答えを出す。
「すべてに無駄がなく全てが整然としている世界。まるで物語みたいにね」
「・・・・・・」
「そこにはきっと運命があるの。全てのものに意味があるの。だから私は飛ぶの。

だって、こんな高い建物。空を飛ぶためにあるに決まってるじゃない」

飛翔――――ではない、ただの落下。だが、そんなものはどちらでも同じことで。結局、今夜もリコは自殺する。空を舞い、死に、また蘇る。それはさながら不死鳥のように。だが、だとしたら、とんだ醜いフェニックスもいたもんだ。

Feel fear of the dead! 1

知らぬが仏、ということわざがある。今まさにこのオレが感じてること。この世界の腐敗を知らず、のうのうと生きてるだけのやつらは仏――――つまり死体だ。腐敗した世界の中で死体は腐敗を止められず、辺りに異臭をばらまき続ける。だが、知っていたところで腐敗は止められない。腐敗が腐敗を呼び、世界と死体は腐敗を続ける。知ったくらいではこの天命に、この運命に、この物語には逆らえない。ならば知らない方がましなのかもしれない。世界が腐っていることも自分が死んでいることも何もかもが手遅れなことも知らずに生きればそれはそれで幸福なのかもしれない。そんな風に諦めちまえば案外幸せというやつは向こうからやってくるかもしれない。なんて、突然嘯いて見せたのももちろんわけがある。いわゆる現実逃避ってやつだ。そして多大な後悔というやつだ。なぜオレはあの時ああしなかったのかと。何の話かと聞かれれば答えは1つ、部屋の鍵をつけなおさなかった話だ。

突然だった。バイトが終わって家に戻った。そこには黒髪で、ヒートテックに身を包んだ小悪魔が降臨していた。

いや、降臨じゃねえ。住居侵入だ。まさか高嶋優衣みたいなやつがまだいやがるとは。さすが東京。いや、この場合、東京は完膚なきまでに関係ない。東海市にもちゃんと常識のねえ奴はいたってことか。

「やっほー、兄貴」

オレの右手がまるでそれ自体が1つの生き物であるかのように勝手に動き、扉を閉めた。相変わらず鉄製の扉は喧しい音を立てている。

「さて、と。今日はあいつん家にでも泊めてもらうか」

俺は大きく伸びをする。

「ちょっと！」

知ってのとおり、日本の住宅の玄関扉は欧米のそれとは違って外開

きだ。突然開かれたそのドアノブは容赦なくオレの背中に突き刺さった。
「無視って！無視って何！？遠路はるばるやってきたかわいい妹を無視する、普通！？」
前かがみに倒れたオレの後ろでなんかうるさい声が聞こえる気がするが、それは気のせいだろう。なんせオレはこのボロアパートに一人暮らしで、その唯一の住人であるオレは今帰ってきたところだ。
「今日の夕飯は何にすっかな。まあ、あいつん家行ってから考えればいいか」
立ちあがってズボンを払う。バイトで汚れてるからあるいはオレのズボンの方が地面を汚してしまったかもしれない。わりいな、地面。
「強情っ！？・・・ごめん、突然来たことは謝る、謝るから！とりあえず無視とかやめて！せめて視界に入れて！！」
「明日も朝からバイトだからな。飲み明かしたりはできねえか。ま、いいや」
「お願い！お願いだから！ここまで来るのも結構不安だったんだからぁ・・・」
はあ。
「何しに来たんだよ」
表情が凍りついているのが自分でもわかる。自殺者を相手にしている時の方がまだ明るい表情をしているかもしれない。
「それはさ、ここ寒いから、中、中で話そ！」
ちなみにまだ１０月だ。東京はようやく涼しくなってきたかな～～、という時期。寒さなど皆無。しかしオレの左腕はぐいぐいと引っ張られ、無抵抗にアパートの中に吸い込まれていく。これだけため息つけば幸せなんてもうどこにもないだろう。まあいい、最初からそんなもん諦めてる。知らなければ幸せならば、あんな冷臓庫になることが幸せならばオレは幸せなんてほしくない。
オレのただでさえ狭い部屋に広がっている荷物。厚手の服ばかりで、どう見ても「今から私ここに住みますよ」というレベルの物量。こ

れはあれか？オレに出てけって言いたいのか？
「で、何しに来た？」
部屋唯一の家具、机の前に座らせた。本当なら机の上に正座をさせたい。
こいつがオレのことを「兄貴」と呼ぶのはもちろんこいつがオレの舎弟だからじゃない。普通にオレがこいつの戸籍上の兄だからだ。
藤田真理。オレの６つ年下の妹。
「な、なんのことかな？意味もなく兄貴に会いに来ちゃいけないの？」
自然、眉間にしわがよる。
しらばっくれる意味がわからねえ。そしてオレとお前はそんな中睦まじい関係じゃねえだろ。
こいつが生まれてから、構ってやって覚えなんてほとんどない。中学に上がる頃にはまともなコミュニケーションもとらなくなったくらいだ。「うるさい、あっちいけ」くらいしか言った記憶がない。
だいたいこの時期の女なんて一か月も会わなければ別人だ。６年半、７８回も別人になられればそりゃもうただのお隣さん以上に疎遠になるだろう。意味もなくわざわざ赤の他人の家に来るはずがない。
ましてそんなやつ受け入れてたまるか。
オレは荷物をどけてスペースを開け、そこに座り込んだ。
「ところで兄貴、ちゃんと生活できてるの？冷蔵庫とかどこにもないんだけど」
お前はオレの家族か。
ああ、イライラする。このゆったりとした会話運び、しゃべり方。時間の流れが遅い地方の生き方。そしてそれはオレが捨てたもの。今のこいつはそれをすべて持っている。オレが捨てた全てを拾って生きている。
責任も仕事も人生もオレはすべてこいつに押し付けてここに来た。
それがどうしようもなく、いらだたしい。
「だから、なんで、ここに、来た」

「わかった、わかったよう。そんなに怒らないでよう」
マリはため息をついて、堪忍したように口を開いた。
「・・・兄貴を説得しに来たの。大学やめたんでしょ？それを知った父さんが怒って口座を閉めようとしたらそもそもお金をおろしてないみたいだったし、兄貴のことだからきっと意地張ってんだろうから」
バカかこいつは・・・！
「それをオレ本人に言ってどうすんだよ！」
「だって、だって兄貴が言えって言ったんじゃん」
「・・・・・・！」
怖っ、こいつ怖っ！これがオレと同じ血の通ってる妹かよ。
騙されるタイプ。ここで暮らせば一週間で全財産を巻き上げられるタイプ。帰れ！早く帰れ！
「で、オレをどうやって説得するつもりなんだ？」
こうなったらオープンポーカーだ。もっとも、オープンにするのはこいつだけだ。さすがに完全に見せびらかせるのは骨が折れそうだが、それこそカウンセラーの腕の見せ所だな。カウンセラーじゃねえけど。
「うん・・・それ、それなの。兄貴って頭いいじゃん？半端な策じゃ駄目だと思ったの。で、どうすればいいと思う？」
「・・・・・・っ！！」
何にも策を持ってないだと！？マジでホラーだよこいつ。ちょっと誰か助けてくれ。こいつをどこかに隔離してくれ。
「・・・・・・親父とお袋はなんつってた？」
アパートごと吹き飛ぶんじゃないかというくらいのため息の後で聞いてみた。
「知らない。何も言わずに出てきたから」
家出・・・だと？
いやほんとに悪かった。そうかそうか、こいつの知性はオレが全部持ってっちまったのか。しかしこのレベルのバカというのも珍しい。

「どうやってここまで来たんだ？住所は知ってるとはいえ簡単に来れる所じゃねえだろ？」
地方は豊かだが、東京に来るには少しばかりの裕福では無理だ。出るのは易いが入るのは難い。そうやって地方の人間を土地にしばりつけているのだ。
「簡単よ。輸送車の人を泣き落して・・・」
「馬鹿じゃねえのかっ！？」
本気で怒鳴らせてんじゃねえよ。大家がキレて乗り込んでくるだろうが！
「東京に着いたらなれなれしく腿とか触ってきたから蹴って逃げてきたんだけど大丈夫だったのかな？」
大丈夫じゃねえよ！お前の頭がな！・・・なんだこいつ、田舎者にもほどがある。頭の中が花畑まみれじゃねえか！！
「いっそのこと連れ去られとけばいいんだよ、お前みたいなやつは」
「そういうこと・・・言わないでよ・・・」
急に声色が弱くなったと思ったら涙目になってうつむきやがった。
わかんねえ、マジこいつわかんねえよ。神経配列オレと違うんじゃねえの？

「でさ、兄貴、折り入ってお願いがあるんだけど」
「却下」
「・・・・・・」
なんで他人のお願い聞かなきゃいけねえんだよ。
「内容ぐらい聞いてくれたっていいじゃん」
「そんな時間はないそんな暇はないそんなやる気はないお前にそこまでする理由がない」
いいから早く出てけ。
「親父とお袋が心配するだろうが。さっさと帰れ」
オレの最後の優しさ。本当は今本気で怒鳴りたい。
「心配なんか・・・しないよ・・・あの人たちは」
「あ？」
「あの人たちが心配なのは・・・うううっ」
泣きだしやがった！！
「ひっく・・・ぅ・・・」
どういう意味だ？ちゃんと向き合った覚えはないが、オレの両親はそれなりに壊れてない人間だったはずだ。一人娘の家出に対して心配しないわけもないだろう。
「金なら何とかしてやる」
最大限の譲歩だ。もっとも、地方に行く分にはそんなにかからないからなんとかなるだろう。
「ちがうよ・・・・・・そうじゃない。だって、あそこは、私の・・・私の居場所じゃない」
「・・・・・・」
よくわからない、ていうか全く分からないが、冗談で言っているわけじゃないらしい。
「どういう意味だ？」

ため息とともに聞いてみる。マリは顔を上げた。薄暗いオレの部屋の照明でまつ毛が輝いている。
「聞いてくれるの・・・？」
「我慢の範囲内でな」
やれやれ、随分とオレも丸くなったもんだ。トモさんに叩かれすぎて角が取れたか？
「ここにしばらく居させて・・・」
「よし、いいぞ。あんまり物はねえけど、あるもんは勝手に使えばいい。水道と電気は自動じゃねえから毎月振込に行けよ。家賃は月初めに大家が勝手に取りに来る。金がねえっていえば値切れるから頑張れよ。よし、それじゃあお前はここで達者に暮らせ。あばよ」
立ち上がり、右手の人差し指と中指を立て、額の横で振った。久しぶりに満面の笑みを浮かべながらドアノブに手をかける。
「待ってよぉ！！」
マリは即行で立ち上がり、オレの袖を掴んだ。涙で目を潤ませながらオレを見上げる妹に対してオレは容赦なく冷たい視線を投げかけた。
「何が不満だ。お前が勝手に家を出てきてお前が勝手にここに来たんだ。お前はお前の意思に従って勝手に、自由にここに来た。それについては別にとがめはしねえし悪いとは言わねえ。だが、それはお前のわがままであってオレのわがままじゃねえんだ。オレにはお前のわがままに付き合う義理はねえしその気もさらさらねぇ」
ここにくれば優しいオレがいるとでも思ってんのか？どう思われようが知ったことか。オレはオレの好きなように生きさせてもらう。
「そう・・・わかった」
すっとマリの目から光が消え、掴んでいた裾を話した。素早く立ち上がると台所の方へ走って行った。
「じゃあ・・・死んでやる」
冷たい声。だが、どこかで聞いたことのある声。誰だ・・・こいつは・・・。ああ、そうか、こいつはオレの妹だ。

そんでもって今まで何度も相手をしてきた自殺志願者だ。
「この包丁で・・・って、あれ？」
目に光が戻った。
「兄貴・・・包丁は・・・？」
どうやら台所へ向かったのは包丁を手に取る予定だったからしい。
焦りつつ棚を探っている。
「ねえよ、そんなもん」
オレ、料理とかしねえもん。冷蔵庫もない家に包丁があるわけがない。
「そ・・・んな・・・・・・」
膝から崩れ落ちたマリ。
やれやれ・・・。とんだ軽い自殺志願者もいたもんだ。しかし、自由はないが不自由もない地方から自殺志願者とはな。だが、まあ、珍しくもねえのか。俺だってほっといたらそうなっていただろうから。
「死にたいならセンターへ行け。ここで死ぬな、迷惑だ」
「うううううっ」
「？」
唸るようにして涙を押し殺そうとしている。だが、どうやらそれは無理だったようで、代わりに頭を強く抱えて、感情を抑え込もうとしていた。
「・・・けて、助けて、助けて助けて助けて――――」
「はあ？」
助ける？何を言っているんだこいつは・・・。お前は自由も不自由もないあの生殺しの地獄に住んでいたはずだろう。あんなところに助けを求めるほど脅かす何かがあるはずがない。
カチカチカチカチ
ガチガチガチガチ
歯が鳴る音。寒くて全身が震えるときになるアレ。だが知っての通り今は１０月。寒さなんて皆無だ。裸で街を歩いてもなんとかなる

（なんとかなるのは寒さだけだが）くらいの気温だ。だが、人間が寒さを感じるのは体温と気温の差だけではない。この場合、寒気を感じるのは、というべきか。
人は恐怖でも、確かに寒気を感じるのだ。
「お前・・・」
左腕を掴んでみる。石膏像を触ったみたいに冷たい。こいつの格好もそう考えればおかしい。ヒートテック、だと？地方にいる頃ならまあいい。決して快適というわけでもないが、せいぜい汗ばむ程度だろう。こいつの荷物にしてもそうだ。厚手の服ばかり・・・ほかには大した荷物はない。
「あっ・・・」
頭を抱えていた左手を強引に引っ張った。厚着をしていたので気付かなかったが、相当細い。そして、その細腕には見覚えのありすぎる縞模様があった。
「これは・・・」
無数というほどでもない。だが、問題は数じゃない。数ばかり多いリストカットは大したことはない。自傷というのはストレス解消という意味合いが強い。強いストレスを感じた時、自分を傷つけることにより、それをどうにかしようとするのだ。だが、こいつの傷はそんなもんじゃない。
解放されるためじゃない。死ぬための傷だ。ほっとけば出血多量で簡単に死ねるレベルの深い傷――――縫合の跡が残る傷だ。
「いつからだ？」
左手を掴んだまま低い声を出すと、腕がびくっと震えた。
「答えろ、いつからだ？」
歯の音は止まない。ＢＧＭかなにかのように狭い部屋に響き続ける。
「８月の・・・終わり。・・・兄貴が・・・学校行ってないって・・・知った後・・・から」
「・・・・・・」
たかだか一ヵ月半。だが、このレベルのリスカをしといて一ヵ月半

もよくもったというべきだろう。最初の一回で死んでいてもおかしくない。縫合痕があるということは誰かが発見したということなんだろうが。
「怖い、怖いよ・・・。逃げられないよ・・・」
ガチガチガチガチ
手遅れ・・・か？既に精神だけじゃない、体にまで異常をきたしている。このレベルにまで至っちまえば元に戻るのは相当難しい。少なくとも普通なら迷わずセンターにぶち込む。
だが・・・本当にそれでいいのか・・・？
俺は左手を放した。
「マリ。逃げたいんだったら簡単だ。センターに行けばいい。そうすれば恐怖からも解放される。どうだ？」
俺は聞く。何よりも残酷な一言を。それが残酷なことだと知りながら。
「お前は死にたいか？」
マリの左手が俺の腕を掴み返してきた。歯の音が止む。涙で真っ赤にはれた醜い顔がオレを見て、真剣な目でオレを見て、そして言った。
「死にたくない・・・死にたくないよ」
「・・・・・・」
死にたくない、か。
押し入れから掛け布団を引っ張り出して頭の上からかぶせた。あいにくこれ以上の暖房設備はこの家にはない。
「もういい、寝てろ。わけは明日話せ」
くそっ、めんどくせえ。だがどうやら俺が原因の一端ではあるようだし、貸しでも借りでも他人と関係を築くのは御免だ。さっさと解消しちまわねえと。
「兄貴、ここにいてよ」
布団の中から右手がぬっと現われて、再びオレの裾を掴んだ。
「わかったよ。だからさっさと寝ろ」

ああ、めんどくせえ。
奇しくもリコとマリ。二人の少女を同時にカウンセリングしなくちゃならなくなったわけだ。
ああ、くそ・・・・・めんどくせえなあ。

Feel fear of the dead! 3

マリが次に起きたのは翌日俺のバイトが終わった直後のことだった。
とんだ眠り姫だなと揶揄してやったら、
「2時間以上まとめて寝るのは1ヵ月ぶり」
と帰ってきた。要するに鬱のハイエンドというわけだ。
・・・・・・いや、違うか。こいつはまだ希望が残っている方だ。
俺は知っている。この程度ものともしない程の最果てを知ってしまっている。
「まだ寒いか？」
昨晩は結局押し入れから布団一式を出して床に敷き、マリを寝かせた。服だらけの荷物が代わりに押し入れの中に押し込められ、俺は壁を背にして寝ることになった。
オレの問いかけに対して体を起こしたマリは首を横に振ったが、掛け布団は体に巻きつけたままだった。つまり、まあ、そういうことなのだろう。
「飯でも食え。もっとも大したものはねぇけどな」
このセリフは謙遜でも何でもなく本当だ。机の上にはさっきコンビニで買ってきた2人分の飯があった。
「兄貴・・・」
蚊の鳴くようなかすかな声。もう昨晩のように声を張り上げることはない。そうしないということは、相当無理をしていたということだ。気を張ることに疲れたってところか。
「着替えたい」
勝手にしろよ！そんなんいちいち報告してんじゃねえよ。
「服・・・どこ・・・？」
ちっ。
強く舌打ちをして押し入れから荷物を引っ張り出し、マリに与える。
マリはしばらくぼーっとしていたが、緩慢な動作で服を着替えた。

改めてその異常なまでの細さを確認する。たった半年であんな棒切れみたいな体になるらしい。
「お前、飯食ってねえのか？」
「食べてる・・・吐くけど」
「はあん」
拒食症、か。まあ、よく聞く精神病ではあるな。実際にその患者を見るのは初めてだが。
「じゃあどうだ、今は食えそうか？」
「大丈夫・・・」
そうつぶやくとマリは思いのほかあっさり飯を口に運んだ。
「・・・・・・」
その様をじっと見ながら俺も飯を口に運ぶ。どうやらこいつのストレスは脅迫的なものではなく、地方に理由があったらしい。結局半分も食べなかったものの、この分だったら回復するだろう。
ストレスの緩和。精神病の治療。まず最初に行うべきことは原因を除去すること。リコの場合はそこまで至らずマリの場合はそれを自分でやった。この差はでかい。治療という観点で見るならリコはスタート地点にすら立っていない。
そしてマリはようやくスタート地点と言うところか。たとえ今が何とかなっても地方に帰ればまた元の木阿弥。今度こそ一週間もたたないうちにこいつは死ぬ。
「そろそろわけを話せ」
冷たい口調でオレがいうとマリはか細い声で目を伏せ、「うん」と呟いた。
「最初はオレが大学やめたことばれた時だったか？」
「・・・うん。それでお父さんとお母さんが・・・」
目を伏せ、嗚咽をかみ殺すマリ。
「ちょっと待て、話が進まねえ上に言ってることがよくわからねえ」
最初からスムーズに会話できるとは思っちゃいねえが単語だけ喋られて黙られちゃ分かるわけがない。俺はパズルの天才かっての。

「兄貴ってさ、お父さんとお母さんの誇りだったじゃない？」
「はあ？」
知らねえよ、そんなこと。親父もお袋もただ生きることしか能がない人間で、大して向き合っても来なかった。だから奴らが何を考えてるのか、俺は何も知らない。知りたくもないし、知ろうともしなかった。
「そうなんだよ。だって・・・地方を出て大学へ・・・」
ふうん、なるほどね。鳶が鷹を産んだような、ってか。俺は別に名前負けじゃなかったわけだ。
「だから、兄貴が大学やめたの、相当ショックだったみたい・・・」
「あの親父とお袋がねえ」
最後までオレの状況に反対していた。そんなことよりもメロンを生産し続けろと散々言い続けていた。
「で、なんだ。親父がトチ狂っちまったのか？」
はっきり言おう。俺は親父が嫌いだ。世界が狂っていることも知らない箱庭のようなきれいな土地でのうのうとただ生きるだけ。そのくせ自分たちは立派に生きているつもりでいる。親父とお袋はそんな愚かな人間たちの象徴だ。
そんな茶化すようなオレの問いに対してマリはううんと首を横に振った。
「変わらなかった。１つ以外。お父さんとお母さんはね、あの時以来私に畑仕事をさせなくなったんだ」
「はあ？」
意味がわからない。日本語が伝達手段の体をなしていない。なんだ？俺の一家はもともと壊れてるやつらの巣窟だったのか？
「食事の時以外部屋から出ることもできなくて、仲のいい友達と会えなくなったの。目が合うとね、決まっているもこう言うの。『勉強しなさい』」
「・・・・・・」
それからマリはひどく冷めた声と口調、至極死んだ目でこう言った。

「お父さんとお母さんにはね、私はいらないんだ。必要だったのは兄貴ただ一人だけだったんだよ――――」
「・・・・・・」
代償。精神的代償行動。抑圧に対する防衛機制。どうしても行動が起こせないとき、そのストレスを退けるため、人はそれを成し遂げる以外の行動を取ろうとする。精神医学的には以下の7つに分類される。
抑圧、同一視、投影、反動形成、退行、攻撃、そして置き換え――――
本来この防衛機制がある限り、人間の心はなんとかなる。だが、それでも補えないと、壊れていく。
例えば、リコは感情を抑圧し、自らを月と同一視し、子供の様に退行し、自分自身を攻撃し、世界に対して置き換えを望む。それでもあいつは耐えきれず、あいつの心は死んだ。
親父とお袋は置き換えをし、なんとか自分のメンタルを保った。だが、代償として生贄にささげられたマリは耐えきれなかった。
「はっ、はっ、はっ・・・」
突然マリの呼吸が荒くなる額には脂汗が浮かんでいる。やせ細った掌が口元を押さえた。
「お、おい。吐きそうか？」
丸みのうかがえる双眸がオレを見てこくりと頷く。オレはマリの身体を抱え上げ、布団をはいだ。
軽い。こんなにも軽い。だが当然だ。希望は人に充足を与え、絶望は人から充足を奪う。こんなに黒く染まったマリはその分だけ体重を奪われている。
トイレのドアを開け、そこに座らせる。ほんの数分前まで腹の中に借り宿していた飯は全て排出された。消化なんて全くされちゃいない。胃は消火液を分泌することすらしなかった。
「ごめんね、ごめんね・・・」
それは誰に対する謝罪なのだろうか。オレか？親父とお袋か？それとも自分自身だろうか？

「・・・・・・くそっ」
そう漏れ出た悪態は一体誰に向けられたものだろうか。
マリはそのままぐったりと気を失った。また抱え上げて口元をぬぐい、布団に寝かせる。ケータイを取り出し、もう二度と掛けるつもりのなかった番号をプッシュする。
「ああ・・・オレだ。マリ、いねえだろ？気づいてるか？・・・ああ、オレのところにいる。・・・はあ？別にいいけどオレの家知ってるのか？知らねえだろ？・・・こいつしばらくこっちに置くから。・・・うるせえな、関係ねえだろ。・・・それはお互い様だ。・・・あ？感謝？ああ、ある。イママデアリガトウゴザイマシタ。さようなら」
乱暴に通話を切る。そのままケータイを砕こうかと思ったが、やめた。攻撃に出るほどでもない。十分に想定の範囲内だし、我慢できるラインだ。ま、向こうでは電話が消滅してるかもしれないが。
ともかくもこれで引けなくなった。だが、これはオレの宿題だ。ずっと対面することから逃げてきた２０年分のツケ。オレの思惑でもオレが何をしたわけでもないが、こいつがオレのとばっちりを食らったことには変わりない。

Feel fear of the dead! 4

「おや？随分と浮かない顔ですね。いつもに輪をかけて不機嫌そうだ」
「そういうあんたはいつもと同じように楽しそうだな」
今夜は欠けに欠けた三日月。月光だけでは全然足らず、燭台には火が灯っていた。オレは扉を閉めていつも座る席に腰かける。
「ええ。生きるのはいつでも楽しい。その楽しさに強弱があるだけです」
「あんた、よっぽどの幸せ者かよっぽど頭おかしいかどっちかだな」
神父はいつも通り静かに笑う。仮面のように静かに笑う。
「さあ、どちらなのでしょうね。貴方はどちらだと思いますか？」
「さあな。楽しいと思ったことなんてねえから知らねえよ」
そう、そんなことは一度もない。何もかもがつまらなくてどこにいても息がつまる。誰も彼もが凡俗で世界はいつでも平凡だ。
「そんなことはないはずですよ。貴方は理想を求め過ぎているのです」
「理想？」
「そう。私にとって喜びとは0より大きいことを言います。しかしあなたは違う。貴方は千を越えないとそれを喜びとしないのです」
ふうん。基準の話か。
「でもおかしいだろ。千円くれるなら喜んでもらうが1円だったらキレるぜ」
馬鹿にしてんのか、と。
「私なら喜んでもらいますよ」
「・・・・・・」
いやしいな。神父のくせに。
「道行く人から1円もらうことはそう難しくもないでしょう。話しかける勇気があれば誰にもできることです。それを千回繰り返せば

同じことではありませんか？」
「ちげーよ。１円もらうたび、俺は何かを失うんだ」
死んでもやるか、そんなこと。
「そういうことなのでしょうね。喜びというのはリスクがあるものなのですよ。それを支払ってでも手にするべきか。それは人の自由です」
「だったらオレは要らねえな」
自由なんて手にするだけ無駄だ。そんなもので片手をふさいでも何一つ得はない。
「だったら私はよっぽどの幸せ者なのですよ」
「なるほどね。だてに臀部じゃねえってか」
「まあお尻ではないでしょうね・・・」
私はただの神父ですからと神父は続ける。
「何の話でしたか。・・・そうそう、貴方が浮かない顔をしているという話でした」
「水に浮くか浮かないかを顔で判断できるのか？」
「茶化しますね。でしたら浮かばれない顔、というのはどうでしょう？」
「はっ、そりゃあそうだ。オレは何もしない。だから何の結果もないし、ましてや浮かばれるはずもねぇ」
原因がなければ結果はない。行動がなければ成功もない。だが、そこには何の失敗もない。だったら文句はないだろう。
「そうでもないでしょう。前にも言いましたが、こうして話している私には意味がある。もちろんあなたにもね」
「前にも言ったが、それがあんたである必要もオレである必要もない」
神父は少し息を吐いて苦笑する。
「変わりませんね、あなたは。彼女に触れれば少しは価値観が変動するかと思ったのですが」
「それはムリだな。あいつは触れようとしても触れられないし、話

そうとしても話せないし、聞こうとしても聞こえないし、近づこうとしてもそこにはいない」
俺は立ち上がる。そろそろ月が天辺に来る時間だ。
「一つ、聞いてもよろしいですか？」
神妙な声で神父が喋る。オレは振り向かない。
「生きているのが苦痛なのに、私と違って喜びを求めず、彼女と違って死を選ばず、貴方はどうして生きられるのですか？」
オレは振り返ることもなく、その言葉の真意を咀嚼する。
「死にたくないからだ」
オレの人生で唯一の本音。間違いなくオレの根幹。それだけ言って教会を出る。見上げた先の三日月は光と呼ぶには頼りない。それでもオレはその光を頼りに上を目指す。

リコは月を見上げて手を上げようとした。しかし伸ばしきることはなく、「やっぱり駄目ね」と頭を振った。
「伸ばしてみればいいじゃねえか」
「無理よ、だってくらいもの」
「暗い・・・？」
確かにそれは三日月ではあるが、太陽光の反射でしかないが、それでも光源は光源だ。
「くらい、くらいわ本当に・・・。まるで醜い世界みたい・・・」
世界は偽り。蔓延る絶望。その中で唯一白い少女。だからこそ、リコはこの世にいられない。白はたやすく黒く染まる。白く輝くそのためだけにコイツは理性を失った―――。
「汚らしいわ、穢らわしいわ。どうしてあなたまでそうなの・・・？どうしてあなたまで私を置いて闇に染まるの―――？」
傍から見なくても頭のおかしな精神病患者。それでも当人は本気で語る。本気で世界の穢れを語る。
「月だって朱に交われば赤くなるってか？」
「違うわ。ごみの中にあればどんなものでもごみなのよ」

「ごみ、ね」
暗闇はけがらわしい、か。だとしたらこの都市を照らす光源は美しいのだろうか。わかんねえな。闇も光もオレにとってはただの現象だ。
「消えればいいのに。穢れにかどかわされ闇に染まるくらいなら、いっそきれいなままいなくなればいいのに」
「お前の様にか？」
染まることを拒否して壊れた自分のように世界も死ねばいいとこいつは言う。
「あなたもそう思うでしょう？だってあなたは誰よりも狂った世界を知っているのだもの。その翼で全て見てきたはずだもの」
「思わねーな。確かにオレは世界が腐ってることを知っている。だけどな、それでもオレは生きるぜ。なんでかしらねーけど、俺はこの腐った世界でも死にたくはないらしい」
そう、別に生きたいわけじゃない。ただ死にたくない、それだけ。オレは死後を信じない。それでもなぜあの時そう思ったのか。脳みそさえ死んじまえば後のことなんてどうでもよかったはずなのに。
「わからない。わからないわ。貴方は私と同じ世界を見てるのに、どうして直視ができるの？どうして足が踏み出せるの？どうして空を羽ばたけるの？」
「はっ、足を踏み出すくらい、お前だって毎晩やってんじゃねえか」
「違うの。これは違うのよ。貴方には見えるでしょ。私は進んでいないでしょ？」
ストン
なんて音はしねえが、多分そんな冗談みたいな音のはずで、全てがただの茶番のはずだ。それが死を選ぶこと。考えてみればなんて滑稽な光景だ。
「はっ、ははは。・・・マジで笑えねえ」
天井の三日月は雲に隠され世界は闇を取り戻していた。
「なるほどな、確かに暗い」

オレはその闇をたっぷりと肺に吸い込み、その場所を後にした。

Feel fear of the dead! 5

マリは基本眠っている。運動なんてからっきししていないが、それでも人間はエネルギーを消費する。それは脳の活動であったり、眼球の光受容であったりと様々だ。マリの身体に取り入れられるエネルギーは極端に少ないので、体は勝手にエネルギー消費の少ない状態に移行しようとするわけだ。だが、人体は恒常性を維持するために常にエネルギーを必要としている。このまま何も食べなければ死は時間の問題になる。

死を望んだ。だが生に縋った。それがオレたち兄妹の共通点。だが、生きようと思えばいつでも生きれたオレと違って、マリが縋ったひもは今にも切れそうだ。

ドアがきしむ音がした。結局まだ鍵の直っていないドアノブは不用心極まりないが、こんな家に盗みに入るようなやつもいないだろう。今やそう言えるのかは定かではないが、オレの家に入って靴を脱ぐ。背後で家を壊すのが目的なんじゃないかと思うくらいのドアが閉まる音がした。

「お帰り、兄貴」

消滅寸前の腹筋を使って出されたか細い声。夜か朝かわからない時間にもかかわらずマリは起きていた。いや、四六時中寝てばかりのこいつだから時間なんて関係ないのか。そもそもこうして顔を突き合わせること自体丸2日ぶりだ。

布団を十二単の様にかぶったマリの目の前にはコンビニの握り飯が置かれていた。袋が開けられた形跡はない。

「食えるのか？」

オレがそう聞くと、マリは首を横に振った。

「今、ご飯見てもはかないように練習中。15分我慢してる」

じっと握り飯を凝視している痩せこけた少女。病的な絵であること甚だしい。今この場を大家か誰かに見られたら、間違いなく通報さ

れるだろう。
その握り飯をオレは奪い去った。
「ストレスになるからやめとけ。そんなんより砂糖でもなめていた方がよほど効果的だ」
ここ最近は砂糖をなめてなんとか体を保っている。ほかの栄養素はもちろん足りていない。何か健康的な飲料水でも飲ませればいいんだろうが、こいつは水でも吐く。必然、弱っていくばかり。
「あっ、そうだ。さっき思ったんだけど、兄貴がつくってくれたら食べるかも」
オレがこいつの何が気に食わないって精神的に病んだ上のこの症状なのに、その大本だけは解消されたので無駄に生きる気力があることだ。食事を受け付けないのは体の方なのか、それとも心の方なのか。前者であれば回復は時間の問題だ。後者であればその見込みはかなり薄くなる。とはいえどちらかなんてオレにはわからないし、こいつにもわからないだろう。
「こんな家で何をつくれって言うんだよ」
包丁はないが？ガスに至っては使わないのですぐに契約解除したが？
「ほら、こっち来るときに持ってきてた電磁調理器があるじゃん？あれで何か作って」
ちっ、めざといな。しかしオレさえ忘れてたものをどうしてこいつが覚えている？
それから米と適当な材料、調味料を買ってくる。料理なんてほとんどやった経験を持たないが、料理を食べた事はある。それっぽく作ればそれなりのものはできるだろう。
「できたぞ。粥・・・・・・か？」
なんか残飯の集合体っぽくなった。心なしかマリの体調が悪くなったように見える。しかし、俺の視線に気がつくと急に笑顔に変えた。匙を手に取り、調理機からそのまま残飯を掬った。
「あつっ・・・！」
顔をしかめる。それから少し嬉しそうな顔になった。こいつにとっ

て「熱さ」あるいは「暑さ」というのはいつ以来のことなのだろうか。
「おいしい・・・・・・」
ゆっくりと息を吹きかけ、冷ましながら少しずつ口に運ぶ。一口含んでは必要もないのにかみしめる。恐る恐る慎重に生存欲を満たそうとする。
ちぐはぐだ。
死にそうなこいつが必死に生きようとして、生きている俺が生きようとはしない。生きているリコが必死に死を求める。
「・・・・・・もういいのか？」
手を止めたマリを見て俺は尋ねる。マリは申し訳なさそうに首肯した。まだ１０口と言ったところか。とはいえこの量はこいつの１日分の食事量に相当する。むろんこれから吐かなければの話だが。残された残飯を俺が処理する。まずかった。この年になって自分に料理の才能がないことを知るが、どうせしないから活かされることはないだろう。
マリが寝た後、俺は部屋を出た。一度胃に詰め込まれた残飯が吐きだされることはなかった。

Feel fear of the dead! 6

この病院は変わっている。病院というのは治療のための施設であって、患者を退院させることが目的のはずだ。なのに内側からは開かないロックにベッドから降りるだけで鳴り響くナースコール。そこに生きるリコはまるで籠の中の鳥。月なんて大層なもんじゃない。醜いよだかもいいとこだ。

「相変わらず真っ白だな、ここは」

後ろ手に窓を閉め、ぼーっと壁を見詰めているリコを見る。反応はない。オレの声など届いていない。椅子に腰かけ、少しだけ息を吐いた。

リコの薄い唇がかすかに動いている。何かをつぶやいているようにも見えた。

「・・・違うのよ。これは違うの。間違っているの。そうじゃない。全然違う。おかしい、おかしい。こんなのじゃない」

なにを言っているかは分からない。当然だ。２次元に生きる存在が３次元を知覚できないように、違う次元に生きているこいつをオレは理解することができない。その方法があるとしたらただ一つ、こいつがオレの次元に重なるところにいるときだけだ。

だが、そんなことは不可能。こいつのＺ軸はオーバー１００で固定されている。届くはずもない天体になっている。Ｚ＝０に絶望したアストラエアは宇宙へ飛んで星になった。

「飛んだ先は闇ではなくて真っ白な牢獄か・・・」

飛距離が全然足りねえよ。中途半端に飛んだりするからこんなところに囚われちまうんだ。

「あはは・・・。そっか、そうなのね・・・・・・」

笑みをたたえて何かをつぶやくリコの視界にオレは入る。そのくぼんだ眼球がオレの方へとシフトした。

「どうしてあなたがここにいるの？ここは間違っている場所なのに。

そう・・・。あなたも間違っているのね」
憤怒と諦観の混じった声。オレは何かを返そうとして・・・・・・
やめた。
「星は壊れる、人は死ぬ。そして鳥は地に堕ちる。そう、そういうことだったのね。間違ったこの世界ではそれが当たり前のことなのね」
生まれた星も生きる人も空を翔ける鳥もいつかは死ぬ。みな例外なく逃れようなく死ぬ。死後の自分に自我はなく、死後の自分に意味はない。だから意味を持つのは生きている間。それもあんな冷臓庫ではなくまともに思考できている間。こいつは生きているはずなのにその生を見ていない。見ているのは常に意味のない者。すなわち、死後の自分。死後の世界。
「あ、あはは、あはははははは！」
リコの手が傍のテーブルの上のプラスティックフォークを掴んだ。安全面を考慮して作られたそれを自分の首筋に勢いよくつき刺す。
「あ・・・・・・」
血が出る。しかし、吹き出ない。そんなあっさりとした死はすでに先回りされている。そんな簡単にこいつは死ねない。
ウウウウウウウウウ
サイレンの用に鳴り響くナースコール。この音はオレの頭の中でしているのか、それとも実際になっているのかわからない。
「ホーク！！」
背後からトモさんの声がする。どうやら音は現実のもののようで、これは現実のもののようだ。
リコは動かない。フォークを首に指したまま微動だにしない。目は開いている。だが眼球は動かない。呼吸とともにフォークが揺れる。
「大丈夫だ、たいした外傷ではない。消毒液とガーゼと包帯を持ってこい。あと一応輸血用の血液もだ。大至急！」
トモさんがスピーカーに向かって叫ぶ。オレは何もできず、ただただぼーっとその様を見ていた。

しばらくしてリコの首からフォークが抜かれ、傷口はガーゼと包帯で覆われた。失神も一時的なものらしい。もともと病的に細い体だ。ほんの少しの刺激とほんの少しの出血だけで意識を保つことを妨げる。適切な治療さえ施せば大事には至らない。
病室の外でトモさんがオレを見る。
「お前でも駄目だったか。手詰まりだな。いっそのこと医療ミスに見せかけて殺してしまうか」
ため息交じりの言葉。その相手はオレではない。
「しばらくここには近づくな。あれの事は忘れることだ。別にお前が悪いわけじゃない。あれがああなるなんていつものことだ」
「わかりました」
一礼をして病室から離れる。自然と足は速くなった。
「ホーク」
トモさんがもう一度オレに声をかけた。
「納得いかないか？もう少し続けてみたいと思うか？」
オレは振り返って自嘲気味に笑った。いや、違うな。笑ってるんじゃねえな、これは。そう言う口に形になっただけだ。
「ごめんですよ、あんなの」
少しだけ小走りになりながら病院を後にする。できるだけ早く、できるだけ遠くに逃げたかった。リコから離れたいんじゃなく、リコから逃げたくなった。
最初にトモさんに紹介された時の言葉を思い出す。オレは少しだけ蒸し暑さが和らいだ東京の空気を肺に含んだ。
「なるほどな、あれは・・・・・・怖いわ」

This is your life・・・you know? 1

ここ数日で、マリに「食事」という概念が復活した。どう考えても活動には足りない食事量だが、それでも食べている。生きようとしている。どっかの死にたがりとはえらい違いだ。
だがしかし、そのために飯をつくってやってるのはどういうわけだ？オレに突然ボランティア精神でも宿っちまったのか？だが、こいつはオレの作った飯しか食えないのだからしょうがないといえばしょうがない。まあ、既製品を受け付けないだけで、そこらの飯屋に行ったら普通に食えるのかもしれないが。
「あっ、今日はおいしい。昨日はあんなだったのに」
「うるせえ」
こいつが回復に向かっている事はわかる。空気として伝わってくる。言葉も多くなったし、睡眠も少なくなった。それに比例してオレの眉間のしわが増えて言ってるわけだが。
「ごちそうさま」
言葉どおり昨日の3倍ほどの量を食い、スプーンを置いた。いつもならこのままのその外布団に入り、睡眠を開始するのに、今日のこいつはまだそれをしなかった。
「ねえ、覚えてる？小さいころもこういうことあったよね？お父さんもお母さんも家にいなくて、兄貴があたしに料理作ってくれてさ・・・・・」
相変わらずのか細い声。だがこの狭苦しい部屋の中でならこいつの声は確かに届く。
「ねえよ、そんな記憶」
勝手に作んな。
「うん、ない」
「ケンカ売ってんのかてめえは！」
買うぞ。買っちゃうぞ、コラ！

「兄貴は昔っから勉強ばっかりしてて何もしてくれなかった」
「・・・・・・ちっ」
まあ、それは認める。オレとこいつはずっと他人よりも他人だった。
今は・・・・・・どうだろうな。
「それなのに・・・。わかんないよ」
マリは布団にくるまった珍種の小動物型になってオレを見る。
「なんであんなに必死だったのに大学やめちゃったの？」
「・・・・・・」
そんなのは単純で明快だ。意味がないから。価値がないから。だが、それは説明してわかるわけでもないだろう。同じ言語を使っていたとしても、同じ脳みそを共有しているわけではない。だから違う。リコだってほんとはそれだけの単純な話だ。次元ではない。そんな高尚なものではなく、ただの脳の違いだ。人間の違いだ。
「・・・なんて言わないよ」
「あ？」
こいつ、今なんて言った？
「なんとなくわかってた。兄貴は大学に行きたいんじゃなくて、地方を出たかっただけなんだって。そうでしょ？」
「・・・・・・」
違うけどな。オレは地方を出たかったんじゃない。人生をやめたかったんだ。
「平凡な日常。なにも変わらない毎日――――。そりゃあたしだってたまには嫌になるよ。だけどそんなのみんな同じじゃん。みんなそんな風に考えながらでもその場所で生きてるじゃん。なのになんで誰よりもすごい兄貴だけが逃げちゃうの！？」
溜りに溜まった言葉。淀みに淀んだ感情。隠してきた思いは堰を切ったように溢れだしている。ならばこいつをここまで追い込んだのはやはり親父やおふくろなんかじゃなく、オレだったのだろう。
「間違いじゃねえ、その通りだ」
そう、オレは逃げた。退屈な日常から逃げた。

「だけどな、オレは生きている事を後悔したことはあってもあそこを出たことを後悔したことはない。一度もな」
「なんで・・・？」
くぼんだ目が俺を見る。オレを攻め立てる。
「さあ、なんでだろうな」
考えたこともない。それはきっと、考えるまでもないことだったからだろう。あそこには何もない。だからあそこではオレは生きちゃいなかった。
じゃあ今は？今は生きてるって言えるのか？
「そうやってさ、何でも一人で抱えちゃってさ・・・・・・」
「あ？」
「兄貴は勝手だよ！何でも一人でやってきたわけじゃないじゃん。そんなわけないじゃん！お父さんもお母さんもいっぱい兄貴を助けてきたじゃん！なのになんで何も言ってくれないのよ。なんで逃げるのよ」
「・・・・・・」
オレはふらりと立ち上がる。耐えきれなかった。オレが逃げてきたものを全て背負って生きているこいつと一緒にいるのが。
「あたしたちは家族でしょう・・・？」
「悪いが、バイトだ・・・」
「兄貴！」
マリに背を向けて部屋を出る。そうやって逃げる。今まで通り逃げ続ける。目をそらして逃げ続ける。
街灯が照らす街を見た。上を見上げると天ではなく天井が見える。淀んだ空気はまだ暑いはずなのにどこか肌寒く感じる。オレは舌打ちを１つして足を進める。
ああ、そうだ。マリの言う事はすべて正しい。オレは完全に間違っている。でも、だけど、その正しさはオレにとっては苦痛なんだ。はっ、だせえ。これじゃあグレたガキじゃねえか。厭世家なんか気取ってる癖に６つ下の妹に反論の１つも出来やしねえ。

これがオレだ。足掻いてもがいて必死になってたつもりがこれだ。
どこにでもいる現実を直視できないただの人間。ナンバーワンでも
オンリーワンでもないただのワンノブゼムの木偶の坊。

行くあてはなかった。もちろんバイトというのは方便だ。逃げるための口実に決まってる。だからオレに行く場所はない。あの場所以外だったらどこでもいい。そう思って街頭によって昼間と何ら変わりない明るさの道を歩いていると携帯に着信があった。
「ホーク！娘が逃亡した！」
トモさんの声は慌てた様子だ。トモさんのこんな声を初めて聞いたし、そもそもこんな声が出せると思わなかった。
「逃げ出したって・・・どうやって？」
あそこは病室なんかではない、牢獄だ。走ることすらままならないあいつに逃げだせるはずもない。
「病院の医師がわざと逃がしたらしい。そいつも今はいない」
「逃がしたって、それに何の意味があるんスか？」
「知るか。娘にえらく肩入れしている変な医師だとは前々から思っていたがこれはまずいことになったぞ。今の娘には自殺を防ぐ人間が誰ひとりとしてついていない。死ぬぞ」
死にたがりのリコが死んでいないのはその死が予防されているから。リコを1人で歩かせるという事は奮戦地帯を裸で歩くようなものだ。
「その医師ってのはひょっとして30前後の若いやつじゃないスか？」
「そうだが・・・？居場所を知っているのか？」
「多分・・・」
「教えろ」
「いやです」
何故かはよくわからない。オレはそう口走っていた。
「ホーク。こんなときに冗談を言うな。お前から捕獲してもいいんだぞ」
「それも御免です」

「嫌だ御免だで通るわけがないだろう。お前はいつもそうだ。自分からは動かない。動くとしたら逃亡する時だけ。お前は不変が退屈だと言ったが、自分が何かをしなければ何かが変わるわけがないだろう」
「・・・・・・」
さすがトモさん。オレの監察官だけの事はある。オレの事をオレ以上に見抜いている。
「傑作だ」
「なんだと？」
「オレはいつかリコに言ったんですよ。腐った世界は変わるはずがないってね」
「それがどうした」
「そりゃあ変わらないでしょうね。だってあいつは待っているんですから。いつか何かが起きて世界が変わるのをただ眺めているだけなんですから」
「なにを言っている？」
「だけど待つのはまだまましだ。逃げるよりはずっといい。五十歩と百歩は同じだが、五十歩と零歩じゃ全然違う。だけどそれはどちらがビビりじゃないか、という基準でだ。前に一歩も進まない限り、そいつは戦ってるという事にはならないんですよ」
「お前の戯言につきあってる場合ではないのだがな」
トモさんの声がどんどん不機嫌になっていく。だけどオレはやめない。逃げない。
「間違っていると思うなら自分で正せばいい。そんなのはガキでもわかることだ。そんな簡単なことが大人になると出来なくなる。敵の姿が大きすぎて思いとどまる。それじゃあ何も考えないのと同じ事だ。つまり、そういう事なんですよ」
「で、なんだ。お前は何と戦う？」
「オレが間違ってると思うものとです。ねえ、トモさん。センターを正しいと思いますか？」

「・・・・・・正しいとは言わん。だが、必要なものだ」
トモさんの本音。そう言えばこんなことは初めて気がする。
そう、大抵のものはそうだ。正しいだけのものなんてない。正しさと間違いを内包している。清濁併せ持っている。正しいだけのものは破たんする。そんなもの気味が悪い。
「とりあえず、あいつが見ている完璧な世界でも壊してきます」
電話越しにため息が聞こえた。
「いいだろう。その覚悟に免じて任せてやる。失敗はするな。お前を処分したくはない」
「はっ」
前は逆のことを言っていたな、そういえば。
まあいい。今はどうでもいい。
「そう言えば久々だな、やりたくねえ事じゃなく、やりたい事が出来たのは」
オレは歩く。今度はそぞろ歩きじゃない。ちゃんとした明確な意思を持って足を進めた。

This is your life…you know? 3

教会の扉はゆっくりと開く。今日はもしかしたらいないんじゃないかと思ったが違うらしい。ステンドグラスから光は差し込んでいない。今日は月のない夜。アストラエアが死ぬには絶好の機会だ。蝋燭を灯す神父は静かにオレを見た。

「今晩は」

燭台が1つ1つ光を灯していく。だがそれは神聖な色では決してない。言うならば不気味。あるいは滑稽とでも言うべきか。

「ただの神父じゃねえとは思っていたが医者だったのか」

椅子に腰かけながらオレは言う。神父は薄く口元を吊りあげた。

「いいえ、私はただの神父ですよ。医者というのは間違いです。私は命を救いません。私が救えるのは心だけです」

医師という名の職業というだけの話です、と神父は続けた。

「ふうん、それであんたはあいつを救ったのか」

神父は全ての蝋燭に火を灯し終え、手に持っていた火種を聖母像の手元の台に戻した。

「ええ。そういうことになりますね。彼女の命はもはや救われない。なぜならば、彼女の命を救う事は彼女の心を壊す事だから」

「そして心を救う事は命を殺す事だってか？」

「殺す、という表現はよくないですね」

はっ、言うじゃねえか。

「伊達に恥部じゃねえってか？」

「ふふふ・・・。恥ではあるのでしょうね。だからこそ、こうしてここにいる」

そう言った神父の笑った顔はやはり不快だった。

「彼女がなぜ壊れたのか、ご存知ですか？」

「この世が間違っている、ってことをどこかで知っちまったんだろ？」

その中身が何なのかは知らない。あまり興味はない。
「ええ。この社会がではなく、この世界がという事ですよ。社会が壊れている事は私だって知っています。あの死んだ生体、あるいは生きている死体を見ればそんな事は考えるまでもない」
「あんたも見たのか、あれを？」
まあ、あの病院で医者をやってるってことは少なからずセンターにかかわりがある。知っていても不思議はない。
「ある程度の移植に関する知識があれば臓器の生体保存がいかに有用かは当然わかります。だが、問題はそうではない。そうでしょう？そこが歪んでいる。ひずんでいる。だけどそれはこの社会だけの話。彼女の場合はそうではない」
あの冷臓庫を肯定するか。この男もいい加減狂ってる。だが、まあそんなものだろう。
「あいつはそれ以上の歪みとひずみを見たという事か？」
「あなたは知らないのでしたか。彼女の生家は戦後からずっと日本の政治を牛耳っていたのですよ。名字を聞けば４，５人の総理大臣が思い浮かぶほどにね」
「それがどうした？」
「ここから先は類推するしかありませんが、恐らく彼女は知ったのでしょう。今の世の中を構築するために彼女の父が、祖父が、先祖がどれだけ黒いことを平気でやって来たのか。もちろんただの類推ですけどね」
「・・・・・・」
歴史を紐解けば良くわかる。良い王ほど他者に対しては猛烈に残酷で流血をいとわない。歴史がオレたちに教えるのは、権力とはそういうものだという事。
「はっ、馬鹿だなあいつは」
「どうしてです？」
静かに笑ったオレに対して神父は首をかしげた。
「それじゃあいつの敵は世界じゃねえじゃねえか。自分の名字それ

だけじゃねえか。墓の下の骨壷だけじゃねえか。
隣人が魔物に殺されたから魔王を殺すのか？畑が獣に荒らされたからその種を駆逐するのか？違えだろ？いちいちそんなことしてたら時間の無駄だろ？」
下らねえ。本当に下らねえ。そんなもん目の前の事態から目をそむけてるだけだ。
「ふう、相変わらずあなたにはかなわない。しかし、それを彼女に伝えることができますか？彼女に届けることができますか？」
「上等だ」
オレは立ち上がる。
「めんどくせえんだよ、どいつもこいつも。いちいちいちいち無駄に生きてんじゃねえ。逃げて逃げて逃げて逃げてたらそんなものは病気じゃねえんだよ。それはただのわがままな性格だ。病気は叩いても治らねえが性格は治せるだろうが」
それでも死ぬならあきらめろ。お前は人生が向いてなかったんだ。しょうがねえだろ？向いてないことを無理してやる必要はない。
オーケー。ドンマイ。次頑張れよ。
「じゃあな」
「ええ、さようなら」
そんなぞんざいな別れとともに教会を出る。恐らくお互いに感じていることだろう。オレたちはきっともう会う事もないと。

This is your life…you know? 4

月は見えない。今日は３０日に一度のかくれんぼの日。だからあそこにいるのは月じゃない。比べるのもおこがましいくらいちっぽけな、１人のただの人間だ。
認めよう。あいつはオレと似ている。あいつはオレと同じだ。世界を嫌い、社会を厭う。だが、それは――――オレたちは間違っているんだ。結局オレたちは自分の失敗を失態を失墜を周囲のせいにしているだけなんだ。自分では何も変えられず、自分では何かを変えるつもりもない。戦わない理由を周囲のせいにしているだけなんだ。

「・・・・・・それじゃあ何も変わらねえんだよ」
セーフティネットのない地面に向かって体を傾けたリコの手首をオレは掴む。危なげはない。こんな軽いものを持てないはずがない。こんな箸よりも軽い命を救えない筈がない。
「邪魔をしないでよ。もういいじゃない。月は行ってしまったわ。だから私は月と死ぬの。それですべて終わりなのよ」
オレを振りかえったリコの首筋には依然として包帯が巻かれたままだ。ただし、目は違う。既にそれは死んでいた。
オレは握った手首を離さない。放さない。
「終わっちゃいねえさ。始まってさえいないんだからな。オレたちは所詮個人なんだよ。社会の中に安住しているだけのただの個人。個人がゆえに自由はあっても個人がゆえに力はない。個人がゆえに戦えても個人がゆえに勝利はない。
そうだろ？そういうもんだろ？ただちょっとあがいたくらいで諦めてんじゃねえよ。どうしても変えてえなら死ぬ前に死ぬほど戦えよ！手ぇ抜くんじゃねえよ！オレもお前も月じゃねえだろうが！ただのスッポンだろうが！足掻けよ！もがけよ！それでも駄目だったら誰かに頼ればいいじゃねえか！」

わからない。どうしてオレが、このオレがこんなことを言っているのか。それでもこの言葉はオレ自身の本音で――――本心だ。
リコはオレの手を振りほどこうとする。だが、オレは離さない。
「それは・・・・・・無理よ。いえ、無理だったわ。だから私はこうなったの。だから私は死を望むの。あなたにはわからない。あなたは私とは違うもの。どうして、どうしてあなたまでそんな事を言うの？どうしてあなたまで変わってしまうの？そっちの方へ行ってしまうの？ねえ、どうして・・・？」
「オレとお前は違う、ね。かもな。いや、そうだ。そうに決まってる。オレとお前は違うさ。オレが変わったわけじゃねえ。立ち位置が変わったから、目線が変わったから重なってなかったことに気付いただけだ
だがな、だからこそ、まだ救いがあるんじゃねえか」
「どういう・・・こと？あなたはさっきから何を言っているの？」
下の方にかすかに残る街灯だけではこいつの表情はわからない。だが、わかる。重なって見えたオレだから、わからないはずのこいつがわかる。
「この世界は腐ってる。だからなんだ？腐ったからってまだ終わったわけじゃねえだろ？じゃあまだ足掻けるじゃねえか。まだもがけるじゃねえか。腐ったものが食えないなんて決めつけんなよ。もしかしたら美味いかもしれねえじゃねえか。勝手に悲観してんじゃねえよ。1人で達観してんじゃねえよ。まだ早ええだろ、そんなもん」
オレはリコに何かを伝えようとは思っていない。これは自分自身に対する罵倒で、繰り返してきた自問自答に対する解答だ。
オレはリコの手を離す。リコはまだ飛び降りない。飛び落ちない。今にも折れそうな白く細い両足でタンクの上に立っている。
「選べよ。オレの手を取るか、死を取るか。両方取ろうとか間抜けたこと言うんじゃねえぞ。オレはお前につき合って死んでやるほど生きることに暇してない。
オレは死なない。死にたくねえからな」

「・・・・・・あなたは私にどうしろというの？こんな世界の中でまだ私に生きろと責め立てるの？」
「オレにはお前にしてほしい事なんかねえよ。オレはただ止まり木をなくした哀れな小鳥に居場所を差し出すだけだ。腐った世界の中だけどな」
リコは住んでいる世界が違う。みんなそう言うが、そんなはずがない。こいつは確かにオレの目の前にいて、まだ生きている。かすかながらも生きている。
「私には・・・・・・わからない。だって・・・私は・・・・・・」
「怖いだろ？自分の人生を自分で決めるのは。生きる上で何かをしなくちゃならねえのは。不安で死にそうだろ？死にたくなるだろ？だけどな、それが当たり前なんだよ。逃げてんじゃねえよ！」
そう、許さない。逃げることなど許さない。
「死ねばそりゃあ楽だろうよ。なんせ何も考えなくていいんだからな。だけどそうじゃねえだろ？お前は生きてんだぞ！死にたくなるまでもがいてみせろよ！それでもだめならしょうがねえ。お前は生きるのに向いてなかったんだよ。諦めろ。迷わずオレが殺してやるよ」
「・・・・・・」
「さあ、選べ。死ぬか、生きるか」
リコは自分の掌を見た。何かを掴めるかもしれない手だ。そしてゆっくりとオレを見る。
「・・・・・やっぱりあなたは大きな鳥ね。こんなに強い翼をもっている。ねえ、その背中、私も乗れるかしら？」
リコの手がオレの手を弱く掴んだ。
「いいぜ。オレが落ちるまで、お前一人くらいなら乗せて飛んでやるよ」
「うん」
リコの瞼が次第に重くなる。当然だ。こんな細い体で動き回ることがそもそも無茶な話で。だからこいつがここまでこれたのは単なる

死への渇望だ。それが潰えた今、こいつの原動力は残っていない。
「はあ、どうすっかな」
大見栄切ってみたものの、何かをどうする予定もない。個人が2人になったところで覆せるようなもろい世界ではないからだ。
だが、変えることはできるだろう。覆らないからと言って泣き寝入りする必要はないはずだ。おかしいものをおかしいと主張する。それだけで変わるものもあるだろう。
「あーあ、めんどくせえ」
夜空を見上げるが月はない。空の上にも地上にも月はない。だが、それは今夜に限っての話。明日になればまた恥かしげもなく顔をのぞかせるはずだ。

それから15日後。
何をしたわけでも何が覆ったわけでもない。バイトをして、自殺者をセンターに送る。また毎日の繰り返し。小説のような陳腐な世界。だがオレは知っている。世界の誤植を知っている。それを正す道も正す方法もあるという事を知っている。

「トモさん、あの自殺者の保管方法、めちゃくちゃ気持ち悪いっすよ」
試しにこの前、面と向かって言ってみた。さてさてどんな罵倒が来るのか、はたまた無言で銃殺か、と思っていたら以外にもまじめな言葉が返ってきた。
「それくらい私だって知っているさ。私の内臓があそこから供給されたと知った時、かなりショックではあったな。だが、今のところ、ほかにやりようがない。倫理的には言語道断だから社会には公表していないが、じきそうもいかなくなる。そうだろう？」
と、オレの監察官は言う。やはりどこまでもお見通しらしい。
「じゃあもし万が一ですよ、そうなったらどうするんすか？」

「戦うさ。こちらにも守らなければならないものがある。そこから逃げるわけにもいくまい」
まあ、トモさんは相変わらずかっこいいという事で。
リコはまだ目覚めない。衰弱死の心配はないようなのでいつかは目覚めるのだろうが、ぶっちゃけしばらく眠っていてほしい。あいつが起きたらオレは動かざるを得ない。今まで安穏と暮らしていた所を敵に回さざるを得ない。希望を煽っちまった以上、あいつが死にたくなるまで付き合わなきゃならねえ。それがオレの戦いだ。
戦いと言えばもう一つ、マリの分が残っていた。
ここ一週間で、なんとか持ち直したようで、かなり小食な一般人レベルの食事ならするようになった。
「落ち着いたら一度地方に行くか。親父とお袋にも色々言わなきゃならねえからな」
やれやれ、２０年以上逃げてきたらこんなにもツケがたまっちまった。

夜になって教会まで足を延ばした。神父の姿はそこにはない。トモさんにも聞いてみたが、行方知らずだそうだ。センターの内実を知っているだけに躍起になって探しているみたいだが、オレには正直興味はない。きっとあいつは公表なんてしないだろう。そういう種類の人間だ。
ステンドグラスから眩しい光が注いでくる。神父がいなくなって初めてまともに見たが、造りは精巧で、こんな郊外に置いておくのはもったいない気さえする。
「まあいいさ。そんなもんだろ」
教会を出て見上げた貯水タンクの上には誰もいなかった。なんとなくそこに立ってリコが見ていた景色を眺めてみる。
ここで初めてリコと会ったとき、あいつは月が欠ける理由を聞いた。答えよう、月は欠けない。ただ単に翳るだけだ。欠けたものは戻らないが、翳ったものは照らしてやりゃあいい。

「ふん、今日はその必要もないってか」
オレにできることは翳った月を照らしてやることくらいか。
「って、そっちの方がきついじゃねえか」
しょうがねえか。今のオレはなぜか今までのオレの中で一番やる気だ。これがどこまで続くかわからねえけど、行けるとこまで行くのも悪くない。
「じゃあな」
満月に別れを告げて家路につく。何もしなくていいのも今日限り。明日からは翳った分だけ照らさなければならない。それはきっと誰もやったことのないことで、オレからすれば望むところなわけだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8287s/

アスタ・ラ・ビスタ！

2011年7月8日09時37分発行